
雁野ゆいら
金蘭の王国
君想う夜に夢の花は咲く
角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

君想う夜に夢の花は咲く

薙野ゆいら

BEANS BUNKO
16081
角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

君想う夜に夢の花は咲く

薙野ゆいら

16081

角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

君想う夜に夢の花は咲く

序　章	手を伸ばしたのは	7
一　章	終わりの鐘と始まりの炎	9
二　章	運命の夜をこえて	37
三　章	車輪は回る	87
四　章	王都	125
五　章	家族の絆	149
六　章	崩壊の夜明け	189
七　章	その心を貫いて	223
あとがき		249


火雷明王(からいみょうおう)
綺理が降臨させた乾ノ神衆。強大な力をもつ。
真羅(しんら)
綺理たちが幼い頃《契約》を結んだ大淵妖。妖王の分身。
翔波(しょうは)
綺理たちの幼なじみの正三位乾術師。冬惺に絶対の忠誠を誓う。

登場人物紹介



冬惺（とうせい）
白桜王家・春怜王の弟。綺理のいとこで、護国大将軍の位をもつ。

綺理（きり）
瑛国の大貴族・玉造家の姫だが、毒薬の調合が趣味の型破りな少女。

本文イラスト／香坂ゆう

序章　手を伸ばしたのは

――本当はわかっていた。
手を伸ばしたのは、金の髪がとても綺麗だったからだ。

『痛い！』
はっとしたときには、少女が頭を押さえて振り返っていた。
大きな深緑の瞳がこちらを見る。その目じりににじんだ涙に、後悔が胸をよぎったが、それはすぐにある苛立ちに取って代わられた。
『なにするのよ！　いきなり髪引っ張って！』
『そっちこそ、誰にことわってこの宮をうろついている？』
つっけんどんに言って、つかんでいた髪の房を乱暴に放す。
認めたくなかったのだ。ちょっと触るだけのつもりだったのに、うっかり引っ張ってしまった自分の馬鹿な失敗を。なぜ彼女の髪に触りたいと思ったのか、その子供じみた理由を。
だから自分の気持ちをすりかえた。
腹が立ったからだ、と。自分が欲しくても手に入れられない金蘭王家の金髪を、彼女が持っ

ていることが腹立たしくて、それで意地悪をしたのだと。

初めから意地悪をするつもりでやったのだから、泣かれたって知らない。かまわない。どうせ最初だけ仲良くしてみたって、自分が『白桜の面汚し』だと知ったら、きっとこの子は離れていく。だから嫌われたって平気だ。——平気なのだと、自分に言い聞かせた。

だけど、本当はわかっていた。

彼女が泣き出さずにこちらをまっすぐに見たとき、自分は確かにほっとしていた。

『なによ、偉そうにしちゃって！　あなた、どこの子なの？』

『勝手にここに潜りこんできたくせに、人に名乗らせるのか？　おまえこそどこの誰だ』

本当はわかっていた。彼女の名前は綺理。玉造家の二の姫で、今度この離宮で預かることになったという一歳下の従妹だ。

彼女が来るのを、自分は心の片隅で待っていた。仲良くできたらいいなと、ほんの少しだけ期待していた。一目見て、光のようにまばゆい金髪に目を奪われた。彼女が振り返ったとき、可愛い子だなと思った。目が合った瞬間、胸が騒いだ。

——本当はわかっていた。

初めて会ったあのときから、自分にとって彼女は『特別』だった。

一章　終わりの鐘と始まりの炎

夕暮れの鐘が聞こえる。
あの鐘が鳴ったら、屋敷に帰る時間だった。
もっと遊んでいたかったのにと口々に言いながら、夕日に染まったあぜ道を三人で走った。
――あの鐘の音が、楽しい遊び時間の終わりを告げる合図だった。

（……あ、夕暮れの鐘）
どこからか響いてきた鐘の音に、綺理はまどろみから覚めた。
屋形車に揺られてうとうとしている間に、ずいぶんと進んでいたらしい。あの懐かしい晩鐘は玉造院で鳴らしているもので、それがこれほどはっきり聞こえるということは――。
「わっ、ひょっとしてそろそろ到着？」
急いで物見窓を開けると、北部の湿った秋風が吹き込み、綺理の長い金髪を揺らした。
髪を押さえて見やれば、夕映えの空の下に懐かしい風景が広がっている。
天剣山脈のふもとからずっと続く、広々とした田畑。その間には、西山道を警備する地方府の土塁や物見櫓が、昔と変わらずどっしりと鎮座している。

身を乗り出して行く手をうかがうと、紅葉した木々の間から里の入り口の門が見えてきた。

玉造の里だ。

豊かな森と山に囲まれたあののどかな里こそ、玉造家の古くからの本拠地であり、綺理、冬惺、冬惺の従者の翔波がかつて一緒に暮らしていた思い出の場所である。

「みんな昔のままかと思っていたけど、あそこの橋、新しくしちゃったんだ。前の小さい橋のほうが高欄に座りやすかったのにな。でも小川の飛び石は全部あの頃のままね。あっ、あのお屋敷、今年も柿が鈴なり。いいなあ、昔より枝が伸びてて盗りやすそ……」

「姫さま」

同乗する侍女二人の咳払いに、綺理は黙った。おとなしく屋形車の中に引っ込むと、侍女の片方、桂鈴が物見窓を閉めてため息をつく。

「そうやってはしゃがれるお気持ちもわからないではないのですけどねえ。年が明ければ綺理さまもじきに十七。年相応の落ち着きというものを身に着けられませ」

「そもそも綺理さまは、あと四日で正式に婚約をなさる身でしょう。そうして来年冬惺さまが晴れて成人なさったら、今度は王都で婚礼。いつまでもお子さま気分でいてはいけません」

「……はい」

もう一人の侍女の梨英にもぴしゃりと言われ、綺理は首をすくめた。

今回こうして帰郷を果たしたのは、綺理と冬惺の婚約式を挙げるためなのだ。

仮にも王弟の婚約式を地方で行うというのは異例のことだが、もともとこの縁組みは、南部に基盤を持つ白桜王家と北部とのつながりを強めるためのもの。閉鎖的な北部の貴族社会に冬惺が入っていく、ということを示す意味で、婚約式は玉造の里で行うことになったのである。

だがその前に、綺理にとってはある意味婚約式以上に重要なことが待っているため、どうしてもそわそわしてしまう。

――玉造の里に着いたら、夜に二人で屋敷を抜け出して夢雪草の花を見に行く。

冬惺と、そう約束をしているのだ。お互いに、二人きりで話したいことがあるからといって。

そして綺理は、そこで冬惺に年来の想いを告白しようと決めている。

（今夜……今夜よね、たぶん。今日はこのあと、お父さまに到着の挨拶をする以外は予定が入ってないし。夢雪草がちゃんと咲いているといいんだけどな。……うわあ、どきどきする）

冬惺は驚くだろうか。きっと驚くだろう。あの鈍感な従兄は、今まで綺理の気持ちにさっぱり気づいていなかったのだから。

けれどそう悪い結果にはならない、と思う。自分たちはいずれ結婚するわけだし、今後は少しずつ異性として見てほしいと求めるくらい許されるはずだ。

（……でも冬惺の話ってなんなんだろ。緊迫した話じゃないとは言っていたけど、わざわざ『婚約式の前に話したい』って、いい話なのかな、悪い話なのかな。――はっ。そういえばこの場合、どっちから先に話をするべき!?　告白が先？　あと？　出たとこ勝負!?）

考えはじめると、どんどん細かいことまで気になってきた。約束の場所は森の奥なので活動的な細袴で行くしかないが、それでは告白する乙女の恰好としてどうなのだろう、などなど。

到着まで暇な分、余計にそわついて仕方がない。落ち着きなく身じろぎする綺理に、告白計画を知らない梨英たちは再びため息をついた。

「……綺理さま。子供時代はもう終わりなんですよ」

もちろんそんな乙女の一大決心のほかにも、考えるべきことは山ほどある。

玉造の里に来る途中、綺理たちは翔波の故郷である鏡作の里に立ち寄った。翔波が鏡作家の当主位を継ぐために、必要な儀式があったからだ。

最終的に翔波は当主継承の儀を立派に果たし、当主の証である神宝『月氷澄の鏡』を得た。

しかしその際、神宝の奪取を狙って横槍を入れてきた人物がいる。

紅楓方の若き将軍、鷹居の空騅だ。

国外に亡命中と思われていた彼がひそかに瑛国に戻っていたということは、近いうちに紅楓王家が瑛国の玉座を狙って動き出す可能性がある。空騅本人も、冬惺との戦いで深手を負っていたにもかかわらず、いったいどうやって逃げのびたのか行方が知れない。

そしてさらなる問題が、妖王万宵である。

瑛国のあるこの北瑛島を、丸ごと淵海に沈めようと企んでいる悪しき淵妖の王。その魂が淵

海から喚び出され、今も地上のどこかにいるのだ。

『魂だけで地上に来た万宵には、実質ほとんど力がないのだよ。淵妖を操ることはできても、自分は湿ノ力を使えない。依代がなければ長くは行動できないし、その行動力も依代によって制限される。人間に憑りついている間は人間の足で行ける範囲にしか行けない、という具合にね。――だから万宵は、この私の体と力を乗っ取ろうとする』

妖王の分身でありながら人間に味方している真羅は、そう言って眉をひそめた。

継承の儀を行った日の午後のことだ。鏡作邸の離れで、「逆に真羅が万宵を乗っ取ってしまえばこちらの勝ち」と方針を定めたあと、綺理たちはそのまま作戦会議に移っていた。

綺理たち三人と、乾ノ神衆の火雷明王がじっと耳を傾ける中、真羅は続ける。

『厄介なのは、依代の中に潜られると外からはなかなか見破れないことなのだよ。万宵が依代の体の主導権を得ているときは気配でわかるが、そうでないときはこの私でもかなり集中して探らねばわからない。従者の力なら見抜けないことはないが――』

話をふられた翔波は、渋い顔で片眼鏡を示した。

『いくらなんでも右目をずっと銀色にしていたら、片眼鏡でも誤魔化せないよ』

翔波には淵妖の隠形を見抜く特異な力があるが、それは真羅と《契約》をしたときに彼の強大な力に触れた影響で得たものだ。右目が人ならざる色に変わっているところを誰かに見られ、大淵妖と禁忌の《契約》をしたことが露見すれば、即座に身の破滅となる。

『だろうね。従者は人前では力を使えない。キリの耳なら淵妖同士の会話を盗み聞けるだろうが、万宵が自分に関わる情報をおいそれと話させるとは思えない。雛鳥にもその手の能力はまったく期待できない。万宵が本気で身を隠そうと思えば、こちらから捜し出す手段はない』

窓辺で腕を組んでいた火雷明王が、雛鳥呼ばわりに眉間のしわを深くした。だが口を挟まなかったところを見ると、彼が有効な手立てを持っていないというのは事実らしい。

『おまけに万宵は、その気になれば依代を替えられる。……ま、よほど気に入った器がなければ、一度馴染んだ依代をほいほい替えるとは思わないがね』

『？　普通は別の依代に移れないものなの？』

綺理が首を傾げると、真羅は一つうなずいた。

『普通、淵妖は生き物には憑依しないのだよ。生き物に憑りつくとだんだん体が混ざって、淵海に還る以外の方法では離れられなくなるのでね。だから私も少年に力を貸すときは太刀を介しているだろう。――だが今の万宵は魂だけ。融け合う生身の体がないから、依代から自由に離れられる』

真羅の体から弾き出された直後は、万宵はひとまず近くにいた生き物に憑依しただろう。だが今も同じ依代を使っているとは限らない。依代を特定する手がかりはないということだ。

『結局は向こうの出方を待つしかない……というわけか』

苦々しく言った冬惺に、真羅は「残念ながら」と肩をすくめた。腰かけていた小卓からふわ

りと下り、翡翠の瞳で全員を順繰りに見る。
『一応私も、あちこちの雑魚淵妖を締め上げて何か知らないか探ってみるが、まあ無駄骨だろう。万宵がいつ、どんな形で仕掛けてくるかは予想がつかない。――気をつけたまえよ』

そんな状況を、綺理は決して忘れていたわけではないのだ。
しかし空騅にしろ万宵にしろ、四、五日やそこらで新しい策謀を一からめぐらせるのは無理だろう。特に空騅は重傷を負った身だ。紅楓方も、名将の呼び声高い空騅の回復を待たずして不用意に動き出すとは考えにくい。
だからこちらにも、まだ目先のことに心を浮き立たせている余裕があった。なにより警戒心がゆるんでいた。
――この玉造の里は、綺理たちにとって安心して帰ってこられる『家』だったから。

「意外というか、拍子抜けしたな」
広大な玉造家本邸の廊下を歩きながら、冬惺がぽつりとつぶやいた。
綺理はその意味を正確に察してうなずく。

「そうね。お父さまのことだから派手な出迎えの式典でも用意しているかと思って覚悟していたのに、びっくりするほどあっさりだったというか……」

「いや……。屋形車六台、騎馬四十五騎、王都の玉造のお屋敷の家人がほぼ総出で参加の大行列っていう時点で、既にびっくりするほど派手だからじゃないのかい？」

翔波が人馬で埋めつくされた前庭を振り返ったが、綺理は腑に落ちずにうーんと唸った。

綺理の父、玉造公影珀は、北部の大家であることに並々ならぬ矜持を持っている人間だ。常ならばこうした機会に積極的に権勢を誇示するだろうに、どうも父らしくない気がする。

（まあ無駄に仰々しい儀式がなくて、よかったといえばよかったんだけど……）

綺理が首を傾げていると、隣で冬惺が長く息をついた。

「なんにせよ、早く影珀叔父上に到着の挨拶をしないとな。西山道の件は早急に話し合わないとならないし」

「西山道の件？」

「ここに来る途中、西山道で崖崩れがあっただろう」

言いながら、冬惺はある一方を指で示した。矯正不可能な方向音痴である彼が指差したのは、西山道とはまったく違う方向だったが、綺理も翔波も野暮なつっこみはしない。

問題の崖崩れが起きたのは、綺理たちが鏡作の里に行く数日前のことだ。どうやら空雛が綺理たちを鏡作家領に寄らせるため、玉造の里の手前の地点で街道の封鎖を図ったらしい。

「あの件だが、いまだに西山道の復旧が進んでいないんだ」
「！　どうして？　だってもう十日近く経っているはずでしょ」
驚いて冬惺を見上げると、横から翔波が言いにくそうに答えた。
「それがさ、地方府が復旧作業を始めようとしても人足と資材が集まらないらしいんだ。ほら、その……影珀さまが婚約式の準備のほうに人手を徴集しているらしくて」
「……それ、明らかにまずいじゃない」
綺理はさっと顔を曇らせた。
西山道や西海道のような主要街道は、その土地の領主ではなく王権の支配下にある。地方府はそうした街道の警備や保守、駅家の管理などを行うために各地に置かれた官庁だ。
だが領主にしてみれば、己の領内に別の権力機構が兵力を備えて居座っているようなものである。独立心の強い北部貴族にとっては目の上のたんこぶともいうべき存在なので、たいていどこでも摩擦が絶えない。
（でもだからって、地方府の仕事を邪魔してまで力関係を見せつけることはないでしょ！）
こんな形で示威を行うくらいなら、派手な出迎えのほうがよっぽどましだ。父がこういう横暴をやるから、春怜王も玉造家の力を抑え込もうとするのではないか。
「それで地方府から冬惺に、お父さまにとりなしてほしいって嘆願が来たの？」
「ああ。だが影珀叔父上がそこまでして婚約式に人手と資材を回しているなら、俺たちの出迎

えも大仰なものになるだろうと踏んでいたんだがな……」

だからいっそう「拍子抜けした」のだろう。冬惺は妙に賑やかさの足りない邸内を見回していたが、綺理の表情に気づくと立ち止まった。琥珀の瞳がやわらぐ。

「そんな顔をするな、綺理。影珀叔父上のことでおまえが責任を感じる必要はない。叔父上に話をつけるのも俺に任せておけ」

ぽんぽんと軽く頭を叩かれて、綺理はごめんねと謝りかけた口を閉じた。だが綺理と結婚すれば、冬惺にはますます影珀との折衝役が回ってくることになる。彼はそれについてどう考えているのだろう。いきなり面倒だと思われてしまったのではないだろうか。

綺理の不安とは裏腹に、冬惺はにやりと笑んだ。

「それにおまえは、そんな風に眉間にしわを寄せないほうがいいぞ」

いつもの毒舌が飛び出しそうな予感がして、綺理は身構えた。

「不細工だって言いたいの？」

「笑っていたほうが可愛いと言いたいんだ」

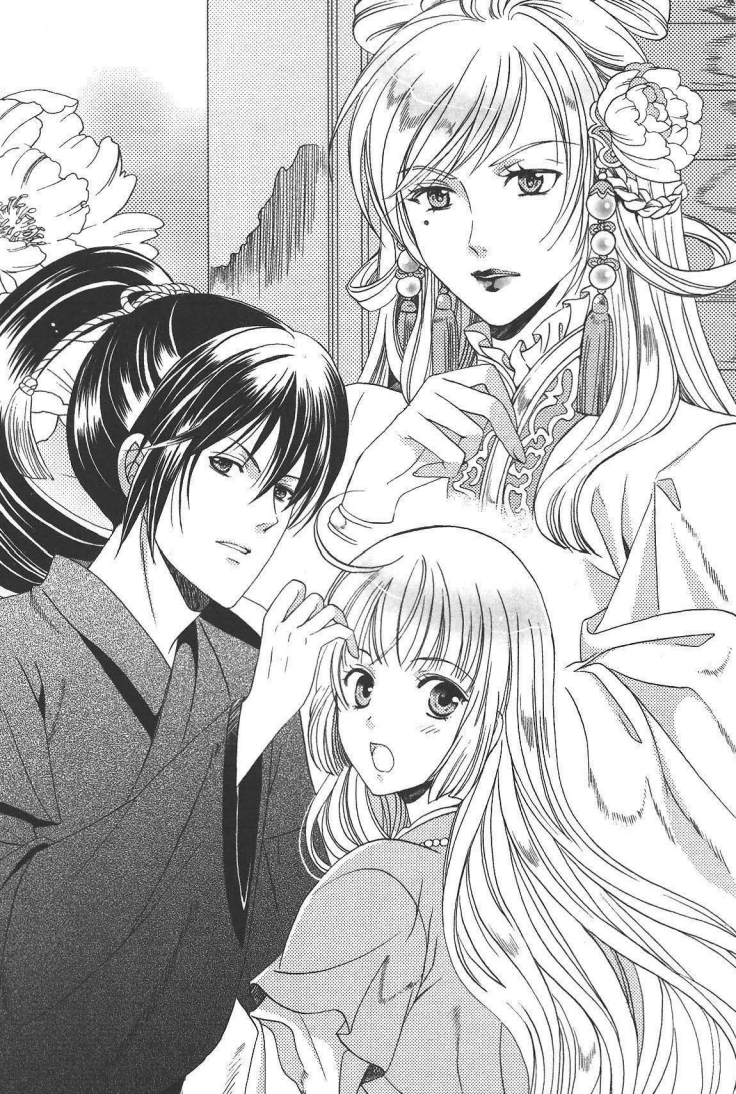
（っ!?）

完全に不意打ちだった。

心臓がひっくり返り、血が急激に顔面に集まる。心拍数が一気にはね上がったせいか、息が苦しい。本気の顔でそんなことを言われて、いったいどんな反応をすればいいというのか！

綺理が口をぱくぱくさせていると、冬惺がふと目をそらした。
「――ひゃっ！」
突然、頭を押さえるように下を向かされる。いつになく乱暴な仕草で金髪をかき回され、戸惑っていると、頭上で冬惺がむすっとした声を出した。
「翔波。おまえ、なにをさりげなく遠くに行こうとしている」
「いや、なんかつい、二人だけで放置したくなったというか」
翔波が遠慮がちに戻ってくる気配がする。綺理は決まりが悪いやら、どうすればいいかわからないやらで、誤魔化すように憤然と顔を上げる。
「もう！　冬惺って、なんでいつも私の髪をぐしゃぐしゃにするわけ!?　女の子の身だしなみを滅茶苦茶にするなんて、私以外の子にやったら嫌われるわよ？」
本当は、冬惺が触るからわざと髪を結い上げないようにしているのだが、それは永遠の秘密だ。怒ったふりをしてそう言えば、冬惺がぷいとそっぽを向いた。
「うるさい。綺理が悪い」
「なにそれ、意味わからない！」
「わからなくていい。――ああもう、元通りにすればいいんだろう？　櫛、貸せ」
綺理は反射的に懐から櫛を出しかけて、ここが廊下のど真ん中であることを思い出した。誰に見られるかわからないこんな場所で冬惺に髪を梳かしてもらうなんて、恥ずかしすぎる！

「い、いい。自分でやる！　翔波、鏡貸して！」
「……ええと。もう君たち、そのへんの部屋に入って存分に続きをやったらいいと思うよ？」
「存分にもなにも、髪を梳かすくらいすぐ終わる。いいから俺に任せてじっとしていろ」
「や……、いいってば！　ええと、ほら、こんなの手櫛で元通りだから！」
動揺のあまり挙動不審になりながら、手早く髪を整える。
と、綺理に思い切り拒否されてむっとしたのか、冬惺が再び手を伸ばしてきた。綺理は髪をかき乱されるのを阻止しようとして、いつものようにじゃれ合いになる。
そんなときだった。
「――相変わらずね、あなたたち」
冷めた声と共に、かんざしの垂れ飾りがシャランと鳴る音がした。
振り向けば、廊下の角に一人の女性が立っている。
くすんだ金髪を銀と水晶のかんざしで結い上げ、落栗色の襲の装束をまとった、背の高い人物だ。しっとりした装いと女性らしい体つき、冷めた表情と右目の下の泣きぼくろが相まって、二十一という年齢よりも大人びて妖艶に見える。
「玻璃お姉さま……」
「お久しぶりです、玻璃義姉上」
冬惺が手を下ろして向き直ると、綺理の五歳上の姉、玻璃はそっけなく挨拶を返した。



くだけているとも、よそよそしいともいえる態度に、綺理は緊張する。この姉とは二人きりの姉妹だが、一緒に暮らしていた時期が短く、歳が離れているせいもあって、あまり親しいとはいえない。特に仲が悪いわけではないと思うが、なにを考えているのかわからない人だ。

「来ていらしたんですね、お姉さま」

「妹の婚約式だもの。来ない道理があって？」

玻璃は口の端をわずかに上げると、碧玉の瞳で綺理と冬惺を見比べた。

「ずいぶんと楽しそうに戯れていたけど、せいぜい今のうちにべたべたしておくことね。そうやって無邪気に仲良くしていられるのも、今だけでしょうから」

これから婚約する者たちへのはなむけとは、とうてい思えない台詞だ。冬惺が琥珀の瞳をまたたかせる。

「義姉上の経験談ですか」

「……皮肉はあなたの専売ではないということよ、冬惺公」

玻璃は一瞬片頬を引きつらせてから、感情を抑えた口調で返す。

（ていうか、やっぱり皮肉なんだ……）

おめでとうの一言くらいは言ってもらえると思っていただけに、綺理はへこんだ。

不穏な雰囲気に追い討ちをかけるように、玻璃の後ろからもう一人の人物がやってくる。

やや癖のある金髪を無造作に束ねたその青年は、冬惺と同じ琥珀の瞳で綺理たちを見ると、

含みのある暗い笑みをのぞかせた。
「ふん……。来たのか、冬惺」
冬惺がすっと綺理の前に出て、彼と対峙する。
「いつぞやの殿上会議以来ですね、夏憬兄上」
白桜王家の三兄弟の真ん中であり、玻璃の夫――夏憬。
彼の登場は、玻璃が現れた時点で半ば予想していたものだ。それでも不仲な王弟たちの対面に場の空気が張り詰め、黙って控えていた翔波も表情を硬くする。
「夏憬兄上が私たちより先にいらしているとは思いませんでした。てっきり婚約式ぎりぎりを狙ってのご到着か、原因不明の突発的なご病気で欠席になるかと」
「私が来てはいけなかったとでも言いたげだな。白桜の面汚しの分際で、何様のつもりだ」
夏憬が冬惺の黒髪を――金髪の王家にあっては異端の色を睨む。
「失礼。兄上が私の婚約祝いに真っ先に駆けつけてくださったのが、驚天動地だったもので」
「……生意気な弟を祝いに来たわけじゃない。義妹の婚約祝いだ」
夏憬の口元に、また暗い笑みが浮かんだ。いつもの彼なら気色ばんでいるところなのに、珍しい反応だ。くつくつと陰にこもるような笑い方をするのも、短気な彼らしくない。
「のん気なものだな。ここでなにが起こっているのか知りもしないで」
「？　まさかあれから、叔父上と地方府がさらにこじれたんですか？」

純粋に驚きを示した冬惺に、玻璃が「夏憬」と夫をたしなめるように袖を引いた。夏憬は肩を震わせるようにして冷笑し、意味ありげな目つきで弟を見る。

「まあそんなところだ。どうせじきに地方府は黙るし、おまえの出る幕はないだろうがな。——おまえも、なんでも自分の望むとおりに収められると思うなよ」

夏憬は捨て台詞を残すと、綺理たちに道を空けさせて去っていった。玻璃は彼について歩み出すと、一旦足を止め、義弟とその従者を肩ごしに振り返る。

「そうそう。あなたたち二人は昔使っていた部屋ではなくて、東の離れの客殿に滞在することになっているわ。あとでお父さまのほうから、そちらに挨拶に出向くって」

「え……」

「綺理。あなたはお父さまへの挨拶はいいから、自分の部屋でおとなしくしていなさい」

事務的に言って、玻璃はふと冬惺に視線を据えた。碧玉の瞳にかすかに憐憫の色がにじむ。

「——あなたには同情するわ、冬惺公」

(……？)

それが夏憬の敵意についてのものなのか、影珀との折衝が困難だという意味なのか、綺理には判断がつかなかった。そのどちらでもないような気もした。

困惑する三人を置いて、玻璃は今度こそ立ち去る。入れ替わりのようにやってきた本邸の家人が、冬惺と翔波にこのまま東の離れに来るよう丁重に告げた。

「今すぐに、ですか？」
「はい。ご案内いたします」
案内されずとも冬惺や翔波には勝手知ったる我が家なのだが、現在本邸に仕えている者たちは、王都から同行してきた綺理付きの家人たちと違って堅苦しい。
「……、あー……」
応対する翔波が、困ったようにこちらを見た。綺理の告白計画を知る彼は、二人の部屋が離されてしまうと、示し合わせて夢雪草を見に行くのが難しくなると危ぶんでいるようだ。
そんな幼なじみに、綺理は苦笑を返す。
（昔の冬惺の部屋だったら、近いし行き来も簡単だったんだけどね……）
家人の手前、屋敷を抜け出す手はずの相談はできない。父と冬惺の話がいつ終わるかもわからないし、今日のところはあきらめよう。――綺理は冬惺に目でそう伝えようとしたが、その矢先に彼が綺理の耳に唇を寄せてきた。
「――窓の掛け金を外しておけ。今夜、おまえの部屋に行くから」
低いささやき。あたたかい吐息に耳朶をなぞられて、綺理の頬や首筋がかっと熱を持った。思わず肩がびくりと震えてしまい、恥ずかしさにますます体が火照る。
（や……やだもう。いつもよりほんのちょっと距離が近いだけのただの内緒話なのに、過剰反応して絶対に変に思われた！）

綺理が真っ赤になってうつむくと、数秒間があって、なぜか冬惺が焦ったように付け足した。
「いや、変な意味ではないからな。俺はただ、例の約束を――」
「？　変な意味？」
脈絡からして、夢雪草を見に行く約束のこと以外にないと思っていたが、なにか誤解の余地でもあっただろうか。つかの間、二人の間に沈黙が下りる。
「……って、だからどうして急に髪をぐしゃぐしゃにするの!?」
「うるさい、おまえが悪い！」
「なんでよ！　冬惺って、私にならなにをしても嫌われないって知っててやってない!?」
「――綺理さま。冬惺公閣下をご案内いたしますので」
こほん、と家人に咳払いをされ、綺理ははたと我に返った。冬惺と初めて会った十年前ではあるまいし、この歳になって廊下の真ん中で喧嘩はまずい。
「え……と。それじゃ、ね」
なんとなく引き止めたい衝動に駆られながらも、綺理はそっと二人に手を振った。
先ほどの内緒話の趣旨を察していたのか、翔波が頑張れと言うように片目をつぶる。冬惺は綺理の髪を手櫛でざっと整えると、優しい手つきで頭をなでた。
「ああ。――また、あとで」
そうして冬惺と翔波は家人と共に歩き出す。同じ屋敷の中なのに、なんだか彼らが遠くに行

ってしまうような感覚に襲われて、綺理は二人の後ろ姿をじっと見送っていた。

そのわずか半刻ほどあとのことだ。

（……なんでこうなるの）

綺理は、透かし彫りが施された優美な長椅子に腰かけ、途方に暮れていた。

玻璃珠を嵌め込んで天の星々を表した天井。その天井から下がり、微風にそよいでさらさらと鳴る繊細な玉飾り。螺鈿の装飾が施された調度の数々に、銀を透かし彫りにした香炉――。

玉造家伝来の宝物が配され、典雅な北部風に統一されたこの八角形の居室は、八稜楼と呼ばれる楼閣内の部屋である。

――完全に当てが外れた。自分の部屋にいろと言われたから、自室で今夜の約束に備えていたのに、ほどなくしてこちらに移るようにと本邸の家人が呼びにきたのだ。

（どうしよう。なんとかして冬惺に報せないと入れ違いになっちゃう。でも抜け出そうにも、そんなに簡単に下りられる高さじゃないし……。そもそもなんで急に部屋替えなんてすることになったの？）

それに、と綺理は衝立のそばに控える侍女たちを一瞥した。

「ねえ。梨英や桂鈴……私の侍女たちは？」

「部屋や配置の調整がありますので、しばらくは私たちが綺理さまのお世話をすることになっております。御用がありましたら私たちにお申し付けください」

年かさの侍女が淡々と答える。綺理の周囲は彼女たち本邸仕えの者に固められ、王都から共に来た侍女衆や家人たちとは顔を合わせていない。その上こちらの侍女たちは、部屋替えの理由などなにを尋ねても「存じません」の一点張りだ。

「――少し、外の風に当たりたいんだけど」

庭に下りたくてそう言ってみたら、侍女たちは「かしこまりました」と部屋の窓を開けた。

「……。もういいわ、みんな下がってくれる？」

窓から吹き込む夜風に、綺理はどっと疲れた気分になった。侍女たちを下がらせて一人になっても、扉の外には明らかに人の気配がある。

（なんか、閉じ込められているみたい）

綺理は窓辺に行くと、淡い月明かりの里をぼんやりと眺めた。

懐かしい故郷に帰ってきたはずなのに、昔とは違うことばかりだ。違うこと、妙なことが少しずつ積み重なって、なにかひどくおかしなことが起きているような気がしてくる。

（真羅が来てくれたら屋敷の様子を見に行ってもらえるし、冬惺への伝言も頼めるのに……）

といっても真羅は、万宵の行方を探るためにしばらく綺理たちから離れている。いつ現れる

とも知れない彼を、当てにはできない。

ひやりとした風が、ため息をさらっていく。湿り気を帯びたこの風は、森の向こうにある内淵海――閉じた泥の海から吹くものだ。七年前、綺理たち三人が勾玉の釣り針で真羅を淵海から釣り上げ、彼と《契約》をしたのも、この近くだった。

何の気なしにそちらに目をやって、綺理はあることに気がついた。

（東の離れって、ぎりぎりここから見えるんだ。冬惺が窓の外を見てくれたら、こっちに気づくかも……って、この距離と暗さじゃ無理よね……）

綺理は役に立つ物を探して室内を見回し、ふと蒔絵の手箱に目を留めた。

「いくらなんでもさ、遅すぎるよね」

「――そうだな」

窓辺に立ってじっと外を眺めていた冬惺は、苛立ちのにじんだ声に振り返った。

離れの棟の広々とした居間にいるのは、冬惺と翔波の二人だけだ。

挨拶に来ると聞いていた玉造家当主影珀は、一刻以上待ってもいまだに姿を見せない。

翔波が、淹れなおしてはまた冷めた茶を片付けながら、ぼやく。

「地方府と深刻にもめていて忙しいのかもしれないけど、王弟で護国大将軍の君をこんなに待たせておいて説明役の一人も寄越さないってどういうことだよ」

「頭を使え、お人よし。どう考えてもこれは、故意に待たせているんだろう」

冬惺は腕を組んだまま肩をすくめた。翔波が眉をひそめる。

「――それってつまり、地方府に対しての示威行為と同じ？　影珀さまは君を軽んじてみせることで、君より自分のほうが立場が上だと示したいのかい？」

「正確には、俺というより春伶兄上に対する示威だろうな。王権の下風に立つ気はないという意思表示。俺と明花の縁談の件で顔に泥を塗られたから、その意趣返しも込めて……な」

一応こちらも平服で相手を迎えることで対抗するつもりだが、この分では影珀のほうも平服で来かねない。そんなことが続けば、遠からず問題になる。

「悪循環だ。影珀叔父上が増長するから、春伶兄上は玉造家の力を抑制しようとする。春伶兄上が玉造家に強硬姿勢をとるから、影珀叔父上はいっそうがむしゃらに権勢を誇示して、威信を保とうとする……。叔父上はやりすぎだし、春伶兄上は急ぎすぎだ」

冬惺の表情も、自然と苦いものになる。

古き貴族の力を抑えて王権を強化したい、という兄王の考えは理解できる。だがそれはもっとゆっくりと行うべきだ。変化を急げば、強い反発を生んでしまう。

「……また、春伶陛下と影珀さまとでもめそうだね」

翔波が青銅色の瞳を翳らせたが、冬惺は首を横に振る。
「そうさせないために俺と綺理の縁組みがあるんだろう。今までは俺も仲裁役としての発言力がなかったが、綺理と正式に婚約すれば、今後は春怜兄上と影珀叔父上の間に堂々と入ってとりなすことができる。――そうすれば、綺理を不安にさせずにすむ」
西山道の件を話したときの綺理の顔を思い浮かべてつぶやくと、翔波がまたたいた。
「へえ。君も政略のことばかり考えていたわけじゃないんだ」
「それは……考えるだろう。綺理のことなんだから」
政略以外のことといっても、どうでもいいことを考えていたのとはわけが違う。弁解するように言えば、翔波は妙に嬉しそうに微笑んだ。最近この幼なじみの思考がよくわからない。
「ふうん？　まあそうだね。影珀さまとの話がほどほどで終わってくれないと、今夜綺理と二人で出かけられないしね。考えていないわけないか」
「……待て翔波。なぜおまえがそのことを知っている」
「綺理から聞いた。君のほうから誘ったんだって？　心配しなくても僕は仲間はずれとは思わないから、心置きなく二人だけで行ってきなよ」
綺理はおまえになんでも話すんだな――と言いかけて、冬惺はその言葉をのみこんだ。くだらない。翔波は綺理と二番目に仲が良いのだし、あれこれ聞いていてもおかしくないではないか。もともと自分も、最後まで翔波に秘密で出かけられるとは思っていない。

「――ところでさ、君は綺理にどんな話をするつもりなんだい？」
不意に翔波の声が探るような響きを帯び、冬惺は身構えた。
「……別に。馬鹿馬鹿しい話だ」
「馬鹿馬鹿しい話って？」
ずいと正面にやってきた翔波に、思わず身を引く。背中が格子窓に当たった。
「なんだ。どうしておまえにそんなことまで言わないとならない」
「君が誤魔化そうとしているから。それともなに？　僕に言えないようなないかがわしい話？――綺理を悲しませるような話じゃ、ないよね」
翔波の声音がかすかに変わり、冬惺ははっとした。そらした目を戻せば、翔波の目には真剣な光が宿っていて、冬惺も表情を改める。
「……違う。そんなんじゃない。ただ俺は、今まで自分の口から綺理に求婚したことがなかったから」
言うと、翔波が目を瞠った。本当に馬鹿馬鹿しい話だ。婚約式は数日後だというのに、この期に及んでまだ求婚をしていなくて、しかもその事実に気づいたのがごく最近だったなど。
「それにっ、おまえが言ったんだろう。婚約式の前に互いの気持ちをはっきりさせておけと。だから綺理に求婚して、ちゃんと返事を聞こうと……」
おかしなことはなにも言っていないはずなのに、声が尻すぼみになる。冬惺は理由のわから

ない気恥ずかしさをもてあまして、前髪をくしゃりとかき上げた。
「……そっか。よかった。うまくいくといいね」
翔波がふわりと笑う。冬惺は余計に照れくささが募り、顔を背けた。
――そして格子窓の外に目をやった、その次の瞬間だった。
二人は同時に気づいた。
遠くの平野に灯った、夜空を焦がす炎に。
（！）
冬惺の胸を満たしていた熱が瞬時に冷め、代わりに緊迫感が押し寄せてくる。
「なんだ、あれは……」
単なる火事ではない、という奇妙な確信があった。あの明々とした不吉な光は、襲撃の炎だ。
翔波が愕然と叫ぶ。
「あの方向、地方府だ！　地方府が燃えてる！」
途端、冬惺の脳裏に、四年前の記憶が閃光のように蘇った。
――四年前の春の夜。空騅率いる紅楓方の軍勢が玉造の里に攻めてきた。高台にあるこの玉造家の屋敷を目指してたいまつの光が地平から近づき、冬惺たちは里を追われた。
（まさか、また紅楓方の襲撃が――？）
冬惺は身を乗り出そうとして、格子窓がびくともしないことに気づいた。開かない。

胸をかすめた違和感をそのままに、身を翻す。
「母屋に――影珀叔父上に報せなければ！」
「はい！」
翔波は既に走り出していた。冬惺に先んじて部屋を突っ切り、扉へと向かう。
まさにそのとき、扉が外側から大きく開け放たれた。
まず目に飛び込んできたのは、緑だった。
玉造家の私兵だというしるしに、兵が短甲の下に着込んだ緑の衣。
味方の色。――条件反射で頭がそう判断したから、武装した兵たちがどっと部屋になだれ込んできた状況に、冬惺はとっさに対応できなかった。
二人が戸惑っている間に、兵たちが動く。
彼らは槍の柄をくるりと返すと、扉の近くにいた翔波をすばやく打ち倒した。
「……っ！」
「翔波！」
駆け寄ろうとした冬惺を阻むように、目の前で槍が交差させられる。
兵たちが翔波をうつぶせに押さえつけ、その首に革と金属でできた輪をはめた。乾ノ術封じの首枷だ。カシャンと硬質な音が響く。
「貴様ら、なにを――」

冬惺はかっとなったが、周囲から十数本の槍を突きつけられて動きを止めた。
（なにが……いったいなにが起こっている？）
頭の奥で警鐘がうるさく鳴る。裏切り、という単語が浮かんだ。玉造家の私兵の中に、紅楓方に内通している者がいたのか。では母屋はもう制圧されてしまったのだろうか。ならば影珀は？　玻璃や夏憬はどうなった？――綺理は？　綺理も、捕らえられたのか？
ぞくりとした冬惺の前で、部屋を埋めていた兵が左右に分かれた。
扉から、一人の男が悠然と入ってくる。
彫りの深い顔立ち。褐色の髪に、玉造家の碧玉の瞳。一人短甲を身に着けず、上等な綾の装束をまとったその男こそ、冬惺がたった今身を案じていた玉造家当主影珀だった。
「影珀、叔父上……？」
「まずは我が里へようこそ、と言うべきか。よく来たな、冬惺」
影珀が指を鳴らすと、それを合図に両脇の兵が冬惺の腕をつかんだ。太刀を取り上げられ、冬惺は交差した槍の向こうに呆然と影珀を見る。
対する影珀は、冬惺の肩ごしに窓の外を一瞥した。
「ああ、あの炎が見えたか？　始まりののろしは派手に上げろと命じておいたのでな。地方府の制圧はじきに完了する。この玉造の里一円に、目障りな白桜の軍はもうおらん」
（――――）

冬惺は全身から血の気が引いていくのを感じた。影珀の姿を見たときから、認めたくない現実に頭が理解を拒否しようとしていたが、もう無理だった。

地方府を襲い、冬惺たちを離れに隔離して捕縛にかかり、王権に公然と弓を引いたのは、すべてこの玉造公影珀の仕業だ。

「叔父上。あなたは、自分がなにをしているかわかっているんですか……？」

これは。

「わかっているとも。我らは、北部を蔑ろにして南部偏重の専制を行う白桜の春怜を、瑛国の正当な主とは認めない。悪王を廃して瑛国を正しき方向に導くため、義兵を挙げたのだ」

影珀は傲然と言い切ると、口元を皮肉げに歪めた。

これは。

「――もっとも、春怜めの側にはまた別の呼び方があろうがな」

これは――謀反だ。

玉造家が、謀反を起こしたのだ。

二章　運命の夜をこえて

夕暮れの鐘が耳の奥で蘇る。
――あれを聞いたときには、もう三人の楽しい遊びの時間は終わっていたのだ。

告げられた内容を理解するのに、綺理は長いことかかった。
「それじゃ……お父さまが謀反を起こしたってこと？　どうして、そんな、急に」
震える声で問うと、向かいに座る姉は小さく肩をすくめた。
「そんなに急なことでもないのよ。火種は昔からあって、それがとうとう燃え上がったというわけ。それに火種を作ったのも煽ったのも、春怜さまよ」
膝の上で固く拳を握っている綺理とは対照的に、玻璃は椅子にゆったりと腰かけている。
玻璃がこの八稜楼の部屋にやってきたのは、綺理が地方府で上がった最初の炎を目撃してからすぐのことだった。部屋を出ようとした綺理が家人に阻まれて争っているところに、玻璃が「状況を教えてあげる」と現れたのである。
しかし説明されてもなお、綺理の頭はなかなか現実に追いつかない。
（だけど……だって、お父さまは春怜陛下の即位を一番助けた人のはずで。亡くなったお母さ

まは春怜陛下の実の叔母君だったし、お姉さまだって王弟の夏憬殿下と結婚して……）

――だがその姉と夏憬も、この謀反に加担しているのだという。

そして離れに行った冬惺と翔波は、今頃父によって捕らえられていると。

まるで悪い夢でも見ているようだ。足元が崩れ落ち、世界が色を変えてしまったような気がする。綺理は、ぐらぐらする頭で必死に姉の言葉を反芻した。

「火種……って」

「あなたは小さかったから知らないでしょうけどね、本来なら私は王妃になるはずだったのよ。春怜さまが即位したばかりの頃、お父さまは私を春怜さまに嫁がせるつもりでいたから」

玻璃は横髪をさらりと耳にかけながら、言った。

九年前のことだ。当時春怜は十八歳だったが、玻璃はまだ十二歳になるかならないかといったところ。そこでひとまず婚約だけしておこうと、影珀は内々に交渉していたのだという。

「なのに春怜さまはお父さまへの返事を引き延ばして時間稼ぎして、その間に今の王妃さまとの結婚を独断で発表したのよ。寝耳に水の報せ。おまけにお相手は、玉造家よりずっと家格が低くて貧しい、新興の南部貴族――。玉造家に対する当てつけとしか思えないわ」

春怜王があえて家格の低い王妃を迎えたのは、力ある外戚に実権を握られるのを防ぐためだろう――と綺理は思う。だがそこで白羽の矢が立ったのが南部貴族だったという事実は、影珀の北部貴族としての矜持をいたく傷つけたのだ。

「せめてもの救いは、私と春怜さまの縁談が公になっていなかったことね。私も余計な恥をかかずにすんだもの。とにかくそれで、順番が一つずれたのよ。お父さまは本当は私を春怜さまに、あなたを夏憬に嫁がせたかったけど、仕方ないから一つ繰り下げたの。私を夏憬に、あなたを冬惺に……ってね」

だから九年前、冬惺は綺理と一緒に玉造の里で養育されることになった。

玻璃は肘掛けにもたれ、青ざめている妹を流し目で見る。

「そしてその火種が燃え出した原因は、わかるでしょう？」

「……冬惺と明花さまの、お見合い……」

綺理は呆然とつぶやいた。

今年の夏、冬惺と琅公国の明花公女との縁談が王宮を騒がせた。綺理の事実上の婚約者として知られていた冬惺に、別の女性との見合いをさせることで、春怜王は玉造家の権威を削ごうとしたのだ。

この騒動は、琅公国の側から縁談を断らせることで一件落着し、逆に今回綺理と冬惺が正式に婚約をするきっかけになった。——そう、思っていた。

だがあの一件は終わりではなかった。少なくとも父にとっては、始まりだったのだ。

「それじゃ、私たちの婚約式っていうのは最初から嘘だったのね？　婚約式を口実に私たちを里におびき寄せて、堂々と王都の屋敷を引き払って、夏憬殿下とも怪しまれずに合流して！

西山道を封鎖したのも、白桜方の援軍が来られないようにするためで……！」

いろいろなことが腑に落ちる。

婚約式を玉造の里で行うよう要請したのは父。王都の玉造邸の家人がほぼ総出の大行列。少数で動いていたはずの空騅に、崖崩れという大がかりなことを仕掛けるのは難しい。あれは空騅の仕業ではなく、父が謀反のために打った布石だったのだ。

「それでお父さまは夏愼殿下を王にして、今度こそ自分の娘を王妃にするつもりなのね!?」

「ふうん。綺理。あなたは甘いけど、頭は悪くないのね」

姉の淡々とした物言いに、綺理はかっとなって腰を浮かせた。

「お姉さまは、自分がどれだけ馬鹿なことに手を貸しているかわかっているの？　反逆なのよ。戦になるのよ。お姉さまたちは、本気で春怜陛下と戦をするつもりなの!?」

「――訂正するわ。あなたは頭は悪くないけど、馬鹿ね」

玻璃は玉造家の碧玉の瞳で、綺理の同じ色の瞳を見すえた。

「戦をしようとしているのは、私たち玉造家なの。綺理、あなたも立派な反逆者なのよ」

（――っ！）

頭に上った血が一気に引く。綺理は唇を戦慄かせた。

「私は、違う……」

「違わない。未婚で、正式な婚約者もいないあなたは、玉造家の二の姫以外の何物でもないも

の。春怜さまの側にとってあなたは謀反人の娘。――もちろん、冬惺にとってもね」

「――――」

綺理は膝から力が抜け、すとんと椅子に腰を下ろした。

そうだ。それが現実だ。玉造家は――玉造の綺理は、白桜の冬惺の敵になってしまったのだ。

「だったら……だったらせめて、私も冬惺や翔波と一緒に離れに閉じ込めてよ。冬惺たちを捕らえた側になんて、いたくない……っ」

顔を覆い、混乱しきったつぶやきを漏らすと、向かいで玻璃が小さく息をついた。

「やっぱりあなたは甘いわ。あなたがあの子たちのことをしつこく聞いてこないから不思議だったけど、そんな風に思っていたわけね」

「――え？」

「お父さまが冬惺たちを捕らえて、ずっと閉じ込めておくだけだと思っていたの？」

その、言葉の意味を。

悟った瞬間、綺理は一気に現実感を取り戻した。

「――冬惺と翔波になにをしたの!!」

跳ねるように立ち上がり、姉に詰め寄る。

玻璃は激昂した妹をちらと見上げると、肘掛けに頬杖をついたまま片手を振った。

「そう焦らなくても、すぐにはなにもしないわよ。お父さまだって冬惺のことはそれなりに買

っているんだもの。選択肢くらい与えるわ」

「かけなさい。話をしよう」

そう言った影珀の声はいつも通り尊大な響きを帯びていて、椅子に座る動作も、卓に肘をついて指を組む仕草も、普段と変わらず落ち着いていた。

冬惺は縄こそかけられていないが、左右の兵に腕をつかまれて彼の正面の椅子に座らされる。

「……話をする相手に槍を向けたままにしておくのが、あなたの礼儀ですか。叔父上」

「敬意だ。おまえの武勇に対するな」

「臆病の言い換えですね。ですが、武術の心得のない文官まであして拘束するのも、あれの武勇に対する敬意だと言い張るつもりですか？」

冬惺は横目で翔波を示した。翔波は床にうつぶせに押し付けられたまま、後ろ手に木の枷をはめられ、不自由な恰好でなんとか顔を上げてこちらをうかがっている。

小心者でないなら翔波の拘束を解け、と冬惺は暗に言ったのだが、無視された。

影珀は、北部の大貴族としての矜持を傷つけられれば烈火のごとく怒り狂うが、そうでないときはこの程度の挑発には乗ってこない。泰然とした態度を崩さずに言う。

「冬惺。私はおまえの武名を高く評価しているし、身内としての情もある。一時は娘婿にと思って養育していた者の血を流すのは、私とて本意ではないのだ。このままむざむざと敵味方に立場を違えるのは、双方にとって惜しいと思わんか。もしそうなれば綺理も悲しもう」

綺理の名に冬惺がぴくりと反応したのを見て、影珀は続けた。

「単刀直入に言おう。冬惺、おまえもこちら側につかんか？　我々に協力するなら、新王即位の暁には相応の地位と報酬を約束する。――おまえが望むなら、おまえと綺理の結婚をまた考えてもよいぞ」

話をしようと言われたときから、謀反への協力を迫られるだろうとは予想していた。

冬惺個人は自由に動かせる兵力を持っていないが、兵権を預かる護国大将軍が反逆に加わったとなれば国王軍の動揺は計り知れないものになる。

それだけではない。もともと兄王とそりの合わなかった夏憬だけならともかく、冬惺までもが謀反に加担すれば、国王方の内部に不信の種をまくことができる。春怜王の気に入りの王弟でさえ裏切ったのだから、今度は誰が裏切り者になってもおかしくない――と。

だが冬惺にとっては、たとえ身の安全と引き換えであろうと、謀反に与するなど論外だ。

影珀がどんな見返りをちらつかせようが、迷うことなどありえない。

そう、思っていたのに。

綺理のことを持ち出された瞬間、不覚にも胸にさざ波が立った。

卓を挟んで向かい合う冬惺と影珀の間には見えない一線が存在していて、綺理はその線の向こう側にいるのだとはっきり思い知らされた気がした。その線を越えなければ、綺理と共にいることはできない。そして綺理を向こう側に独りにすれば、彼女はどうなる？

冬惺がなにを選ぼうと、冬惺のそばには必ず翔波がいる。だが綺理は。綺理は――。

「……私に春怜兄上を裏切れと？」

努めて冷静に返したつもりだったが、感情の揺れは瞳の揺れとなって外に現れていたようだ。影珀は、冬惺が彼の台詞のどこに揺さぶられたと思ったのか、言葉を重ねた。

「春怜はおまえを可愛がっているように見せて、実際は従順で便利な駒として使っているな。戦の道具、政略の道具……。おまえは武官としての地位こそ与えられているが、身分相応の所領を与えられているとはとうてい言えんだろう？」

「それは、私が綺理と結婚して将来的に玉造家の所領の半分を受け継ぐ前提だったから――」

冬惺は言葉を切った。己の望む返答に誘導した影珀が、薄く微笑む。

「前提は崩れたな。おまえがこちら側に来るというなら、その限りではないが」

線の、向こう側。綺理のいる側。

「……叔父上が擁立しようとしている夏憬兄上は、昔から私を嫌っていますが？」

「新たなる治世で重要になるのは、王の意向ではなく私の意向だ」

冬惺は影珀から目をそらし、視線を下に向けた。しばし逡巡してから、口を開く。
「――もし、叔父上に協力したら、綺理を俺にくれるんですか？」
「閣下!?」
「条件を確認しているだけだ」
驚きの声を上げた翔波を制し、返答を待つ。
「そうだな、おまえの働き次第と言っておこう。成功報酬のようなものだ」
「では俺が協力を拒んだら、綺理をどうするつもりですか？」
「娘というのは、政略結婚の道具にするものだ」
「……っ」
いずれ別の相手に嫁がせる、とほのめかした影珀に、冬惺と翔波は息を詰まらせた。
「協力を拒んだ場合……俺と翔波はどうなりますか」
少しかすれた声で問うと、影珀は肩をすくめた。
「残念だが、おまえたち二人を五体満足で生かしておかねばならない理由はなくなる」
沈黙が下りた。
突きつけられた選択は、死か、裏切りかだ。
しかし冬惺にはみすみす殺されるつもりなどなかったし、死が間近に迫っているという実感もまだなかったから、それは別の二者択一に聞こえた。

兄王への忠誠を貫くか、綺理を取るか。

『おまえは兄の命令と玉造の綺理と、どちらが大事だ？』

以前、兄王にそう問われた。あのとき冬惺は兄王に従う道を選んだ。だが、今は。

『白桜の冬惺。おまえはこの兄と玉造の綺理と、どちらが大事だ？』

想像の中の春怜に問われ、冬惺は目を伏せた。吐息し、ゆるゆると言葉を絞り出す。

「……考える時間をください」

夜の間は乾ノ術が使えないにもかかわらず、影珀が翔波に乾ノ術封じの首枷をはめさせたということは、影珀にはこの場で翔波をどうこうするつもりはない。そしてそれは、彼が冬惺に性急に決断を求めるつもりがないということでもある。

案の定、影珀はあっさりと席を立った。

「夜明けまで待ってやろう。どちらを選ぶにせよ、覚悟を決める時間が必要だろうからな」

「……綺理とも話をさせてくれませんか」

「おまえがこちら側につくなら、また何度でも会わせてやる」

影珀は振り返らずに答えた。兵たちも順に槍を引き、主について部屋を出て行く。

「ならばせめて、翔波の手枷の鍵を」

「ならん。二人一緒にしておいてやるだけいいと思え」
扉が閉まる。
閂のかけられる音が重く響き、冬惺と翔波はがらんとした室内に残された。
冬惺はおもむろに立ち上がり、床に落ちていた片眼鏡を拾って翔波のもとに片膝をつく。
「大丈夫か？」
上体を抱えて起こしてやると、翔波の口元には血がにじんでいた。床に乱暴に倒された拍子に切ったのだろう。翔波はぺろりと傷をなめ、顔をしかめる。
「守り刀を取り上げられました」
それが一番重要だと言わんばかりの従者に、冬惺は苦笑した。確認してみたところ、翔波の持ち物のうち身分証の鏡と月氷澄の鏡は、鈍器にならないと判断されたのか手付かずだった。ただし投擲用の鉄つぶてや、手枷を外すのに役立つ工具類は、すべて奪われている。
（この手枷は、手心を期待しても無駄という影珀叔父上の意思表示か……）
必要とあらば、冬惺たちが相手でも非情な手段を辞さない。そういう無言の脅迫だ。もちろん逃亡の意思をくじく意味もある。冬惺が翔波を見捨てて逃げることはありえないから、翔波の自由を奪って足手まといにするだけでも十分効果があると、影珀は知っているのだ。
救いというなら、綺理についてはこうした手荒な扱いを心配しなくていいということか。綺理は立場上はあちら側の人間で、決して敵方に囚われているわけではないのだから。

「冬惺公閣下」

翔波の背側に回って手枷を検分していると、硬い声で呼びかけられた。顔を上げれば、翔波が肩ごしに振り向いてささやくように問うてくる。

「――どうするんですか？」

青銅色の双眸が、冬惺をひたと見すえる。今は翔波が片眼鏡をかけていないせいか、普段よりも近く、深く、まっすぐに見つめられているように感じる。

――このまなざしから目をそらさずに答えられなければ、それはきっと間違いだ。

冬惺は翔波の瞳に映る自分を見ながら、じっと己の心に問いただす。

自分は決して兄王に向ける刃を持たないと、そう誓った。

綺理のそばにいてずっと彼女を守っていたいと、そう願った。

兄王は裏切れない。綺理は手放せない。では自分には、今後兄王に逆らってでも綺理を守り抜く覚悟があるだろうか――と考えると、やはり行き着く答えは一つなのだ。

冬惺は、翔波から目をそらさずに、答える。

「謀反への協力はありえない。俺たちは今すぐここを脱出して、王都へ戻るぞ」

扉は厳重に閉ざされ、廊下には複数の兵の気配がある。格子窓は開かないように固定されて

いるだけでなく、中に鉄芯が通されているようで、たとえ体当たりしても破れそうにない。さらに窓の外をひそかにうかがえば、何人もの兵が付近を巡回しているのが見えた。

そして当然と言うべきか、室内は武器になりそうなものがあらかじめ排除されている。

「おまえの里の間者を見習って、袖や裾や帯にでも隠し武器を仕込んでおけばよかった」

「同感。まあ、僕らも昔は似たようなことをやっていたけどね」

「一時期、隠密ごっこにはまっていたからな。上衣に物を隠したり、足音を消す練習をしたり、錠前破りに熱中したり。暗号や秘密の合図を考えたのも、あの頃だったか」

冬惺は何気なく口にしてから、それがまさにこの玉造の里にいた頃だったと急に意識した。あの輝くような子供時代――。冬惺たち三人は屋敷の大人たちを敵に見立て、彼らの目を盗んで暗号文をやり取りしたり、こそこそ屋敷の中を移動したり、ひそかに遊びに出かけたりした。けれどまさか本当に玉造邸の者が敵になる日が来るとは、思いもしなかった。

「……そういえば綺理はいまだにああいうのが好きだな。上衣のあちこちに薬を仕込んだりするのも綺理だし、あいつの作る守り袋には物が最大限詰め込まれている」

つかの間の感傷を振り払って、綺理からもらった守り袋を開ける。以前彼女が対奏珠用に作った守り袋には気付け薬が入っていたが、普段使い用のこちらには傷薬や小物が入っている。

冬惺はその中から曲がった針金を取り出すと、翔波の手枷の錠に差し込んだ。

この手の作業が最も得意なのは翔波だが、冬惺も昔、遊びで一緒に錠前破りの練習をしたこ

とがある。手枷のように量産される物なら、使われる錠も単純でありふれた物なので、冬惺でもどうにかなった。時間はかかったが、やがてごとりと音がして翔波の両手が解放される。

「ありがとう、冬惺。……あ、乾ノ術封じのほうは、専用の術具がないと外せないはず。どうせ夜明けまでは乾ノ術を使えないし、今はまず脱走方法を考えないと」

翔波が手首をさすりながら、一つしかない扉に目をやる。

こうした場合は、外から扉を開けさせてその隙を突くのが定石だ。しかし中に見張りの兵が残っていないため、兵の交替で扉が開けられることはない。

「……こっちで騒ぎを起こしても、外の兵が中に入ろうとするとは限らないよね」

「ああ。影珀叔父上も、俺たちがその手に出る可能性くらい想定しているはずだ。むしろ、中からなにを言われようと絶対に開けるなと命じているだろうな」

もし狂言や口先で扉を開けさせることができたとしても、問題はそのあとだ。廊下に何人の兵がどう配置されているかわからない状況では、下手に動けない。そしてひとたび逃亡の意思を相手方に悟られれば、脱走の機会は永遠に失われる。

「だが叔父上はあくまで貴族的な考え方の持ち主だ。だからおそらく、俺たちの監禁場所をこの離れにしたことで、俺たちに逃げる隙を与えてしまったとは気づいていない」

冬惺たちが抵抗らしい抵抗を示さなかったことや、冬惺の態度が逃亡を考えているように見えなかったこともあるだろうが、影珀が冬惺に縄をかけたり二人を地下牢に入れたりしなかっ

たのは、それが貴人の虜囚に対する礼儀だからだ。
冬惺の身分を考えれば順当とも言える措置。しかし今はそれが、影珀にとって仇となる。
「叔父上の発想は、基本的に貴族としての域を出ない。だから仮にも王族が手枷の錠を開けられるとは考えもしないし――」
冬惺は指先をすいと上げ、翔波に天井を示す。
「ねずみの真似事をするとは、絶対に思わないだろうな」
「……隠密ごっこ、再びだね」
翔波は幼なじみの意図を正しく理解して、頭上にやった視線をそのまま天井の隅に移した。
冬惺たちにとって玉造家本邸は、勝手知ったる我が家であり遊び場であったのだ。この離れも来客がないときは人の出入りが少ないので、こっそり忍び込んだことは何度もある。
――だから、この部屋の天井板が隅の一枚だけ外せることも知っている。
二人はうなずき合うと、物音を立てないようにそっと卓と椅子を部屋の隅に運んだ。卓の上に椅子をのせて、そこに翔波が登る。
問題の天井板は、簡単に動かないように掛け金で留められており、本来は室内側からは外せない。だが翔波が天井板の隙間に針金を差し込み、ある位置で慎重に動かすと、天井裏で掛け金の外れる音がした。
「――本当だ、ふさがれてない。昔のままだ」

翔波が天井板を軽く押し上げ、ほっとした顔を冬惺に向ける。
客を泊める部屋に天井裏から侵入するための仕掛けが備わっているというのは、よくよく考えると不穏な臭いがするが、今はとにかく活用させてもらう。
「よし。天井裏に上れば、梁伝いにほかの部屋に行けたはずだ」
これでこの部屋を抜け出す算段はどうにかついたが、問題はそのあとだ。脱走したことが発覚し、追っ手がかかるまでに、どこまで逃げられるか。
一旦床に下りてきた翔波に、冬惺は小声で計画を語る。
「納戸で武器になるものを調達して、ここから一番遠い北の部屋の窓から外に出よう。兵が見張っているのはあくまでこの部屋だから、ここさえ離れればたとえ巡回の兵に出くわしたとしても一人か二人。奇襲で対処できないことはない。それにこの屋敷は今のところ外敵を想定していないからな。この離れ以外は警備がゆるいはずだ。だから裏庭側から――」
説明するうちに、だんだんと翔波の表情が曇ってきた。彼は片手を上げて冬惺を制すると、不安げにこちらを見る。
「ちょっと待ってよ。その経路じゃ……綺理の部屋に行けなくなるよ？」
冬惺はうなずき、短く答えた。
「綺理の部屋には寄っていかない」

――冬惺と翔波は、ここから逃げ出す道を選ぶだろう。
父が冬惺に与えたという選択肢を聞いたとき、綺理は真っ先にそう思った。
謀反に加担はできないし、死ぬわけにもいかない。ならば逃げるしかない。至極明快な結論だ。彼が迷うはずはない。……それなのに、ほんの少しでも迷ってくれていたらいいのに、と願ってしまったのは、姉のあの言葉を聞いたせいだろう。
『お父さまは、あなたを餌にすれば冬惺が心を動かす可能性もあると考えたのよ』
もちろん父のいう『餌』とは、綺理との結婚で望める玉造家の莫大な富と所領のことだし、冬惺がそんなものに目がくらむ人ではないということも綺理は知っている。
けれど、もし冬惺が、綺理という存在の前に一瞬でも心を揺らしていてくれたら。
（……なんて、そんなはずないのに）
姉が出て行き、独りきりになった綺理は、深々とため息をついた。
綺理との結婚が、冬惺に対し餌として作用することはありえない。
もともと冬惺が綺理との結婚に臨もうとしていたのは、白桜王家と玉造家の結びつきを強めるという政略のためだ。だがその政略結婚の話は、父が謀反を起こしたときに白紙に返った。

冬惺が反逆側につくことがない以上、玉造の綺理は、もはや彼にとってふさわしい結婚相手ではなくなったのだ。——永遠に。

（……違う。今考えなきゃいけないのは、そんなことじゃない）

綺理は椅子から立ち上がり、事実上軟禁されている部屋の中を歩き回る。

冬惺と翔波は逃げるだろう。逃げなくてはならない。だから綺理は二人の手助けをする。でも、どうやって？

部屋からは出してもらえない。呼べるのは父に忠実な本邸の侍女たちだけ。この楼閣の外壁にはとっかかりがなく、窓から壁伝いに上り下りするのは不可能。布を引き裂いて縄を作るのは時間がかかりすぎる。

最悪、飛び下りられない高さではないのだが、下が岩場で足場がよくない。着地した拍子に足をくじくか、骨を折りかねない。そうなれば冬惺たちの足手まといになるだけだ。

いやそもそも、綺理の脱走がばれて騒ぎになるだけで、夜陰に乗じて逃げようとしているであろう二人の足を引っ張ってしまう。

——綺理には、冬惺たちの手助けをすることすらできない。

そう悟って、綺理は無力感に立ちすくんだ。

（それに私、ここにいたら絶対に冬惺と翔波に会えない。このまま、離れ離れになっちゃう）

冬惺たちは危険を冒してでも綺理のもとに来ようとするだろうか。それともそんなことをし

ていたら逃げられなくなると判断して、まっすぐに里から脱出するだろうか。しかしもし二人が数刻前の約束のように綺理の部屋に忍んで行ったとしても、そこには誰もいないのだ。

あるいは、そのほうがいいのかもしれない。

会えば、綺理は「私も連れて行って」と言ってしまうだろう。綺理が願えば、きっと冬惺たちは一緒に連れ出してくれる。けれど謀反人の娘を伴って王都に戻っても、冬惺は綺理の処遇に困るはずだ。悪くすれば、綺理のせいで冬惺が謀反への関与を疑われるかもしれない。

だからいいのだ、と綺理は胸中で唱えた。

（大丈夫。ここで離れ離れになったって、そのうち真羅が来てくれる。真羅に頼めば、冬惺たちとはいくらでも連絡を取れるもの。本当にばらばらになるわけじゃない。だから――）

そう言い聞かせて、無力感と孤独感をねじ伏せようとする。

――コン、と窓辺で小さな音がしたのは、そのときだった。

振り返ると、格子窓のそばの床でなにかが月光にきらめいていた。怪訝に思って拾い上げた綺理は、それが小さな瑠璃の玉だと気づいてはっと格子窓を見やった。

この楼閣の部屋に、格子窓の隙間を通して玉を投げ込める人間といったら、限られる。

綺理は予感に胸を膨らませながら、格子窓を開いた。

（冬惺、翔波――！）

窓のずっと下の暗がりに、思い描いていた二人の少年の姿がある。二つ目の玉を投げようと

していた翔波がほっとしたように手を下ろし、その隣で冬惺が綺理を見上げる。目が合った。冬惺がこちらに手を伸ばし、叫ぶ。

「おまえも来い！」

その一言でよかった。

その一言だけで、綺理の中からほかのすべてが消え失せた。家を捨てるということも、謀反人の娘が王都でどんな扱いを受けるかということも、一切が心の中から消えて、綺理はためらいなく窓から身を躍らせた。

兄王は裏切れないし、綺理は手放せない。ならば綺理を連れて、自分たち三人で逃げるしかない。そして王都に戻ったら、たとえ兄王に真っ向から逆らうことになろうとも、綺理には絶対に手出しをさせない。必ず、この手で守り抜く。

そう決めたとき、冬惺はなぜか綺理が共に来ないという可能性を考えなかった。自分が踏み越えられない一線を彼女に越えさせて、家を捨てさせることになるというのに、彼女が躊躇してここに残ると言い出す場合のことを一度も考えなかった。



その理由は、この八稜楼の下に来たときにわかった。正確に言えば、自覚した。関係なかったのだ。もし綺理が一緒に行けないと言い張ったら、冬惺は彼女を力ずくでもかどわかすつもりだった。綺理の意思に関係なく、自分の想いだけでさらおうとしていた。

けれど綺理のいる楼閣内の部屋は外から侵入するのが難しく、彼女が冬惺を選んでくれない限り連れて行けないのだと悟ったら、急に不安に襲われた。

もし拒まれたらどうしようと、恐れにも似た思いに駆られて手を伸ばした。祈るように、懇願するように叫んだ。

だけど綺理は、一瞬たりとも迷わずに、来てくれた。

この腕の中に。

冬惺の腕にしっかりと抱きとめられ、互いの熱を感じた。

――あのとき、あの瞬間、時を止められたなら、どんなにか幸せだっただろう。

どうして私が八稜楼にいるとわかったの、と問うた綺理に、冬惺はあっさりと答えた。

『おまえが鏡で合図したんだろう。ここの窓でやたらと光がちらちらしているのが見えたから、綺理が俺に居場所を報せているんだと思った』

（あの合図……見ててくれたんだ）

綺理は目を見開いた。それはまだ謀反のことを知らないときに、今夜の約束のために送った合図だ。しかし綺理自身は駄目でもともとのつもりで、ほとんど暇に飽かせてやったものだったので、冬惺が気づいてくれていたとは思っていなかった。

ともあれ、綺理たちはあの約束のおかげで出会えたことになる。

また、もう一つ約束が功を奏したのは、森に出かけるために綺理が裳の下に細袴をはいて準備していたことである。動きにくい上に夜目に映える純白の裳を茂みの陰に脱ぎ捨てて、綺理は冬惺たちと一緒に、裏庭を足音を忍ばせて移動していく。

だが屋敷の端まで来たところで、その歩みが止まった。

（あの塀さえ越えれば、裏の森に出られるのに……）

三人は茂みの陰から、築地塀のそばを巡回している一人の兵を恨めしげに見る。

早くよそへ行ってくれればいいのにと綺理が思っていると、祈りがあらぬところに通じたのか、その兵がこちらに向かって歩んできた。

冬惺が隣の茂みに隠れている翔波に目配せをし、心得た翔波がかさりと枝葉を揺らす。兵の注意がそちらに向いた隙に冬惺が飛び出し、声を立てる間も与えずに相手を昏倒させた。

流れるような早業だ。——が、運悪くそのとき、建物の角からもう一人の兵が顔をのぞかせた。

「なんだ!?」

二人目の兵は異状を見てとると、さっと胸元の呼び子笛に手を伸ばした。

（まずい——！）

あれを吹かれたら終わりだ。だがいくら冬惺でも、あの兵を倒すには距離がありすぎる！

綺理はぞっとしたが、しかし、呼び子笛の音が響き渡ることはなかった。

兵が呼び子笛を吹き鳴らす間際、なにか白い物体が彼の頭を直撃したのだ。鈍い音がして、兵が声もなく地に沈む。

（今のって、ひょうたん？）

綺理たちがはっとして白い物体——ひょうたん水筒の飛来したほうを振り仰ぐと、そこには十歳ほどの美貌の童子が庭木の枝に悠々と腰かけていた。

「まったく君たちときたら、この私がついていないと危なっかしくて仕方がないな」

ひょうたん水筒につけられた紐を引いて、愛用の水筒をぱしんと手の中に取り戻した真羅は、そう言って笑みを浮かべた。

綺理は夜の森を、冬惺に手を引かれながら走る。
「ね、冬惺。私たち、どこに向かっているの？」
「神木の裏手の川だ。あそこなら舟がつないであるはずだからな」
まるで四年前の春の夜のようだ。あのときも迫りくる空騅の軍勢から逃げるために、神木の裏手の川から舟に乗って里を脱出した。ただし今回は、あのときとは違い――。
「確認してきたが、確かに小舟が一艘あった。君たち三人なら十分乗れるだろうね」
「真羅！　見てきてくれたの？　ありがとう！」
童子姿の真羅が頭上に忽然と現れ、枝から枝へと飛び移りながら綺理たち三人と並走する。
「ついでに当座の食料くらいは厨からくすねて放りこんでおいたから、ありがたく思いたまえ。ちなみに君たちがいなくなったことはまだ発覚していないが、もし少年たちがキリの部屋に立ち寄っていたら罠にはまっていたよ。少年たちが離れから脱走した場合の保険なのか、キリの部屋には兵が待ち構えていたのでね」
神出鬼没な大淵妖の反則的な手助けのおかげで、今や三人の脱走はぐっと確実なものになっていた。さらに真羅は、懐から守り刀を出して翔波に放る。
「それと従者、これは君の物だろう？　回収してきた」
守り刀を受け取って、翔波は安堵と感激をない交ぜにしたような表情になった。
「ありがとう、真羅。わざわざ」

「なに。その守り刀は前に一度、どこぞの焼き鳥の力を受けているのでね。嫌でも目についただけだ。……と、従者。君は妙な物をつけているな」

真羅は宙で一回転して子狐に化けると、走る翔波の肩に降り立った。

「なんだい、真羅？――うわっ、くすぐったいな」

子狐真羅が、翔波の襟元にもそもそと鼻先を突っ込む。三人が怪訝な顔で見守っていると、子狐の体が淡い浅葱色の光に包まれ、バキン、と固い物を噛み砕く音がした。

子狐真羅が頭を出したときには、その口に壊れた首枷がくわえられている。

「乾ノ術封じ、破っておいた」

「助かった。これが外せないと、これからしばらくどうしようかと思っていたんだ」

首枷の残骸をぺっと捨てた真羅に、翔波が襟を整えながら礼を言う。そこで真羅は不意ににかに気づいたように動きを止め、ふさりと尻尾を揺らした。

「……従者。首は急所だよ。君は無防備すぎる」

「いや、今回は仕方ないだろ。兵が部屋にわっと入ってきたと思ったら、いきなり取り押さえられてはめられたんだから。抵抗する余裕もなかったんだよ」

翔波が言い訳すると、真羅はなにか言いかけて、結局「……まあよいか」と独り言ちた。

綺理たちは夜露に濡れた下生えをかき分け、神木への近道に入る。真羅は自分で走るのが面倒なのか子狐姿で翔波の肩に乗っていたが、やがて視線を察して翡翠の瞳を動かした。

「なんだね、少年？　私のふさふさ尻尾に見とれるなら、無事に逃げ切れてから存分に」
「むしるぞ、たわけ。ただ……俺たちは、おまえが来るとは想定していなかったんだ」
「ふむ。確かに呼ばれてはいないな。で？」
「俺は助けろとは頼んでいない。……が、感謝していないわけじゃない。それだけだ」
（冬惺……。お礼くらい素直に言えばいいのに）
綺理は呆れたが、このひねくれ者の少年が彼なりに礼を言う時機をうかがっていたのなら、それはかなりの進歩だろう。真羅が瞳をまたたかせ、首をすくめる。
「ま、淵妖がらみの事件でなければ私には手伝う義理はないのだがね。《契約者》の生命に関わることなら話は別なのだよ。それに《契約者》たちが――《調停者》たちが離れ離れになってしまっては、私が困る」
（あ……そっか。私たちが、みんな一緒にいないと）
もちろん真羅の言葉は、人の世の外にいる存在としてのものだ。それでも綺理は、玉造の綺理が白桜の冬惺のそばにいてよいのだと言われた気がして、頬をゆるめた。
――そのときだ。
〈行カセヌゾ〉
くぐもった声が耳に飛び込み、綺理は産毛がぞっと逆立つのを感じた。
人ならぬものの声。これほど人里に近い森では現れないはずのものだが、空耳ではない。

「淵妖がいるわ！」

綺理の警告に、冬惺と翔波がぎくりと立ち止まった。

真羅も子狐姿でいるときは淵妖の声が聞こえない。はっと童子姿に戻り、苦い顔になった。

「……ここでこちらの追っ手が来るとはね」

〈行カセハ、セヌゾ！〉

突如、行く手の岩陰から、紺碧の泥の妖が飛びかかってくる！

「……っ、こんなときに！」

冬惺がすばやく綺理と翔波の前に飛び出し、抜刀する。

彼の太刀が一閃すると、熊の形をした淵妖は前足を斬り落とされてどしゃりと形を崩した。

淵妖は分かれた体のそれぞれで起き上がり、また襲いかかってこようとしたが、そのときには翔波が右手に月氷澄の鏡を構えている。

「今は眠りし乾ノ神の宝、天の鏡のその写し身よ。歪みの鏡の理で、禍つ風を凍らせよ！」

乾ノ術は太陽が出ていない時間帯は使えないが、鏡作家当主に伝わるこの秘術は違う。詠唱が終わるなり輝く鏡面から銀の光の帯がほとばしり、淵妖をぐるりと囲んだ。

光の輪に囚われた淵妖が、凍りついたように動きを止める。

けれど三人が息をつく間もなく、樹上で真羅が硬い声を出した。

「――君たち。どうやら凍らせるだけでは埒が明かないようだ」

ねっとりと湿った風が、吹いてきた。
前方の木立がざわつき、大きな狼の形をした淵妖が次々に這い出してくる。
〈行カセヌゾ〉〈行カセヌゾ〉〈此レヨリ先ヘハ、行カセヌゾ〉
いびつな狼形の淵妖は八体。泥の足をうぞうぞと動かして移動し、綺理たちを半円に囲む。
「この淵妖たち、なんだか私たちの足止めをするために出てきたみたい……」
じりじりと近づいてくる淵妖に、冬惺が舌打ちして太刀を構えなおした。
「一掃するぞ。――真理を網羅する者、真羅。憑りつけ！」
真羅の体が浅葱色の光に包まれ、太刀の中に吸い込まれる。真羅の力を宿した太刀は、淡い浅葱色の光を帯び、刀身が水のように透き通った。
その直後、淵妖がいっせいに襲いかかってくる！
「翔波、左だ！」
「――よ。歪みの鏡の理で、禍つ風を凍らせよ！」
左から迫っていた一体の淵妖を、翔波がすばやく凍らせる。
泥の彫像と化した淵妖は、それそのものが立派な防壁になる。三人は凍った淵妖を背に立ち位置を変え、同時に冬惺が、正面から来た淵妖を薙ぎ払う。
真羅の憑いた太刀――淵海還しの水の太刀に斬られた淵妖は、瞬時に形を失って地中にのみこまれた。さらに太刀から放たれた浅葱色の光が、周囲の淵妖をまとめて吹っ飛ばす。

もんどりうった淵妖たちがまた三方から飛びかかってきたが、綺理たちはぴったり呼吸を合わせて凍った淵妖の裏側に飛び込んだ。続いて翔波が術を解く。

〈――――！〉

氷の呪縛から放たれた淵妖が前のめりになり、ほかの淵妖たちと正面からぶつかった。淵妖が一塊になっているところに、翔波が月氷澄の鏡を向け、まとめて凍らせる。

これでまだ動ける淵妖は三体だけ。おまけに湿ノ力を凍らせる秘術の余波で、地面がぬかるむこともないため、冬惺は自由に動ける。

囲まれさえしなければ、冬惺の独壇場だ。

彼は地面を蹴って一気に距離を詰めると、太刀の一閃で淵妖を次々に淵海に還していった。

仕上げに凍っている淵妖たちも還して、ようやく三人はほっと息をつく。

「これで終わりか。だがなぜ淵妖が、俺たちの足止めなど……」

不意に冬惺の手の中で、太刀が強い光を放った。浅葱色のもやがあふれ出し、綺理たちの前で元の童子の姿になる。

だが太刀から離れた真羅の表情は、驚くほど険しかった。

「――君たち、先を急ぎたまえ」

「真羅？」

「早く逃げるんだ。私は君たちを手伝えなくなる！――来る！」

叫ぶなり、真羅は虚空の狭間に滑りこむように姿を消した。
いったいなにが来て、真羅はなにから逃げたのか。そんなことは考えるまでもない。真羅にあれほど切羽詰まった声を出させる存在は、一つしかない！
慄然とした綺理の耳を、次の瞬間、重い羽音が打った。
三人がはっと頭上を仰ぐと、一羽の鳥が月をかすめるようにして降りてくるところだった。
鷹だ。
行く手に立ちふさがるように、鷹が前方の樹上に舞い降り、その嘴から人語が漏れる。
「――やれやれ、逃げられたか。真羅も逃げ足は速い」
「万宵!?」
綺理は鷹に憑いている妖王の名を叫んだ。現れるのが彼であることは予想していたが、まさか鷹を依代にしているとは思わなかった。
（それに……万宵があのとき近くにいた動物に憑いたのだとしたら、あれはまさか、空騅将軍の連れていた鷹？　空羽とかいう名前の……）
緊張をはらんだ空気の中、万宵が真羅を大人にしたような声でくつくつと笑う。
「確かに私は妖王万宵。しかしだね、従者。鏡の秘術で私を縛るのは不可能だよ。今の私には湿ノ眷属としての体がないのでね、いくらやっても凍らない」
まさに月氷澄の鏡を向けようとしていた翔波が、悔しげに手を下ろした。冬惺は彼を綺理と

一緒に背の後ろに押しやると、油断なく太刀を構える。
「貴様か、万宵。あの淵妖をけしかけてきたのは」
「もちろんだよ、少年。あの程度の雑魚でも、足止めくらいはさせられると思ってね」
「その割には、ものの見事に逃げられたようだが？」
万宵の憑いた鷹が近づけば、真羅はまた万宵の魂に乗り移られる。それを避けるために、真羅は淵妖にしか通れない妖道を使って逃げたのだ。
「そうだね、逃げられたね。真羅には逃げられたが、君たちを逃がしはしないよ」
「鷹の身で俺たちを捕らえられるとでも？」
冬惺がすいと脇に退くと、すかさず翔波が前に出た。彼の手には、綺理が二人の陰に隠れて拾っていた石が握られている。
「――わ、っと、せっかちだな君たちは！」
鋭く投げつけられた石を紙一重でよけて、万宵はばさばさと舞い上がった。
「勘違いしないでくれたまえ。――君たちを捕らえるのは私ではないよ」
旋回した鷹を目で追って、綺理たちの視線が自然と後方に向く。
（！　あれは――！）
いくつもの明かりが、遠くでちらちらと動いていた。あれは追っ手のたいまつだ。今の今まで淵妖や万宵に気を取られていたが、その間に屋敷では三人の脱走が発覚していたのだ。

「……っ」

もはやなりふりを構っていられる余裕はなかった。綺理たち三人は万宵がすんなり道を空けたのをいいことに、再び神木の裏手の川へと走り出す。

無論背後にも警戒はしていたが、万宵が綺理たちの背に襲いかかってくることはなかった。彼はただ楽しそうな笑声を響かせて、夜空へと舞い上がっていった。

下生えを踏み分け、積もった枯れ葉を踏み散らし、地面を這う木の根を飛び越えながら坂道を下る。谷底を走りながら、だんだんと追っ手の気配が近づいてくるのを感じる。

（早く、早く――！）

昔遊んだあの神木は、こんなにも遠かっただろうか。まだ着かないのかと、焦りが募る。

（でも私たちは近道を使っている分、追っ手よりずっと有利なはず。大丈夫、きっと逃げ切れる）

走りにくい地面に注意して必死に足を動かすうちに、黒々とした巨木の幹が見えてきた。あの神木は川のほとりに生えている。神木のもとまで行けば舟はすぐそこだ。水音も近い。

「綺理！」

しんがりを走っていた冬惺が綺理の前に出て、片手をこちらに差し伸べる。
綺理がその手を取ると、彼は綺理を引っ張り上げるようにして斜面を駆け上がった。
（この樹の、向こうまで行けば――）
胸に希望の灯をともらせて、いく抱えもある幹の向こう側に躍り出る。
その途端、前を行く二人の少年が立ち止まった。
綺理は冬惺の背にぶつかりそうになって、たたらを踏む。どうしたのだろうと冬惺の背から顔を出し、そして――。
（え……）
綺理は、雪原の幻を見た。
目の前に、白い花の海があった。すすきに似た植物が、神木の根の間を埋めるようにして一面に生え、雪と見紛う純白の花をこぼれんばかりに咲かせている。
一夜の夢を見せるがごとく、一晩だけ咲く花。
今夜、冬惺と二人で見にこようと約束していた花。
夢雪草の群生だ。
かつて綺理たちが蒔いた種が根付き、今日この夜にいっせいに花を咲かせたのだ。
夜風がざわと穂を揺らすと、花の雪原が波打つ。白く軽い花が吹き上げられて、ぽつぽつと蛍のように舞う。綺麗だ。まるで、幻想のような光景だ。

そんな美しい光景がはっきりと見えるのは、花を照らすたいまつの光があるからだ。
数多くのたいまつが神木の前に押し寄せ、夜空の下に夢雪草を白く浮かび上がらせている。
――綺理たちは、追っ手に囲まれていた。

「冬惺公閣下、翔波どの、綺理さま。どうか動かれませんよう」
神木と川を背にした綺理たちを、玉造家の兵が一定の距離を置いて半円状に包囲する。
総勢十五、六人。槍や刀が、切っ先をこちらに向けてずらりと並び、その後ろの岩の上からは数人の弓兵が狙いを定めている。
「そんな……。なんで、こんなに早く……」
綺理の前で、翔波が絶望のうめき声を漏らした。
追っ手が到着したのは綺理たちとほぼ同時だったようで、舟は無事だ。舟までなら真後ろに走って数秒だろう。だが全速力で飛び乗ったとしても、舟を岸につないでいる鎖を外すには時間がかかる。その間に確実に捕まってしまう。
（ここまで、なの……？）
凍りついたように動きを止めている三人に、追っ手の隊長が言った。
「近道は一つではありませんし、子供の頃この森でよく遊んでいたのはあなた方だけではないということです。私も私の部下たちも、みな玉造の里育ちですから」

その隊長の顔は、綺理たちもよく知っていた。玉造の里で養育されていた頃、いく度も顔を合わせている。四年前ここの川から舟で玉造の里を脱したときも、彼は護衛の中にいた。

「……昔、僕たちが屋敷を抜け出して遊びに行ったときも、何度もあなたが捜しにきた」

「……ええ、懐かしいです。しかし遊びはもう終わりにしなければ。私は綺理さまを連れ戻し、冬惺さまと翔波どのを捕縛するよう、玉造公より命を受けております。武器を捨てて投降してください。――先に申し上げておきますが、綺理さまが人質のふりをなさっても無駄ですよ」

付け加えられた言葉に、まさに「私を人質にして」と冬惺たちにささやこうとしていた綺理は口を閉じた。この隊長は、冬惺たちが決して綺理を傷つけないとわかっているのだ。

「捕まればいずれ殺されるというのに、俺たちがおとなしく投降するとでも思うか？」

「いくら冬惺さまといえど、我々全員を相手取ることは不可能でしょう」

そう言いながらも、隊長は捕縛の指示を下そうとしない。その理由と、さらにあることに気づいた綺理は、急いで冬惺と翔波の前に出た。二人の盾になるように、両腕を広げる。

「――やめて。あなたたちは、私が人質になっていなくても手を出せないはずよ」

「綺理！」

冬惺の苦しげな声と、隊長の表情に、綺理は自分の考えが正しいことを確信した。

追っ手が迂闊に手を出せないのは、冬惺の剣の腕を知っているからだ。手練の冬惺を捕らえようとすれば乱戦は必至となり、そばにいる綺理の身にも危険が及んでしまう。

少なくとも彼らは、そう考えて実力行使を躊躇している。
「……そうですね。万が一綺理さまがお怪我でもされるような事態になっては困ります」
ややあって、隊長は認めた。まるでこうした流れになることを、半ば予想していたような表情だった。なんとも名状しがたい感情を秘めた目で、綺理たち三人をじっと見る。
「では、こういたしましょう。――綺理さま、危険ですからこちらにいらしてください」
「嫌よ！　私がそっちに行ったら――」
「そうすれば、冬惺さまと翔波どのは見逃します」
「⁉」
破格の申し出に、綺理の心臓がどくんと跳ねた。背後で冬惺と翔波が息をのむ音がする。
「……そんなこと、信じろって言うの？」
「私を信じてくださいと申し上げるしかありません。ですが一兵卒とて人の子です。姫さまの前で血を流したくはありませんし、処刑されるとわかっていながら冬惺さまと翔波どのを――昔何度もお捜しした子供たちを、この手で捕縛するのは心苦しい」
隊長が真摯な声で言い募る。
「姫さまさえこちらに残られるなら、お二人を見逃す理由ができますし、玉造公にも言い訳が立ちます。お二人が姫さまを人質にして逃げようとしたため、姫さまを無事にお救いするだけで精一杯だった――と。こんな申し出ができるのは、私の隊しかいない今だけです」

その声に嘘の気配はなかった。
綺理が兵たちのもとに行けば、彼らはきちんと約束を守るのだと、そうわかった。
（私がここに残るなら、冬惺と翔波を逃がせる――）
よろめくように一歩踏み出したとき、冬惺が後ろから綺理の左手首をつかんだ。
「綺理。俺は、そんなつもりでおまえを連れ出したんじゃない……！」
悲痛な叫びに胸が詰まる。
けれど隊長はその言葉がなにかに触れたのか、眉をぴくりと動かした。
「ならば冬惺さまは、どのようなおつもりで姫さまを連れ出したのです？」
「え……？」
「駆け落ちの真似事をして綺理さまを連れ去って、それでどうなさるつもりだったのです？　王都はもはや綺理さまには敵地です。そのようなところに我らの主家の姫さまを連れて行って、人質や囲い者にでもするおつもりですか！」
冬惺がかっとなったように声を荒げる。
「そんなことにはしない！　綺理は俺の――」
「綺理さまがあなたの婚約者であったことなど、ただの一度もありません！」
（――っ！）
綺理はびくりと身をすくませた。つかまれた手首を介して、冬惺の震えも伝わってくる。…

…彼は、『綺理は俺の』のあとになんと続けようとしていたのだろう。

「従妹だとおっしゃるのなら、綺理さまは冬惺さまの従妹君である前に、玉造公影珀さまの娘君です。そんな姫さまに、王都でまともな居場所があるとでも思いますか？――ですから、冬惺さま。駆け落ちごっこはここまでです。綺理さまをお放しください」

隊長は静かに言って、綺理に視線を据える。

「綺理さま、どうかこちらにいらしてください。あなたのいるべき場所は、こちらです」

それきり、誰もが口をつぐんだ。

風だけがざざと鳴り、白い花が炎に照り映えて幻のように舞い躍る。

兵たちは煌めく切っ先をこちらに向けたまま、微動だにしない。

ここで別れたら、本当に離れ離れになってしまう。それこそが万宵の狙いなのだとしたら、真羅の助力をもってしても連絡を取り合うことはできなくなる。万宵自身は《契約者》には危害を加えないとかつて明言していたが、敵対する陣営に分かれれば再会できるのはいつになるか。もしかしたらこれが今生の別れになるかもしれない。

（それでも私は、冬惺と翔波を守れるのなら……）

綺理の心は、とうに決まっていた。二人もきっとそれを悟っている。

翔波は主人の命を守らなくてはならない。それには隊長の言葉に従うしか道がないとわかっているから、彼は初めからなにも言わない。

冬惺も「行くな」と言わない。たとえ彼が死力を尽くして戦っても、現状を打破することはできないとわかっているからだ。——否。本当は冬惺は、戦うことすらできない。

なんとか隠してはいるが、彼の息は上がっているし、綺理に触れた手は熱く汗ばんでいる。極度の疲労。——真羅の憑いた太刀を使った代償だ。

おそらく今の冬惺は、立ったり走ったりするだけで精一杯。もし追っ手にそのことを気づかれてしまったら、隊長の申し出は前提を失い、彼らは問答無用で三人とも捕らえようとするだろう。

そうなる前にどうすべきかは、冬惺も頭ではっきりと理解しているはずだ。

なのに彼は、綺理の手首をつかんだまま放そうとしない。

それは感情だ。わかっていても手放したくないという、理性を脅かすほどの激しい感情。

（冬惺……）

込められた力は、痛いほどに強い。彼の思いの強さをそのまま表しているようで、綺理は胸が一杯になる。離れたくない。振り払いたくない。許されるならこのままずっと、彼の熱を、情動を感じていたいと思う。

しかしそれはそのまま、冬惺本人と翔波の命を危険にさらすことなのだ。

（私は——）

綺理は今ひとたびの覚悟を決めて、静かに振り返る。

先に目が合ったのは、冬惺の隣にいる翔波だ。
なにもできない己を責めるような表情の翔波に、綺理はいつものように手を握る代わりにそっと微笑んだ。声に出さずに、口の動きだけで四つの音を伝える。
――おねがい。
冬惺を、お願い。
それだけで通じたのは、彼が片眼鏡の奥で青銅の瞳を瞠ったのを見ればわかる。
綺理は視線をゆっくりと隣に移し、正面から冬惺を見上げた。
「……綺理」
彼の琥珀の瞳はひどく辛そうで、綺理はせめて悲しい顔を見せるまいとほのかに笑む。
『笑っていたほうが可愛いと言いたいんだ』
いつも綺理を振り回してどぎまぎさせて、髪をぐしゃぐしゃにしたかと思えば宝物を扱うような手つきで直してくれて、俺がそばにいるから大丈夫だと頼りになる腕で支えてくれて、とても優しくて、強くて、何度も何度も守ってくれた。
この人が好きだ。ずっと昔から好きだった。だから――私が守りたい。
「……綺理？」
とん、と冬惺の胸に飛び込むように踏み出せば、琥珀の瞳が大きく見開かれる。
夢雪草の花が咲く、思い出の神木のそば。

今夜ここで、告白をしようと思っていた。
——それはもう、はかない夢。
彼の肩に手をかけて、背伸びして、——そうしてやわらかく唇を重ねる。
触れ合ったぬくもりに、冬惺が驚く気配がした。驚いて、彼の右手から一瞬力が抜ける。
その瞬間、綺理は冬惺の手を振りほどいた。
「！」
彼に背を向けて、兵たちのほうへ一直線に走る。後ろで冬惺の手が空をかき、名を呼ぶ声が追いすがる。
正面の兵がさっと得物をよけて道を作り、綺理はそこに駆け込んだ。未練を振り切るように大きく息をついて、呆然とした顔の冬惺たちを振り返る。
「ごめんね。冬惺、翔波、さよなら……っ」
涙声にならないように頑張って言って、すぐにこらえきれなくなって前を向く。駄目だ。もう振り返れない。今振り返ったら、みっともない顔を見せることになる。
「——約束は守ります」
かたわらで隊長が言い、冬惺たちを追い払うように腕を横に振る。



「早く行ってください！　舟が岸を離れるまでは待ちます！」
「……っ、ごめん綺理。……ありがとう！」
叫んだのは翔波。彼は別れを口にしたくなかったのか、言いよどんでからそう付け加えた。
背後で冬惺と翔波の走っていく音がする。舟に乗り込む音。鎖を外す音。
（……行っちゃう。これで、もう）
前にも似たようなことはあった。冬惺と翔波を逃がすために、綺理がわざと大淵妖の刹利に捕まったとき。でもあのときは、冬惺たちが絶対に助けにきてくれると信じていた。
今度はもう冬惺たちは助けにこない。綺理は悪者に捕まったわけではなく、ただ彼らと敵味方に立場を違えてしまったのだから。
（約束……王都の市に行って髪結い紐を交換しようっていうのも、もう果たせないんだ……）
鎖の外れる冷たい音を聞きながら、綺理は口づけの名残を求めるように唇に触れる。
舟が、出る――。
「――綺理！」
強く名を呼ばれて、綺理の体に震えが走った。
自分の名を呼ぶ、誰よりも愛しい人の声。振り返らないつもりでいたのに、気づけば引き寄せられるように振り返っていた。
兵に囲まれた綺理と、舟の上の冬惺。碧玉と琥珀の視線が、絡む。

冬惺が、宣言をするように声を張り上げる。

「――必ずおまえを、さらいに行く！」

（――――！）

そのとき胸に湧き上がった感情は、なんと名前をつければよいだろう。熱い想いが胸にあふれ、全身を駆け巡って満たし、涙となってこぼれ出る。

（冬惺……！）

こみ上げた熱で喉がつかえ、言葉が声にならない。

綺理が必死でうなずいたのは、彼の目には映っただろうか。岸から離れた舟は流れに乗って速度を増し、にじんだ視界からあっという間に消え去った。

――綺理の胸に、確かな熱と一筋の希望を残して。

今夜あそこで、求婚をしようと思っていた。

求婚をして、綺理の気持ちを聞いて。もしも彼女が推測通り、年頃の少女らしく恋に恋して

いるのなら、「俺にしておけ」と言うつもりだった。ほかの男を擬似恋愛の対象にするくらいなら、自分にしておけと。

綺理が望むなら、苦手な甘い口説き文句だって言ってやる。理想の恋人らしいふるまいだってするし、婚約者の自分なら絶対に彼女を『失恋』させたりしない。……必ず幸せにするから、だから俺の綺理でいてくれと、そう伝えるつもりだった。

それはもう、はかない夢と消え失せて、代わりに言えたのはあの言葉だけ。

『――必ずおまえを、さらいに行く！』

叫んですぐに綺理の姿は視界から流れ去り、返事は確かめられぬままだ。それでもよかった。綺理が八稜楼の窓からこの腕の中に来てくれた、あの瞬間が自分にとってはすべてだった。

緊張の糸がゆるんだ途端どっと疲労が押し寄せ、冬惺は舟の底に仰向けに寝転がった。汗で濡れた体に夜風が冷たい。額に張りついた前髪を手の甲で払い、そのまま拳を目許にのせる。

しばらく沈黙が続いてから、冬惺は名を呼んだ。

「――翔波」

なに、と翔波が返す。その声が少しくぐもっているのは、彼が膝を抱えて座り込み、膝に額を当てるようにしてうつむいているからだろう。

「すまない。悪かった」
「……それは、なにに対しての謝罪？」
「判断を、間違えた。せっかく綺理が俺たちを助けようとしてくれたのに、それを止めかけて、おまえの命まで危険にさらした」
冬惺が綺理の手首をつかんでいたあの時間の分だけ、冬惺の疲労を追っ手に気取られる確率は上がっていた。冬惺の感情的な行動のせいで、二人とも捕まっていたかもしれないのだ。
「……謝るなら」
翔波の声に、少し怒ったような響きが混じる。
「僕の命を危険にさらしたことじゃなくて、自分の命を危険にさらしたことを悪いと思ってよ。……この、馬鹿閣下」
「だったら、両方とも悪かった。……だが、たとえ時間を戻してやり直せたとしても、やはり俺は綺理に手を伸ばすと思う」
少し間があって、うん、と翔波が応える。その声に責める様子がまるでなかったから、冬惺は抑えていた想いを素直に言葉にする。
「……綺理を、手放したくなかったんだ」
「……うん」
「あんな風に行かせたくなかった。俺が絶対に守るから行くなと、言えるものなら言いたかっ

た。綺理を連れて逃げられるだけの強さが、俺にありさえすれば。もっと周到に計画を練って、この手で綺理をさらって逃げられたら。――俺は、」

冬惺は体の奥底からあふれ出る熱を吐き出すように、震える息をついた。

「――俺は、綺理が、好きなんだ」

キィ、と小舟が小さく軋み、翔波が顔を上げる気配がする。

「……僕も、綺理が好きだよ」

「違う。そういう『好き』じゃない。もっと、特別な――」

言葉を探して口を閉じ、冬惺は目許にのせていた右手でゆっくりと口元を覆った。あたたかくやわらかな綺理の唇が触れた、その場所を。

自分と綺理との縁談は、今や完全に消滅した。彼女との結婚に政略上の価値はなくなり、むしろ玉造の綺理は、白桜の冬惺にとって結婚してはならない相手になった。

頭ではそうわかっている。理性も己の政治的立場を考えろと言っている。ならば自分が、今も綺理を得たいと焦がれるように求めているのは、純粋に感情ゆえだ。政略結婚という外枠が崩れ去って、初めてむき出しになった感情。

この感情の名前はなんだろう。

力ずくでも彼女をさらおうとしていた、あの切迫した想いの正体は。

彼女をこの腕に抱きとめたときの、あのうち震えるような歓喜の源は。
唇が重なり合ったとき感じた、あの身の内でなにかが弾けるような情動は。
――探していた言葉が見つかったとき、そのすべての答えはすとんと心に降りてきた。

「……俺は、一人の男として、綺理を愛してる」
冬惺は口元から右手をどけて、はっきりと言った。
「一人の女の子としての綺理を、特別に愛しているんだ」
月を仰いで言い切ると、ややあって小舟がギギィと揺れた。――視界が回る。
「そういうことはさ」
いつの間にか翔波の顔が正面にあって、彼に胸倉をつかまれて乱暴に引き起こされたのだと遅れて気づく。翔波は口元をにっこりさせたが、青銅色の瞳はまったく笑っていなかった。
「僕じゃなくて綺理に言おうね？　この、馬鹿」
「……ああ」
一番力が込められていたのは「馬鹿」の部分だったが、彼の真意は伝わってきた。
冬惺は翔波の指を襟からはずし、表情を引きしめる。
「必ず綺理を取り戻して、直接あいつに言うさ。求婚と一緒にな」
そのときにはあの口づけの意味も確かめなくてはなるまい。あれは単に冬惺に手を放させる

ためのものだったのか、それとも冬惺の期待するような『意味』があったのか。

「……そのためにも、今はまず、生きて王都に戻るぞ。これで下流で追っ手に追いつかれでもしたら、間抜けすぎて死んでも死にきれない。途中で舟を捨てて追っ手をまく。おまえの道案内を当てにさせてもらうぞ、鏡作の翔波」

琥珀の瞳に覇気を宿らせた冬惺に、翔波は深々と頭を垂れた。

「――閣下の御心のままに」

「……隊長。今さらですが、見逃してよかったのですか？」

舟影のなくなった川をじっと見つめる隊長に、配下の兵の一人がそっと近づく。

隊長は少し離れたところにいる綺理を一瞥すると、彼女をはばかるように声をひそめた。

「よくはないが、どうせこの一帯はこちらの陣営の勢力圏だ。強いて私たちが手を汚さなくても、お二人が玉造家領を出られるとは思えん。――お二人を追うのは紅楓の兵に任せよう」

三章　車輪は回る

（今頃、冬惺と翔波はどこまで逃げられたかな……）

綺理は、巾着袋の中身を一つ一つ確かめていた手を止めて、窓の外を見やった。

夕日に赤く染まった屋敷の庭に、冷たい秋風が吹きぬける。その拍子に綺理の装束の袖も煽られ、左手首にまだ薄く残っている痣がのぞいた。

――あの夜、泣き顔で玉造邸に連れ戻された綺理を待っていたのは、父の激しい叱責だった。その勢いたるや、頬を打たれなかったのが不思議に思えるほどだったが、隊長が自身の保身も兼ねてとりなしてくれたおかげで、なんとか鎮まった。綺理の手首に冬惺につかまれた痕がくっきりと残っていたため、「冬惺たちが綺理を無理やり連れ去ろうとしていた」という嘘にもそれなりの信憑性が生まれたらしい。そればかりか、

『娘さえ無事に取り戻せたなら、ほかのことは仕方あるまい』

父は隊長にそう言って、冬惺たちを取り逃がした責任を特に追及しなかった。この父にもまっとうに娘の身を案じる一面があったのかと、綺理は正直意外に思ったものだ。ただし怒鳴られた末に一方的に対面を打ち切られて、父に謀反について問うことはできなかった。

その後綺理は、再び八稜楼の部屋に閉じ込められたが、翌日ずっとおとなしくしていたのが

よかったのだろう。さらに翌日にあたる今日の午後には、本邸の侍女か家人がついていれば屋敷内を一定区画なら歩き回ってもよいことになった。

そこで綺理は、こうして自室にこまごまとした持ち物を取りに来たのである。

（あの二人なら簡単に捕まったりはしないだろうし……ここに来るまでに漏れ聞いた感じでも、冬惺たちの捜索は進展していないみたいだから、大丈夫だとは思うけど。……梨英や桂鈴たちなら、頼めばきっともっと情報を集めて教えてくれるのにな）

携帯用の薬の包みや小瓶を窓辺に並べながら、考える。

王都から伴ってきた侍女衆や家人たちは、いまだに綺理の周囲から遠ざけられている。

それは綺理にとって、ある意味心の慰めと言えなくもない。王都の玉造邸の者たちは謀反の件を事前に知らされていなかった——彼らは決して綺理たちを騙していたわけではなかった、という証左だからだ。むしろ彼らは、綺理たちと共に騙されていた側だろう。

（敵を欺くにはまず味方から、ってことなんだわ。私たちが本当に婚約式に向かうつもりでいたから、王都側は玉造家の動きに気づかなかった。そして玉造家の行列が崖崩れで妨害されたから、あれがお父さまの仕業だとは地方府も……誰も考えなかった）

奇襲を受けた地方府は、あの一夜で落ちたと聞く。その報は——玉造公及び王弟夏憬謀反の報は、いつ頃王都に届くだろうか？　次の戦火は、いつ、どこから燃え上がるだろうか？

（だけど……そうよ。近いうちに紅楓王家方が動き出すかもしれないっていうのに。今は玉造

家と王都側で争っている場合じゃないって、どうにかしてお父さまを説得できれば……）

ちょうど今夜、父のほうから話があると呼ばれている。説得するならそのときだ、と頭の中で言うべきことを整理していた綺理は、ふと指先に触れた物にはっとした。

（あ……冬惺にもらった組み紐）

巾着袋の底から引っ張り出したのは、『蓬』という色合いの組み紐だ。ところどころ泥で汚れてしまったため剣の柄に巻く紐にしていたのだが、その剣を先日万宵に折られたので、新しい剣を手に入れるまで巾着袋に納めていたのである。

（これ、お守りにしたいな。花結びにしてずっと持っていようかな）

冬惺の姿を思い浮かべて、手慰みのように紐を花形に結ぶ。

と、不意に羽音が聞こえてきた。

「――なんだ。当分は泣き暮らしていると思ったのだがね」

顔を上げると、予想通り窓辺の枝に鷹がとまっていた。

「万宵。よかった、近くにいたのね」

万宵がここにいる限り、冬惺たちが彼に逃亡を妨害される心配も、真羅が乗っ取られる心配もない。綺理はそう考えてほっとしたのだが、万宵は出鼻をくじかれたように絶句した。

「よかっ……？」

一拍遅れて、綺理もさすがにこの相手にはそぐわない言葉だったと思い直す。

「よくはないけどっ。どこに潜んでいるかわからないより、目の届くところにいられたほうがましなの。面と向かって文句も言えるし！　あなたね、いったいどういうつもりで私たちの邪魔をしたのよ。今度はなにを企んでいるの？」

びしっと指をつきつけ、廊下にいる侍女に聞こえないぎりぎりの声量でまくし立てる。

ぽかんとしていた万宵は、やがて目を細めた。

「文句……とはね。仮にも妖王を前にした人間の反応とは思えないな」

鷹の黄色い瞳の中で翡翠色の光が妖しくちらつき、異質な気配と威圧感が綺理を襲う。

常人なら腰を抜かして恐怖に凍りついていただろう。だが綺理はなんだかんだで大淵妖慣れしているし、相手の正体を知っている分、得体の知れない存在に対する恐怖はない。真羅の体を得ていたときの彼に比べれば、恐れるほどではないとも思える。

「おあいにくさま。私はあなたに対して怒っていることがありすぎて、怯える気になれないのよ」

負けじと睨み返せば、万宵が喉の奥でくつくつと笑う。

「なるほど。君は珍しい人間だな。私が興味を持つのもわからないではない。……だが君は、ずいぶんと落ち着いているようだが、私が君を傷つけに来たとは思わないのかね？」

「……大事な《契約者》に危害は加えないんじゃなかったの？」

それに意味もなく相手を痛めつけるのは彼のやり方ではない気がしたが、綺理は鷹の鋭い爪

と嘴を警戒して身構えた。万宵が楽しそうに首を傾げる。
「そうだね。体に傷をつけるつもりはないね。私は君の心が傷つくところを見たいのだよ。前にも言っただろう？――君を泣かせてみたいと」
「――っ！」
こちらに向かって飛んできた鷹に、綺理は窓辺から飛びすさって顔をかばった。
が、鷹が襲いかかってくることはなく、すぐに羽音が遠ざかる。
（……？）
おそるおそる腕を下ろし、目をぱちくりさせる。窓辺に並べていた薬類がごちゃごちゃにされているのに目を留め、二秒後、気づいた。
冬惺にもらった組み紐がない。
（あ……あああの、泥棒鳥――――っ！）
急いで窓の外を見れば、万宵が庭石の上で、花結びにした組み紐をくわえて振っている。
「か、返しなさいったら！」
綺理は片手ですばやく裳裾をからげ、窓枠に足をかけてひらりと庭に出た。万宵はそれを待っていたように飛び立ち、庭の奥へと逃げていく。
（泣かせたいって、そういうこと!?　あなたはいったい、何歳のいじめっ子よ！）
綺理は内心で絶叫し、大事な組み紐を取り返すべく走り出した。

万宵を追ううちに綺理は庭を横切り、屋敷の別棟の近くまできていた。
この件でまた楼閣の部屋に閉じ込められる羽目になったら万宵を恨んでやる、と拳を握りながら木戸をくぐり、鷹の姿を捜してあたりを見回す。
（いた！　まったく、いつまで追いかけっこをさせる気なの！）
頭上を旋回していた鷹が前方に降下していくのを見て、また走り出す。
――だが生け垣の向こうに回った途端、綺理は予期せぬ人影にびくりと足を止めた。
夕日を逆光に、一人の男がこちらに背を向けて立っている。
男の掲げた左手に、鷹が吸い寄せられるように降りていく。鷹を左拳に据えたその男が、布を巻いて細くまとめた髪の房を揺らし、綺理を振り返る。
男が薄紫の瞳を細めて微笑むと、左目の下に走った傷痕がわずかに引きつれて見えた。
「これは姫君。運命的な再会ですね」
「……空騅、将軍……？」
綺理は幽霊を見るような目で、ここにいるはずのない紅楓方の将軍を見つめた。
足に根が生えたように動かない綺理に、空騅は人のよさそうな笑顔で歩んでくる。
「失礼。私の鷹が取ってきたのは、あなたの物のようですね。お返しします」
組み紐を差し出す動きもごく自然で、つい先日右肩を深く斬られたばかりの人間とは思えな

い。綺理は空雛の右手と優しげな顔とを交互に見て、おそるおそる組み紐を受け取った。
「……怪我、どうしたんですか？」
「怪我？　なんのことです？」
空雛がきょとんと目を瞠る。
綺理がはっと万宵に視線を移すと、鷹は嗤うように目を細め、近くの枝に飛び移った。
――重傷を負っていたはずの空雛がありえないほどの短期間で回復し、彼の相棒の鷹には万宵が憑いている。となれば、空雛の回復に大淵妖の超常の力が関わっていることは疑いない。
（空雛将軍は、暗示で怪我のことを忘れさせられているの？　それとも……）
重大な疑問はほかにもある。綺理は空雛の間合いの外へ、じりっと後ずさった。
「どうしてあなたがここに？　屋敷の庭にまで、どうやって入り込んできたんですか？」
鋭く問うと、空雛がますますきょとんとした顔になる。
「おや、まだ知らなかったんですか？」
「……なに、を」
不吉な予感に、綺理は胸の前で組み紐をぎゅっと握った。
空雛はもったいぶらずに、さらりと答える。
「紅楓方と玉造公は、同盟を結んだんですよ。あなたの父君は私たちと手を組んで、紅楓の朔秋殿下を王位に即けることにしたんです」

（――――!?）

予想だにしない返答に、綺理は耳を疑った。

――ありえない。金蘭王家が白桜と紅楓の二家に分かれて争いだした初めのときから、玉造家は一貫して白桜方だった。白桜王家とは二代にわたって縁戚関係を結んでいるし、今回の謀反だって、影珀はあくまで白桜王家の中で王の首をすげ替えようとしていたはずだ。

「……そんなはず、ないわ。玉造家は白桜方よ」

「であると同時に、紅楓方とも手を組んだということです。玉造公は瑛国を二つに分けて、片方に白桜王家の夏憬どのを、もう片方に紅楓王家の朔秋殿下を王に据えるつもりなんですよ」

「嘘よ！」

娘婿の夏憬を王にするならともかく、旧敵の紅楓王家の者を王にしたところで父にはなんの利もない。――そう、綺理が続けようとしたときだった。

「本当だぞ、玉造の娘」

嘲笑混じりの声が割り込んできた。

殿下、と振り返った空虚の視線の先から、一人の青年が近づいてきた。夕映えで橙がかって見える金髪に、ぎらぎらした光を帯びた琥珀の瞳。

「いつぞやは、よくもやってくれたな。毒使いの女」

そう言って綺理の顎を乱暴につかんだのは、当年十九歳の紅楓家当主――朔秋だった。

綺理は以前、北部の異変解決に赴いたとき、紅楓家領内の砦で彼の虜囚となっている。あのときの朔秋は利利という大淵妖の暗示にかかっていたので、多少なり記憶が混乱しているはずだが、綺理が砦から逃げる際に兵に特製痺れ薬を盛ったことはしっかり覚えていたらしい。

（朔秋がここにいるってことは、お父さまは本当に――、っ！）

「触らないで！」

綺理は右手に組み紐を握ったまま、左手で顎にかけられた手を強く振り払った。と、その腕を逆につかまれ、袖がまくれて手首の痣があらわになる。

朔秋は軽く目を見開くと、その痣に指を這わせるように綺理の手首をつかみ直した。

「なにす――、痛っ！」

骨が軋むほど強く握られて、痛みで涙がにじむ。綺理が改めて「なにするのよ！」と抗議すると、朔秋は整った顔に残忍な笑みを浮かべた。

「俺のものに俺以外のやつがつけた傷があるのは、癇に障るんだよ……」

「――はあ!?　私がいつあなたのものになったのよ！」

綺理はひどい冗談だとばかりに顔を引きつらせ、それから妙な雰囲気にぞくりとした。

枝の上の万宵が面白がるようにこちらを見ている。空雛も同情するような苦笑いを浮かべ、綺理と目が合うと黙って肩をすくめた。

朔秋が喉を震わせて耳障りに笑う。彼は綺理の右腕をつかみ、両手の動きを封じてから、ぐ

っと顔を近づけてきた。
息がかかるほどの至近距離で、嗜虐的に言う。
「貴様はもうすぐ、俺の女になるんだよ。――紅楓王家と貴様の父親が同盟を結ぶ条件。それが、俺と貴様の結婚というわけだ」

――周囲の世界が、急に暗さを増した気がした。あたたかい橙色だと思っていた夕日が、暗い血の色に見える。落日の庭が血に染まったかのようだ。
しかし呆然とする一方で、綺理は頭の片隅でひどく冷静に納得していた。
ああ、これが父を紅楓方との同盟に踏み切らせたのだ――と。
父には娘が二人。ならば瑛国を二つに分けて二人の娘婿をそれぞれの王に据えれば、父は二つの国の王妃の父として、どちらの王よりも優位に立てる。
そしてこの同盟の話が出たのが、この一日二日の間であるわけがない。だとすると、父が綺理との結婚をちらつかせて冬惺に謀反への協力を迫ったのは、完全に空約束だ。父が欲しかったのは、忠実な王弟にして護国大将軍が春怜王を裏切ったという事実だけ。それさえ王都側に知らしめることができれば、あとは冬惺を戦死させることさえ厭わなかったはずだ。
（お父さまが私を無事に取り戻すことを最優先にしたのも、政略の道具にするため、で……）
政略結婚の道具。大貴族の姫に生まれついたら、好きでもない相手に嫁がされるのなんて当



たり前だ。だけど、これは。——こんなのは！

「光栄に思えよ。乾ノ術を使えない外れ者の貴様を、この俺の妃にしてやるんだ。願ってもない幸運だろう？　なぁ、綺理？」

（いっ……、や……）

ねっとりとした笑みに、綺理はぞわりと鳥肌が立った。朔秋の笑みが深くなる。

「自分の婚約者が俺の女になったと知ったときの白桜の冬惺の顔を、この目で見てやれないのが残念だがな。……白桜の冬惺以外のやつは願い下げ、とか言っていた貴様を泣き叫ばせてやるのが今から楽しみだよ。いつぞやの礼も兼ねて、たっぷりといたぶってやるからな」

（や、やだ……っ。助けて、冬惺……！）

胸中でその名を叫んでも、望む助けが入るはずはないと改めて悟らされただけだ。

なんという運命の転落だろう。父の変節の代償として、冬惺以外の人と結婚。それも相手が朔秋などと。なまじな悪夢よりひどい現実に、泣きたくなる。

——だが。

打ちのめされた表情の自分が朔秋の瞳に映っているのを見たとき、綺理はすっと頭の芯が冷えるのを感じた。代わりに、胸の奥が燃えるように熱くなる。

泣いたら、負けだ。

朔秋は綺理をいびるのを楽しんでいる。万宵は綺理を泣かせたくてここに連れてきて、今も

高みの見物をしている。ここで弱いところを見せれば、彼らを喜ばせるだけだ！

ひるむな、呑まれるな、このたぎる熱を冷ますな。冬惺は、必ず綺理をさらいに来ると言ってくれたのだ。あの言葉がある限り、絶望する必要なんてない！

「どうした、綺理？　怯えて声も出せないのか？　んん？」

なぶるように言う朔秋を、綺理はきっと睨み上げた。右手の中の組み紐をお守りのように握り、碧玉の瞳を闘志で爛々と輝かせる。

「さっきから気持ち悪すぎて言葉が出てこなかっただけよ！　鳥肌が立つから、馴れ馴れしく呼び捨てにしないでくれる？　というかあなた、自分がどれだけ気色悪いか自覚してる!?」

叩きつけるように返すと、朔秋が驚いたように目をしばたたかせた。

「ふ……ふん、貴様は相変わらず生意気だな！　だがじゃじゃ馬のほうが乗りこなし甲斐があるという。貴様くらい図太い女のほうが、こちらも楽しめるというものだ！」

「私のほうは、あなたみたいな小悪党じみた男が相手じゃ張り合い甲斐がないですけどね！」

「なんだと、貴様……っ」

朔秋が拳を振り上げる。綺理のほうも、反射的に相手の股を蹴り上げてやろうと身構える。

だが一番速かったのは、二人の間にすっと差し入れられた腕だった。

「――お戯れは、そのあたりで」

空騒がするりと割って入り、やんわりと朔秋に手を下ろさせる。ただし、かかとでさりげな

く綺理の裳裾を踏みつけたところを見ると、どちらをかばっての介入かは謎だ。

「空雛……」

「殿下。婚約もまだのうちから、そう急かれることはないでしょう」

穏やかな物言いに毒気を抜かれたのか、それとも興が削がれたのか。朔秋は綺理の手を解放すると、「まあいい。今日のところはこれくらいにしてやる」と予想の範囲を一歩も出ない捨て台詞を残し、大股で屋敷のほうへ去って行った。

「……姫君。手首の具合は大丈夫ですか？　手当ての必要は？」

朔秋の後ろ姿が消えてから、空雛が綺理に向き直る。綺理は新しくつけられた痣をさすって、痛みよりも冬惺の痕跡を消されたことに顔をしかめた。

「たいしたことはないです。それに私も薬師の端くれですから、手当てが必要なら自分でできます。……それと、一応、ありがとうございました。朔秋を追い払ってくださって」

「礼には及びませんよ、姫君。私は悪人ですけど、女性が暴力をふるわれているのを見て楽しむ趣味はないんです。それが特別な興味を寄せている女性であれば、なおさらね」

空雛がにこりと笑う。自称悪人とは思えないほど人好きのする笑顔だ。しかし綺理はもう騙されない。彼は微笑み、微笑み、そしてすがすがしく悪事を行える人間だ。

「……将軍は、前に会ったときもう知っていたんですね。私が朔秋と婚約させられることを」

確信を込めて問えば、空雛は爽やかにうなずく。

「もちろんですよ、姫君。『綺理姫を王妃に迎えると約束すれば、玉造公を味方に引き入れることができる』と殿下に進言してこの同盟を実現させたのは、私ですから」

「――だから、あんなことを言ったんですね」

綺理は、以前聞いた空雛の言葉を脳裏でなぞった。

『婚約したからといって、心まで相手に捧げなくてはいけないわけじゃない。恋心はそう簡単に封じられるものじゃない。ほかの人を想っていてもいいと思いますよ』

今ならわかる。あれは、冬惺を想っていながら朔秋に嫁がされることになる綺理への、せめてもの手向けだったのだ。

「だから、私のなけなしの好意だと言ったでしょう？――まあ正直に言うと、運命の操り手や予言者の真似事をしてみたかったというのがほとんどなんですけどね」

（――予言？）

なぜかその言葉が引っかかった。

綺理は心当たりを探して記憶の糸をたぐり――次の瞬間、雷撃に打たれたように凍りつく。

『あなたの手札が裏返ります』

占術を得意とする琅公国公女、貴銅の明花。彼女の占いだ。

『大きな変転が訪れ、味方だと信じていた人がそうではなくなります』

明花が最初に綺理を占ったときの結果。あの占いだけは外れたのだと思っていた。――だが

本当はあれは、綺理のこの運命の変転を予言していたのではないだろうか？

（玉造家は春怜陛下に背いて紅楓方と手を組み、それまでの敵と味方を裏返した……！）

立ちすくむ綺理の心中も知らず、空騅は遠くから聞こえてきた呼び声に振り返った。

「……ああ、あなたの侍女たちが捜しに来たようですね。姫君がこちらに来たのは私の鷹が悪戯をしたせいだと、私から説明しておきましょう」

空騅がそばをすり抜けていく。鷹も彼を追って飛び立ち、綺理は独りその場に残される。

自身の影が長く伸びる黄昏の庭で、綺理は占いの次の一節を我知らずつぶやいていた。

「『動きだした車輪を』……『止めることはできません』……」

――古き時代。北瑛島は大きく北部と南部に分かれていた。

北部は、玉造と鏡作の二大家が二分して治める、豊かな北部人の領域。南部は、小国がひしめき合って戦を繰り返し、乱世に乗じて数多の淵妖が跋扈する混沌とした地だった。

あるとき、その混乱した南部をまとめ上げる者が現れる。南部の一豪族の若者にして、刀聖と謳われた稀代の戦上手――覇王志輝である。

志輝はわずか数年で南部を制圧し、降神術の使い手であった王妃と共に淵妖を平らげると、

その勢いに乗って北部にも侵出してきた。北部人は、誇りを砕かれるほどではないが、時代の趨勢を思い知るには十分な負け戦を味わい、臣従誓約という形で南部人の王権を受け入れる。

そうして志輝は二大家を通じて北部を支配下に置き、史上初めて北瑛島を統一。王妃の名を取って家名を『金蘭』と改め、金蘭王朝を打ち立てた。

そして時が下り――現在。その金蘭王家も、南部を基盤とする白桜王家と、北部に支持層を持つ紅楓王家とに分かたれることになった。

「元来、北部と南部は別々の歴史と文化、支配体制を持っていた。それを南部人支配のもとに同列に治めようとするから、歪みを生むのだ。ならば今一度原初に立ち返ってこの国を二つに分け、北部には北部の王を、南部には南部の王を立てるのが理と義にかなったことだろう」

影珀は言いながら、卓上に広げられた地図に手を伸ばした。

北部と南部を区切る線が書き加えられた、瑛国の地図。その北側に楓の葉形の紅玉髄を置き、南側に桜の花形の白玉を置く。――北部に紅楓の朔秋、南部に白桜の夏憬。

二つの瑛国に、二人の王。

すっきりとした構図だし、一見とても綺麗な解決策に見える。

だが綺理は、決してそうは思わない。確かに北と南の対立は、伝統的なものとして根強く残っているが、瑛国統一から早数百年が経っているのだ。言えば影珀は余計に意固地になるだろ

うが、もはや北部と南部を分離するのは現実的ではない。――なによりも。

「……ですがお父さま。なぜよりにもよって、紅楓方などと」

卓を挟んで立つ綺理は、抑えきれない怒りで拳を小刻みに震わせた。

影珀が綺理を部屋に呼んだのは、朔秋との政略結婚の話を伝えるためだった。そこまでは綺理も予想していた。けれど影珀が、娘の心情を慮る言葉をかけるどころか、反射的に「嫌です」と答えた綺理に「おまえの意思など関係ない」と頭から怒鳴りつけるとまでは予想していなかった。

紅楓王家は敵だと教えられて育ち、ほんの二日前まで冬惺の事実上の婚約者として過ごしてきた娘に対して、あんまりな仕打ちではないか。

そしてたとえ個人的感情を横に置いたとしても、影珀の選択には納得がいかない。

「夏の事件をもう忘れたんですか？　紅楓方はほんの二月前に私を殺そうとしたんですよ!?　娘を殺そうとした敵とあっさり手を組むなんて、お父さまにとって私はなんなんですか！」

叫んでから、綺理は後悔した。この父にとって娘がなんであるかなど、とうに知っていたはずなのに。

「おまえが、私にとってなんであるかだと……？」

案の定、影珀の碧玉の瞳に怒りの光が閃いた。

「綺理。おまえはどうしようもなく不出来な娘だ。私に紅楓方と結ぶ道を選ばせたくなかった

というなら、私が命じたときに冬惺を色仕掛けで籠絡していればよかったのだ！　それすらできなかった身で、口答えをする権利があるとでも思うか。おまえはただ私の言いなりに、私の決めた相手と結婚すればいい。乾ノ術を使えないできそこないのおまえに、未来の王妃の座という最も高い売値がついたのだぞ！」

（――っ、売値……）

おまえのために良縁を用意してやった、とすら言わない。

父は以前からこんな人だっただろうか。今までは綺理が冬惺との結婚に否やを言わなかったから、父のこうした面が浮き彫りにならなかっただけなのか。

「紅楓方がそれほどの好条件を提示したのも、あの暗殺未遂の件の落とし前が含まれているからだ。――それにあちら側も、同盟にあたっての『誠意』としてこれを差し出してきた」

影珀が指を鳴らすと、綺理の後ろで扉が開いた。

振り返ると、二人の兵が入ってきて、運んできたものを綺理の前にどさりと下ろす。

（――っ！）

それは、後ろ手に縛られた少年だった。

さんざん痛めつけられたのか、単には血や泥が付着し、袖や裾からのぞく手足には痛々しい痣が見え隠れしている。

「あの事件の実行犯が生きていたと言って、鷹居の空雛が引き渡してきた。――確認しろ。琅

の公女の侍女に化けておまえを暗殺しようとした間者は、こやつに相違ないな？」

兵の一人が少年の短い黒髪をつかみ、ぐいと顔を上げさせる。この確認のためか、顔にだけは殴られた痕がない。ぐったりと気を失っているので漆黒の瞳は見えないが、彼の双子の姉と同じその顔は、綺理には見間違いようがなかった。

「……間違い、ありません。奏珠――あのときの間者です」

綺理は余計な動揺を表に出さないよう、努めて淡々とした風を装う。

奏珠。確かに彼は最初に会ったときは敵だった。しかしつい先日鏡作の里で再会したとき、奏珠は鏡作家当主となった翔波に忠誠を誓い、今ではひそかに彼の部下となっている。長かった髪を短く切ったのも、変装などのためではなく、主君を替えた証だ。

（あのあと奏珠は、二重間者になって逆に紅楓方の内部を探るって言っていたのに……）

――暗殺事件の実行犯は自害したと思われていた。彼の引き渡しは、影珀との交渉に絶対に必要だったわけではない。それなのに奏珠は、かつての命令主と合流した矢先に捕らえられ、交渉材料のおまけとして影珀に投げ与えられたのだ。

綺理は満身創痍の奏珠を見下ろして、ごくりとつばを飲んだ。

「……お父さま。この間者を、これからどうなさるおつもりですか」

「玉造家に害なそうとした者だ。見せしめになぶり殺す。それでおまえの気も晴れるだろう」

当然と言わんばかりの返答に、冷や汗がこめかみを伝う。影珀が「連れて行け」と合図する

ように手を上げるのを見て、綺理はとっさに口を挟んだ。
「でしたらそれよりも、この間者、私にください」
「おまえに？」
怪訝な顔をした父に、綺理は精一杯暗く、あきらめたような表情を作ってみせた。
「望まない相手と婚約させられることになって絶望している娘の、このくらいのわがままは聞いてくれませんか？……私だって、八つ当たりする相手くらい欲しい気分なんです」

最初に知覚したのは、空間に充満する薬の臭いだった。
身じろぎすると体中が軋んで激痛が走る。
どうやら自分はまだ生きているらしい。まずそう思って、次いでここはどこだろうという疑問が浮かぶ。ここには牢の石床の冷たさも、汚臭もない。縄を解かれて清潔な敷布に横たえられているようだ。
薄く目を開けると、木の根や皮や草の束が梁から吊り下がっているのが見えた。壁面には薬簞笥。板敷きの土蔵の中のようだが、ほどよく暖かいし、虜囚を閉じ込めるには上等すぎる。
（手当て、してある……？）

腕に包帯が巻かれているのが目に入った。意識を失う前の状況の割に体が楽だと思ったのは、全身の傷に手当てが施されているからのようだ。単も新しい物に着せ替えられている。

「……蓮、老……師？」

既視感にぽつりとつぶやくと、土蔵の向こう端で人が椅子から立ち上がる音がした。

そして視界に入ってきたのは、悠蓮の染めたとしか思えない鮮やかな真紅の髪ではなく、灯明台の明かりに映えてまぶしく光る、金の――。

「……綺理、さま」

奏珠の漆黒の瞳がこちらを捉えるのを見て、綺理はほっとした。

「奏珠。目、覚めたのね。水飲める？」

綺理がかたわらに膝をつくと、奏珠は身を起こそうとした。が、すぐにうめいて敷布に倒れこむ。綺理が水の入った杯を口元に当ててやると、彼は横になったままほんの少しなめ、なにも混入していないと確かめてからごくごくと飲んだ。

「綺理さま。……ここは、いったい？」

「玉造家本邸の、私の薬房よ。……ええと。あなた、この数日中に起きたこととか、自分が玉造家に引き渡されたいきさつは知っているの？」

どこから説明すべきか迷ったが、幸い奏珠はだいたいの事情は把握しているようだった。
「ええ。こうした状況になったら、ますます私が紅楓方に潜入する意義が出てくると思ったのですけどね。……一度任務に失敗した身とはいえ、こうも簡単に用済み宣告が下るとは思いませんでしたよ。さすがに傷つきました。矜持が」
奏珠はかすれた声で自嘲した。それでも最後の一言を冗談混じりに付け加える余裕があったのは、彼のほうが先に紅楓方を見限り、翔波という新たな主人を得ていたからだろう。
「とりあえずは安心して。あなたの身柄は私が引き取ったから、これ以上傷つけられる心配はないわ。この薬房にはほかの人間も入れさせないし」
綺理がきっぱりと告げると、奏珠は伏し目がちな双眸をわずかに瞠った。
「よく、許されましたね。私を助けて、不自然に思われませんでしたか？」
「んー。実はこの薬房もね、そのうち取り壊せって命令されてるの。じゃあその前に薬を処分するからこの間者が欲しいって言ってみたら、許可されたわ」
「……。それは、なにか誤解されていませんか？　あなたの人間性とかそのあたりが」
奏珠の目が薬房内を泳ぐ。「毒蔵」とでも言いたげな目だ。
綺理は空になった杯に水を注ぎ、肩をすくめる。
「誤解されたっていいわよ。なめられなくてすむもの。――それよりあなたは、ぐっすり眠って体を治すことに専念して」

二杯目の水には、催眠効果のある薬を混ぜた。奏珠は飲んでから気づいたようだが、自分の体に薬と休息が必要なのは確かだと判断したのか、なにも言わずに残りも飲んだ。

やがて奏珠が寝入ると、綺理は彼の細い首ににじむ汗をふき、掛布をかけ直してやった。

――奏珠は翔波の部下で、佐鏡の沙良の双子の弟で、綺理の師匠の知己で、とにかく綺理が救うべき人間だ。しかも綺理と違って、彼は命の危機に直面している。綺理がかばわなければ彼はなぶり殺しにされていたし、今後も彼を助けられるのは綺理しかいない。

（そうよ。私は、自分の悲劇に浸っている場合じゃない！）

泣くものか、へこたれるものか、敵に弱さを見せるものか。そんな覚悟を、守るべき者がいることでなんとか支え、綺理は気合いを入れるように自分の両頬をぱしんと叩いた。

そうして薬房を出た綺理は、すぐに気合いを入れなおしてよかったと思うことになった。

薬房の土蔵と、屋敷をつなぐ柱廊。

その柱の一本に寄りかかるように、空騅が腕を組んで立っている。肩には、鷹。

「こんばんは。いい月ですね、姫君」

「空騅将軍、屋敷の中で迷子にでもなりましたか？　紅楓方の皆さまが滞在している棟は、あちらだと聞いておりますが」

綺理はつかつかと近寄ると、庭を挟んだ向こうの棟をびしっと指し示した。

空騅もこの反応は予想していなかったのだろう。唖然としている彼に、綺理は一礼する。
「では、ごきげんよう」
「――これは、つれないことを。私があなたを心配して来たとは思ってくれないのですか？」
空騅が気を取り直したように、すっと進路に立ちはだかった。綺理は嫌々足を止めて顔をしかめる。
「そんな突飛な発想をするほど、私はあなたという人間を誤解してはいません」
「そんなことはないですよ、姫君。私は本当にあなたのことが心配で来たんです。――あなたが薬房にこもるふりをして逃げ出すことでも考えていらっしゃったら、困りますから」
「……ご心配なく。そう簡単に逃げられるとは思っていませんから」
綺理が万宵をちらと見て言うと、空騅は「それはよかった」と笑んだ。
やわらかく笑んで、彼は風に舞う葉がくるりと裏返るような自然さで、笑顔の種類をがらりと変える。薄紫の瞳を冷然と細め、左目の下の傷を凶悪に見せる、凄みのある笑顔。
「よかったです。盟約の要のあなたが姿を消せば、こちらも玉造家の裏切りと見なしてそれなりの措置を取らねばならなくなりますからね。――この屋敷は人が多いので面倒ですが」
底冷えのするような口調。だが綺理は、彼を真っ向から睨み返した。
「ご忠告どうも。ですがここが私の戦場なら、私はここで戦います」
「ほう。なにと？」

「あなたの好きそうな言葉で言うなら、運命と」
綺理はきっぱりと言うと、空騅の驚いた顔に少しだけ溜飲を下げ、一礼して立ち去った。

「あそこまで打たれ強いとは思わなかったな」
夜も更けた頃、万宵は露台の欄干にとまって、綺理の眠る八稜楼のほうを見上げていた。
かたわらで欄干にもたれる空騅が、褐色の髪を風に遊ばせながら首肯する。
「私も彼女が泣き崩れでもしたら、適当に優しくして手懐けるつもりだったんだが……思わず素で対応してしまう。……それにしても、おまえもずいぶん姫君にこだわるな？」
「ああいう人間はめったにいないのでね」
探るような言葉をさらりとかわすと、空騅は質問の方向を変えてきた。
「――化け物。おまえが私に手を貸すと言ったあと、玉造公が一気に紅楓方との同盟に乗り気になったのは、いったいどういうからくりだ？」
「さてね。君にとって必要なのは、結果と種明かしのどちらだね？」
万宵は肩を、というより翼をすくめ、嘴を空騅に向けた。
「そんなことより鷹将軍。君こそ、あんな戯れ言を本気で受け入れる気なのかね？」



「あんな戯れ言とは？」

「北の王と南の王。君は紅楓王家に、北部の玉座だけで満足させる気かね？　王が二つに分かれたら、そのままではいられないよ。一方が他方を滅ぼすか、あるいは一つに戻るか――」

「相手を滅ぼす、に限りなく近い方法で融合をはかるさ」

返ってきた答えに、万宵は目を丸くした。

――空騅は淵妖の王が二つに分かれていることも、真羅と万宵の関係も一切知らない。こちらの含みに気づいていないにもかかわらず、この絶妙な答えだ。おかしさがこみ上げてきて、万宵は体を震わせてくっくっと笑った。

「なんだ？」と不快げに眉を寄せた空騅に、万宵は「気にしないでくれたまえ」と片翼をばたばた振る。空騅はまだ不審そうだったが、追及するのも面倒になったのか続けた。

「――綺理姫は、白桜王家の傍系の姫でもある。白桜王家の男を根絶やしにしてから、白桜の血を引く姫を朔秋殿下と結婚させれば、『婚姻によって二王家が手を取り合い、内乱を永遠に終結させる』という美しい物語を吹聴できるということだ。ついでに白桜と紅楓の紋を交ぜて新しい家紋を作ったっていい。そうやって王家が一つになるのなら、瑛国を南北二つに分ける必要もなくなる」

陰惨な手段をさらりと口にして、空騅は薄く笑う。

「化け物め、私になにか吹き込むつもりでいたか？　あいにくと、私はおまえにけしかけられ

てなにかを為すつもりはない。私の計画も、野望も、悪事も、すべて私自身のものだ。おまえがそれを手伝うのは勝手だが、私がおまえの手伝いをすることはない」

彼は言い切ると、欄干から背を浮かせた。万宵を斜に睨む。

「それと、私の相棒の体を我が物顔で使うな。ここ数日、空羽と交替すらしていないだろう」

万宵がまた翼をすくめると、空騅は舌打ちして露台から出て行った。

足音が遠ざかり、気配が消える。

露台が静寂に包まれると、万宵は欄干の上で月を見上げた。

「すべて私自身のもの、か。迷いなく言えてけっこうなことだな。――閃禍」

「――は。『閃耀に禍する者』閃禍、おそばに」

応える声は、すぐ背後、欄干のもとから上がった。音も気配もなく露台にやってきた人影が、暗がりの中で跪いている。万宵はそちらを振り返らずに言った。

「閃禍。君のほうは着々と馴染んでいるようだね」

「はい、妖王陛下。すべてが計画通りに進んでいます。今にこの北瑛島中を内乱の戦火が覆い、乱れた世には淵海の同胞があふれることとなりましょう」

「ふむ。鷹将軍の言う『美しい物語』に至る頃には、地上はどこまで荒れ果てているかな」

万宵は楽しげに言う。彼は空騅を勝たせたいわけではないのだ。ただ戦を起こし、長引かせ、北瑛島を泥沼の乱世に放りこみたいだけ。そうすれば北瑛島を淵海に沈めるのも易くなる。

「地上がどうしようもないほど荒めば、真羅も地上を守る気が失せるだろう。さて、《調停者》たちはどう出るか、それともなにもできないか――」

今は強がっている綺理も、じきに絶望してへたりこむだろう。そのとき彼女は、お願いだからこんなことはもうやめてと万宵に泣いてすがりつくだろうか。

想像してみれば、それはなかなか悪くない光景に思えて、万宵はくすくすと笑った。

――そして、その翌々日。

かねてより準備されていた婚約式は、玉造の綺理と紅楓の朔秋のものとして執り行われた。

紅楓方の者たちと、玉造家及び玉造家に呼応して反逆に加わった北部貴族たち。婚約式は、彼らが一堂に会して盟約を固める儀式の場でもあった。

並み居る者たちの前に、綺理は豪奢な装束を着せつけられて出された。衣裳も髪形も装飾品もすべて冬惺との婚約式のために準備していたものだが、今では選んだときのふわふわした気持ちは失せ、盛装が重く感じられた。

隣に並ぶのが朔秋だと知っていたら思いっきり手抜きして選んでやったのに、と内心でぶち

ぶち文句を並べて、負けん気を支える。綺理を脅していびろうとする朔秋を毅然とあしらい、居並ぶ者たちに与しやすい小娘と思われてたまるかと、必死で凛とした態度を保ち――。

そうしてその日の午後、綺理は今や自室となった八稜楼の部屋でぼんやりとしていた。

（本当に、婚約しちゃったのよね。冬惺以外の人と……）

静かな部屋に一人。婚約衣裳は着替え、重い装飾品も外しているが、少し動くと左手首の二重の銀環――婚約の証に朔秋の手ではめられた物――が、シャンと鳴って存在を主張する。

（紅楓王家の玉座が安泰になるまでは、結婚はないってことになっているし、髪を切らずにすんだのはよかったけどね）

長椅子の背に身を預けたまま、長い金髪を指でもてあそぶ。

――影珀、玻璃、夏憬、その他白桜方でありながら反逆に加わった者たちは、先ほど盟約の儀式の一環として髪を切った。男性は結った髪の房を切り落とし、女性は肩までの長さに。

身分ある者が後ろ髪を切るのは、己の信ずるものや生き場所を変えたという証。いわば心を変えた証だ。心まで謀反人になったつもりはない綺理にとって、断髪は耐えがたい。なによりも冬惺への想いを変えないという証に、絶対に髪を切るものかと意気込んでいた。

ところが断固抵抗する必要はなく、綺理だけはあっさりと断髪の儀式を免除された。

（免除された理由が、『結婚のときまでに髪が伸び揃わないと婚礼衣裳の髪形に障りが出るから』だっていうのが複雑だけど……）

うっかりため息をついてから、これはまずいこれはまずいと心の中で唱える。このまま長椅子に沈み込んでいたら、立ち上がれなくなりそうだ。ただでさえ、婚約式で心を強く保てたことにほっとして、緊張の糸が切れそうだというのに。

（せめて気兼ねなく話ができる相手でもいればなあ。奏珠……は、駄目よね。今日はまだ奏珠の世話をしに行く時間じゃないし、半病人を起こして愚痴を聞かせるのは――って、あ）

以前愚痴の聞き役になってくれた相手の顔がぽんと浮かび、綺理は目をぱちぱちさせた。

（……）

そろりと扉のほうを見る。今この部屋には綺理だけだ。婚約式で疲れたから一人で休ませてほしいと訴えたら、久しぶりに侍女を全員下がらせることができたのだ。

ちらりと窓辺の陽だまりを見る。窓は西向き、夕日が見える。空に鳥影はない。

――今なら。

綺理は弾かれたように立ち上がった。窓辺に立ち、西の空の傾いた太陽に右手を伸ばす。

「帰命したてまつる――」

舌に慣れた呪文を唱えてその名を呼べば、眼前にこの世ならぬ火柱が燃え立ち、炎のような

緋色の髪を高く結った長身の乾ノ神衆が顕現する。
「火雷明王……」
ものものしい蘇芳色の武具に身を固め、眉間にしわを寄せ、そのくせ金色の瞳の奥に優しい光をたたえた彼の姿を目にしたら、綺理は安堵がどっと全身を包むのを感じた。
不覚にも、気張っていた体から力が抜けそうになる。
そういえば冬惺や翔波と別れて以来、まわりは敵ばかりだった。万宵がいつも近くにいるため、真羅もここには近づけない。火雷明王が、初めて安心して寄りかかれる味方なのだ。
「我が姫、……なにがあった？」
低い声に気遣わしげに問われ、綺理は崩れるように苦笑した。
「……いろいろ、あったんです。すみません、思いっきり愚痴を言っちゃっていいですか？」
神妙にうなずいた火雷明王と、窓辺の長椅子に並んで座る。前にも王都の玉造邸でこんな風に火雷明王に話を聞いてもらったことがあった。今思えばあのときの相談事はなんとのん気なものだっただろう。あれから果てしなく遠いところまで来てしまったような気がする。
綺理はすっと息を吸い、最初から順に説明しようと口を開く。
そうして言葉にしはじめたら——なにかが決壊した。
すぐ隣に火雷明王がいて、綺理の話をじっと聞いてくれる。それだけでずっと張り続けていた虚勢がはがれ落ち、やがて綺理は、顔をくしゃくしゃにして堰を切ったように語っていた。

愚痴をぶちまけて景気づけをするはずだったのに、口をついて出るのは泣き言ばかりで、声までがだんだん泣きそうに震えてくる。

父と姉、義兄の謀反。冬惺たちとの離別。万宵の存在。紅楓との同盟。朔秋との婚約――。

「今日の昼に婚約式があって、冬惺との婚約のつもりで準備していたのが、全部……っ」

漏れそうになった嗚咽をのみこむと、隣で火雷明王が遠慮がちに動いた。力加減がわからずに戸惑っているのか、おっかなびっくりといった風情で綺理の背をさする。

不器用な、けれどあたたかい手のひらの感触に、胸につかえたものが溶けていく気がした。

「辛い身の上で……独りで耐えて、頑張っていたのだな」

言葉少ないながらも労るような声が、心の隙間にしみわたる。返事を声にできなくて思わずうつむけば、大きな手が背を離れてそっと頭にのせられた。

（あ……）

その途端、綺理は自分の無意識の望みに気づいてしまった。

火雷明王を呼んだのは、弱音を吐いて慰めてほしかったからだった。

けれど同時に、真に求めていたのはこの手ではなかったのだ。火雷明王はとてもいい人だと思うし、その人のよさに甘えて安らぎを得ているというのに、綺理の心はいつも頭をなでてくれた彼の手との違いを思ってしまう。

（冬惺……）

「……姫」

綺理がかすかに身じろぎしたのが伝わったのか、火雷明王が手を浮かせた。だが彼はその手を引っ込めるのではなく、逆にためらいがちに差し出してきた。

「我が姫。――私の翼なら、おぬしをここから逃がしてやれるぞ」

落とされた言葉に、顔を上げる。

火雷明王の金の瞳が、綺理を痛ましげに見つめていた。

綺理がこの手を取れば、彼は大天火雷金翅明王の名の通りの金の翼で、今すぐ綺理を連れ出してくれるだろう。何人にも邪魔をされずに、簡単にこの運命から飛び出せる。

――けれど。

「ありがとうございます。……でも無理です。私が逃げたら、殺される人たちがいるんです」

静かに首を横に振る。

空雛の『忠告』はそういうことだ。綺理は盟約の証。証が失われたと知れば、紅楓方は玉造家の背信とみなして、迅速に、容赦なく、屋敷の者たちを手にかけていくだろう。影珀や玻璃、夏憬は最優先で捕らえられるだろうし、ここには綺理が王都から伴ってきた親しい侍女や家人たち、里で養育されていた頃の知己がたくさんいる。彼らを裏切ることはできない。

それに庇護者である綺理がいなくなれば奏珠の身も危うい。彼を放り出せない。

「……そう、か」

「はい。それにここから逃げ出しても——行く場所が」

その先は言わぬが花だろう。乾ノ神衆に連れられて逃げても、冬惺のもとへは行けない。降神術の使い手の女性は王妃になるさだめ。王位争いの内乱がまさに始まろうというこの時期に、綺理が降神術を使えることが万人に知られれば、綺理を妃にした者が正統の王ということになってしまう。それでは王都に戻っても春怜の妃にされるだけで、すべてを捨てて恋しい人のもとへ逃げるという夢想の生まれる余地すらない。

「それに……実は、冬惺が別れ際に言ってくれたんです。必ず私をさらいに来る、って。だから、あの、その、なんといいますか……」

口にしてから、綺理は急に恥ずかしくなった。おまけに口づけのことまで思い出してしまい、赤くなって両手で頬を覆う。

あのときはお別れのつもりだったからあんな大胆なことをしてしまったが、要するに不意打ちで冬惺の唇を奪ったわけで、彼はいったいどう思ったのやら……。

綺理がもごもごと口ごもっていると、火雷明王が手を引っ込めた。

「すまぬ。私は埒もないことを言ったようだ」

「いえ、嬉しかったです！　だって、火雷明王は……私の味方だって言ってくださったんですよね？」

後悔のにじんだ声音に、綺理は力強く答えた。申し出そのものは非現実的でも、火雷明王の

その心は届いた。

微笑んだ綺理に、火雷明王がほっとしたように眉間のしわを消す。

「うむ。……その、すまぬな。どうにも私は経験が足りぬようだ。どうすればおぬしの慰めになるかわからぬ。……面目ないが、教えてほしい。なにか私に力になれることはないか？」

不器用な言葉から伝わってくる気持ちに、綺理は胸があたたかくなった。味方がそばにいるというのは、それだけでこんなにも心強いのだと、改めて知った気がする。そう考えれば冬惺と翔波のことも安心だ。あの二人には互いがいるし、きっと真羅もついていてくれる。冬惺をお願いと頼んでおいたからには、翔波も冬惺に無茶はさせないだろう。

だんだんと元気がわいてきて、これならまた立ち上がれそうだと思ったから、綺理はあともう一押しを火雷明王に頼むことにした。

「それじゃ、最初の招請者さまのことを話してくれませんか？　火雷明王の最初の招請者さまって、私のご先祖ですよね。初代志輝王の王妃、金蘭さま」

「そのとおりだが……そのようなことでよいのか？」

「はい。前に、強くて気高い人だと言ってらしたから。私もそんな風になりたいんです」

火雷明王は思い出をたどるように瞳をさまよわせた。そしてふと、目許を和ませる。

「――迷わぬ人、だったと思う。己がなにを守りたいか、なにと戦うべきか、どんな未来を目指しているのかを、あの人は迷わなかった。じっとしているのは性に合わないと言って、いつ

も迷わずに目的に向かって突き進んでいて……そんな姿をまぶしいと思っていた」

（……迷わずに、突き進む）

綺理の中でなにかがかちりとはまる音がした。

――ああそうだ。運命と戦うなどと宣言しておきながら、自分は具体的にここでなにをしたいか定まっていなかったのだ。父と王都方とで刃を交えたとき、自分がどちらを応援したいのかさえも。自分の目的がわからないまま、ただ強がっていたって続かない。なにとどう戦えばいいかもわからない。

考えよう。見つめなおそう。敵と味方がぐちゃぐちゃになったこの状況で、自分がなにを望んでいるのか。裏切れないものはなに。守りたいものはなに。戦うべきものはなに。

（私はこの謀反の中で――内乱の中で、いったいなにをしたい？）

射し入る西日が、窓辺の二人をあたたかく照らす。

ぽつぽつと言葉を交わしながら気持ちを整理して、やがて火雷明王が天上に帰った頃には、綺理の心にある決意が生まれていた。

四章　王都

――玉造公と王弟夏憬が共謀し、謀反。

――玉造公、紅楓方と同盟を結び支持を表明。

わずかな時間差をおいて届いた二つの報せは、王都輪瑛を震撼させた。

一年と半年前、王弟冬惺が紅楓の軍勢を破ったことで、終止符が打たれたと思われていた内乱。その炎が、白から紅へと色を変えた北部で再び燃え上がった。

白桜王家の最大の支持者として春怜の即位に貢献し、『玉造ならぬ王造』とまでささやかれていた影珀。彼が『王造公』のあだ名の通り、新たな王を造りなおそうとしたのだ。

今はまだ遠い北部でのこととはいえ、彼らがいずれ王都に進軍せぬはずがない。戦の準備が始まり、王宮にも市中にも不安と動揺が広がっていた。

そんな中、王都の者たちにとって大きな希望となる朗報が入る。

かつて紅楓軍から王都を守った護国大将軍――安否が危ぶまれていた王弟冬惺の帰還である。

「冬惺公閣下！　よくぞお戻りに……！」
「ああ。兄上はこちらだと聞いているが」
騒ぎをさけるようにひっそりと王宮に戻った冬惺は、その足で兄王の執務室へ向かった。
王の侍従は冬惺の姿に安堵の息を漏らし、すぐにお取り次ぎしますと一礼する。
だが、取り次ぎを待つまでもなかった。
執務室の扉をけたたましく開ける音がしたかと思うと、背の高い金髪の男――春怜王その人が廊下に飛び出してきたのだ。
「冬惺！」
「春怜兄上……」
およそ一月ぶりに会う長兄は、その華やかな美貌がわずかにやつれて見えた。
十歳違いの兄弟は、同じ琥珀色の瞳でしばし見つめあい――。
「よくぞ無事で帰ってきたな、我が弟よ！　さぞや苦労をしただろう。さあお兄さまの胸に飛び込んでくるがいい！」
「全身全霊かけて断ります！　鬱陶しい！」
飛び込んでくるがいいと言いながら腕を広げて突進してきた春怜を、冬惺はさっとよけた。
春怜は危うく冬惺の後ろにいた翔波に抱きつきそうになったが、翔波も反射的によける。すかっと腕で空を切った春怜は、たたらを踏むとつまらなそうに翔波を見た。

「鏡作の。君も無事で重畳」
「……はあ」
「君の里帰りの件と当主継承の件は、既に冬惺から報告を受けている。まずはおめでとうと言っておこう。――さて、気を取り直して。我が弟よ。遠慮せずに、ほら」
おいでおいでとにこやかに腕を広げる春伶に、冬惺はこの上なく冷めた目を向けた。
「一応言っておくと、ここは廊下の真ん中で、侍従以外にもそれなりに人目があるんですが」
「照れ屋だなあ、冬惺は。感動の兄弟再会に人目をはばかることなんてないのに」
「人目のあるところで馬鹿丸出しの姿をさらさないでくださいと言っているんです、兄上」
「冷たい……。冷たいぞ、冬惺。お兄ちゃんは寂しい。そういえばおまえは二年前も、再会の抱擁をしようと目を潤ませて駆け寄った兄を、問答無用で蹴り倒したな……」
二年前といえば、紅楓の兵に追われて地方を転々としていた冬惺たちが、ようやく敵の勢力圏を脱して白桜方と合流を果たしたときだ。今と状況は似ている。
「あれは怪我人に問答無用で抱きつこうとした兄上が全面的に悪いんです。……で、くだらない感動の再会ごっこをしている暇があったら、二人だけで話がしたいんですが」
冬惺が執務室に目をやると、春伶はしぶしぶ手を下ろして人払いを命じた。冬惺も翔波に外で待っているよう命じ、執務室に入る。
「付き合いが悪いぞ、冬惺。私はおまえが報せを寄越してきたときから、どんな感動の再会に

しようか何十通りも考えていたというのに」
「暇人ですね。だいたいそこで、どうしてとことん阿呆くさいのを選ぶんですか……」
ため息混じりに扉を閉めると、執務室に春怜と二人だけになる。
つかの間、静寂があって、ぽつりと春怜が言った。
「……あのときは、怪我をしていた」
部屋の奥へ歩きかけていた冬惺は、足を止めて体ごと向き直る。
「兄上？」
「また、どこか怪我をしているのか？」
春怜の表情はひどく真剣だった。冬惺は怪我をしても、綺理や翔波以外にはあまり明かさない。春怜は冬惺が抱擁を拒むかどうかで、それを確かめようとしていたのだろうか。
「……してませんよ。大丈夫です、本当に無傷ですから」
「それなら、よかった。——よかった、おまえが無事でいてくれて」
春怜が歩を進め、冬惺の両肩に手を置く。その手はかすかに震えていた。その手がそのまま背に回って、強く抱きしめられても、今度は冬惺は拒まなかった。
「北から最初に報せが来たとき、肝が冷えた。……最悪のことを、考えた」
人前ではおどけた態度で誤魔化していたのであろう本音が、肩口に落とされる。
「一人の弟が……っ、もう一人の弟を殺したかと思ったのだぞ……！」

叔父と上の弟が反逆を起こし、その地におびき寄せられた下の弟はなかなか消息が知れず。遠い北の地でなにが起こったのか、どんな悪い想像をしてもし足りなかっただろう。

「ずっと心配していた。おまえが生きているという報せを受け取ってからも、姿を見るまでは安心できなかった。……本当に、よく無事で逃げてこられた……！」

「――はい。心配かけて、すみませんでした」

震える兄の声に、俺が反逆方に加わったという想像はしなかったんですか、という質問は喉の奥で消えた。冬惺は大丈夫だと伝えるように、兄の肩のあたりを軽く叩く。

「帰ってこられたのは綺理と翔波のおかげです。綺理が、俺たちを里から逃がしてくれたんです。そのあとは隣の鏡作家領を目指して、鏡作の民の助けを借りて北部を脱出しました」

現在は玉造家領と鏡作家領をつなぐ切り通しはふさがれ、その名の通り天険の地である天剣山脈が鏡作家領を守る盾となっているが、二つの里はかなり近くにある。だがもし鏡作の里が紅楓方に内通しているとの疑惑を払拭できていなければ、行く当てはなかっただろう。

「そうか……。鏡作のは、あの鏡作の里を従えたのだったな。おまえの忠実な家臣を、もっとしっかりねぎらってやればよかった。あとで鏡作のに、おまえの兄として礼を言おう」

ゆっくりと抱擁を解いて離れた春怜は、もういつもの落ち着きを取り戻していた。

ただし末弟に対する気遣いからか、彼はためらいがちにもう一人の名前を口にする。

「……綺理が紅楓の朔秋と婚約したというのは、もうどこかで聞いているか？」

「はい。その件で、兄上に大事な話があるんです」
冬惺は少しも揺るがずにうなずいた。長身の兄王をまっすぐに見上げ、言う。
「俺は、今回の戦は兄上のためには戦えません」
「……それ、は……つまり、総大将を降りたいということか？　確かに今回は相手が相手だが、せめて名目だけでもおまえが総大将に立たねば、兵の士気も……」
少なからず衝撃を受けたような春怜に、冬惺は首を横に振る。
「いいえ。俺は総大将として必ずこの内乱を鎮圧します。ただしすべては綺理のために。――俺は、綺理を取り戻すために戦います」
その言葉の意味を正しく理解して、春怜が顔を強張らせた。
「冬惺。言いたくないが、彼女はもう」
「反逆者の娘で敵王家の婚約者、ですか？　それでもです。俺は絶対に綺理をこの手に取り戻すし、綺理以外との縁談は決して受けません」
「――綺理のあの件が、紅楓方にばれたらどうする」
「綺理はそんなどじは踏みませんし、たとえばれてもあの力をむざむざ権威争いに利用させたりはしない。ですから綺理には手出し無用です」
「……綺理を取り戻すといっても、それには紅楓の軍だけでなく影珀叔父の――玉造家の軍も破らねばならんのだぞ？」

「わかっています」
冬惺は瞳を一切揺らさずに答え、宣言する。
「目的が綺理なら、俺は手段を選びません」
春怜はしばし黙り、やがてあきらめたようにため息をついた。
「……おまえがそこまで綺理に溺れているとは知らなかった」
「俺も最近知りました」
真顔で応じた冬惺に、春怜はますますため息をつく。
「……わかった。すべてはおまえが内乱を鎮圧すると仮定しての皮算用だが、おまえの望む通りのことを報奨として約束しよう。――だが、綺理の心までは私には約束できんぞ」
今の冬惺にはそれで十分だった。冬惺は会心の笑みを浮かべ、言った。
「もちろん求婚の返事は自力でもらいますよ。ありがとうございます、春怜兄上」

「……で、なんなんだよ真羅。なにか緊急事態？」
茂みの陰に来たところで翔波が問うと、足元で翡翠の目の子狐が首を傾げた。
「ある意味緊急、かな。なんとなく従者を呼んだほうがよい気がしたのでね」

——子狐真羅がふらりと現れたのは、翔波が庭園に面した回廊で待機しているときだった。
無言で袴の裾をくいくいと引かれたが、侍従や衛兵の耳目がある場で話しかけるわけにはいかない。わけがわからぬまま、子狐真羅に引っ張られて庭園の奥へ入っていったのである。
怪訝な顔の翔波に、真羅が前足でひょいと一方を示す。
「さて従者。左に五歩ずれて、そこから左斜め後ろを見上げてみたまえ」
「……？」
言われた通りに移動し、左斜め後ろを振り返る。
そして翔波は、茂みと茂みの間からのぞいた光景に、しばし固まった。
「……。あのさ、真羅。君、ひょうたん水筒どうした？」
「一旦、従者の部屋に置いてきた。あとで補充用の酒を用意してくれると助かるのだがね」
「わかった。好みの銘柄はあるかい？　お礼代わりにどんな注文でも聞くよ」
「では『斎乃寒桜』をよろしく頼む。今まで飲んだ酒ではあれが一番美味だった……」
「了解。君もさりげなく最高級の名酒を選ぶね……」
うっとりした目つきの子狐を置いて、翔波はまずは目にしたもののほうへと走っていった。
茂みの間から見えていたのは、ひらひらした白っぽい装束だった。
より正確に言えば、木に登ってへっぴり腰で横枝にへばりついた千紗王女である。

「――お久しぶりです、千紗さま。お一人で木に登られて、どうかなさったんですか？」
翔波が枝の下に駆けつけると、千紗の愛らしい顔に安堵の色が浮かんだ。
「翔波！　あ、あの、私ね、手巾が風で飛んで木に引っかかってしまったの。それで取ろうとして木に登って、手巾はちゃんと取れたんだけど……っ」
「……下りられなくなったんですか？」
千紗が頬を赤くして、無言でこくこくとうなずく。
（……子猫みたいだ）
いや、子うさぎだろうか。泣きはらして赤くなった目に、二つに結った金髪、白を基調とした装束、それに枝の上でふるふるしている様子が相まって、なんだか子うさぎのようだ。
「わ、笑わないでよ！」
「失礼しました。千紗さまがお可愛らしかったもので。――ちゃんと私が受け止めますから、心配なさらないで飛び下りてください」
翔波は腕を広げたが、千紗は赤い顔でこちらを見下ろしたままためらっていた。子供の身にはけっこうな高さだし怖がるのも無理はないか、と翔波はあきらめて腕を下ろす。
「わかりました。では私がそちらに行きますから、そこを動かないでくださいね」
昔よく登った木に比べれば、簡単なものだ。翔波は造作もなく登っていく。
それに庭木とはいえしっかりとした木である。八歳と十六歳の二人の体重くらい十分支えら

れる。だが翔波が同じ枝に移ったときには多少は揺れ、千紗が怯えたように枝にしがみついた。
「やっ、そ、それ以上来ちゃ駄目！　怖い！」
「大丈夫ですよ。このくらいで折れたりしませんから。――御身に触れるご無礼、お許しを」
翔波は後ろから千紗の体に腕を回し、抱き上げようとした。が、千紗の体はがちがちに硬直し、枝にしがみついたまま離れない。なまじ下を見ているから、余計に怖いのだろう。
「千紗さま。大丈夫ですから、私を信じて手を放してください。目をつぶって、全部私に任せていればいいですから。はい、落ち着いて深呼吸して――」
千紗が言うとおりにして、強張った小さな体から力が抜けた瞬間。
翔波は千紗を抱きかかえ、枝から飛び下りた。
「――！」
腕の中で千紗が身をすくませたときには、翔波はもう地面にやわらかく着地している。
「はい、もう安心ですよ。千紗さま」
すとんと千紗を下ろし立たせる。千紗はしばらく目を白黒させていたが、やがて翔波の視線に気づいてばつが悪そうな顔になった。――彼女のどちらの手にも、手巾などない。
「あ、あのね翔波。私本当は、捜しにきた侍女から隠れようと思って、木に……」
なんとなくそうではないかと思っていた。そして翔波には、千紗が侍女をまいてまでこの近くにやってきた理由に心当たりがあった。

「冬惺公閣下はあちらにいらっしゃいますが、まだ陛下とお話し中ですよ。当分はかかるかと」

翔波はもときた殿舎のほうを手で示した。冬惺と春伶は詳しい報告や今後の話し合いがあるので、長話になるはずだ。

だが千紗は、翔波の浅縹の文官服の袖にしがみつき、頭を振った。

「いいの。冬惺叔父さまが無事に帰っていらしたことは、みんな噂していたから知ってるもの。でもみんな翔波のことは言っていなかったから、だから急いで確かめたかったの」

（僕――？）

名指しされて、翔波は目を瞠った。千紗が叔父の冬惺に懐いているのは周知のことだが、まさかその従者にまで気を配ってくれていたとは。

袖をつかむ小さな手の感触に、つい頬がゆるむ。

「――心配してくださってありがとうございます。私も閣下も、怪我一つありませんよ」

笑顔で答えると、千紗はほっとした顔になった。それからすぐに、真面目な顔を作る。

「よかった。……それとね、翔波に聞きたいことがあるの」

「？　はい。ですが、よろしければ話しながら御髪を整えさせていただけますか」

翔波は千紗の髪を見かねて言った。

この活発な王女殿下は、侍女をまくのにどれほど無茶な道を通ってきたのか。淡い金髪には

何種類もの木の枝や葉が絡み、髪形もだいぶ崩れていた。

翔波は木の根元の腰掛け石に千紗を座らせ、「失礼します」とことわってからその後ろに回った。彼女の背後に跪き、髪飾りを一つ一つ外していく。

千紗はされるがままになりながら、口を開いた。

「あのね。お父さまはそんなことないよって笑っていらしたけど、ちょっと前まで冬惺叔父さまと翔波が死んじゃったって噂してる人がいたの」

「噂は間違いでしたね。というか千紗さまは、また噂を集めていらっしゃったんですか……」

髪結い紐を解きながら、翔波はつい呆れ声を漏らす。

すると、千紗が勢いよく振り返った。驚いた翔波に一気にまくしたてる。

「だって大人は私が聞いても答えてくれないし、私の前ではなにも言わないんだもの！　でも大変なことが起きてもうすぐ戦になるってことくらい、私にもわかるわ。だからみんな悪い報せを私に隠しているんじゃないかと思って……っ。ねえ、翔波は本当のことを知っているんでしょ。いったいなにが起きているの？　夏憬叔父さまがお父さまに背いたって本当？　どうして綺理さまは、一緒に帰ってこなかったの……？」

不安と鬱憤をぶちまけるような口調に、翔波は息をのんだ。――泣きはらしたような赤い目を見たときに、察するべきだった。幼い王女がここ最近どんな気持ちで過ごしていたのかを。

「千紗さま、それは……」

「綺理さまのことを、冬惺叔父さまを騙して北部に連れて行ったとんでもない悪女だって言う人もいたわ。王さまの弟のお妃じゃ満足できなくて、新しい王さま候補に乗り換えたって」

「！　それは違います！」

瞬時に気色ばんだ翔波に、千紗はしかつめらしく顎を引く。

「もちろん綺理さまはそんな方じゃないわ。でもそんな滅茶苦茶な噂まであって、もう噂をこっそり聞くだけじゃなにが本当なのかわからないの。――だから、教えて。嘘つかないで」

誤魔化しを許さない大きな琥珀の瞳が、翔波を射る。

聡明な王女だ。考えてみれば彼女はもう、翔波を従者にしたときの冬惺と同い年なのだ。

「――わかりました。私は千紗さまに嘘は言いません。……ですから、前を向いてください」

翔波が誓うと、目をそらせば誤魔化されるとばかりにこちらを見ていた千紗が、ようやく前をむいた。翔波は細い金髪を引っ張らないように細心の注意を払って枝や葉を取りながら、北部でなにが起き、瑛国の情勢がどうなってしまったのかを語る。

一通り説明を終え、櫛で丁寧に髪を梳いていると、千紗が沈んだ声を出した。

「……じゃあ、綺理さまが紅楓のほうの王さまと婚約しちゃったのは本当なのね」

翔波は短く「はい」とだけ答える。紅楓の朔秋は翔波にとって元主人で、その嗜虐的な性格も、彼が綺理を大切に扱わないであろうこともよく知っているが、そこまでは話したくない。

（奏珠も今頃どうしているんだろう。紅楓方にうまく潜り込んで綺理の様子も探ってくれてい

たらいいけど……連絡がずっと途絶えているみたいだし、大丈夫かな……）

「綺理さまは、紅楓の王さまのお妃さまになっちゃうの？」

「いいえ、それはさせません。その前に冬惺公閣下が、必ずや紅楓王家を倒しますから。それに閣下は、自分が戦っている限りは綺理と紅楓家当主の結婚は行われないはずだと」

――乾ノ術を使えない綺理は王妃として不適格だし、紅楓方の者も旧敵の娘を王妃に迎えるのは抵抗があるはずだ。それにもかかわらず紅楓方がこの縁談を推し進めたのは、その見返りとして玉造家の助力を得て、紅楓王家に玉座を取り戻させるため。少なくとも紅楓方の勝利が確実になるまでは、朔秋が綺理との結婚に踏み切ることはない。

そのことを子供に理解しやすい言葉で説明すると、千紗が身じろいだ。

「え？　でも綺理さまは乾ノ術を――ううん、そうよね。使えないのよね」

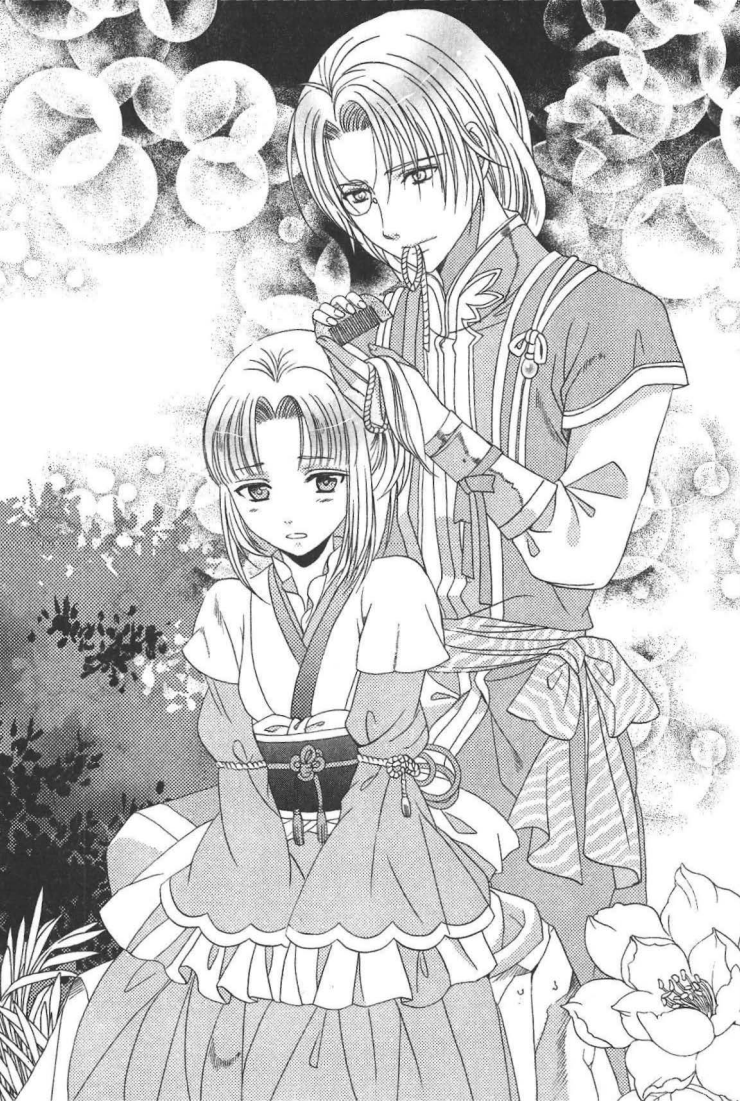
はっとしたように言いなおした千紗を怪訝に思いながら、翔波は彼女の髪を二つに分けた。結い紐を口にくわえて、髪を結い直しにかかる。

「……私、綺理さまはずっと冬惺叔父さまと一緒だと思っていたの」

千紗がぽつりと言った。

「だから遠慮なく邪魔してたのに、綺理さまがそばにいなかったら意地悪もできないんだわ。どうして冬惺叔父さまと綺理さまが、こんな風に離れ離れにならなきゃならないの……？」

「……」



翔波は、結い紐をくわえているせいで返事ができないことに、内心でほっとした。
現実に納得がいかないのは翔波も同じ。否、その気持ちは千紗よりもずっと強い。
――綺理が冬惺に告白すればきっとうまくいき、ようやく自分の気持ちもすっきりさせられる。そう思った矢先にこんな事態になったのだ。このまま綺理と冬惺が別れ別れになるなど、冗談ではない。こうなったら意地でも二人を幸せにしなければ気がすまない。
翔波は千紗の髪の半分を側頭部でまとめ、紅梅色の紐でくくって紐の余りを花結びにする。
「閣下は、綺理を取り戻すために戦いますよ」
それだけ答えてもう一本の結い紐をくわえようとしたとき、千紗が唐突に言った。
「ねえ翔波。冬惺叔父さまは翔波の髪に触ったり、頭をなでたりする？」
「――は？　しませんよ、もちろん」
さすがにそこまで子供扱いはされない。頓狂な声で答えれば、千紗は大人びた口調で続けた。
「やっぱり。ねえ翔波、知ってた？　冬惺叔父さまは、私の髪をなでてくれたこともないの」
「……」
「冬惺叔父さまが髪に触るのは、綺理さまだけなのよ」
きっぱりとした言葉はある真実を的確に言い当てていて、翔波はわずか八歳の少女の鋭さに舌を巻いた。
「……千紗さまは、智者ですね」

賛嘆を込めてつぶやき、改めて結い紐をくわえる。——と。

「そういえば私も、家族以外の男の人に触られたのは翔波が初めてだわ」

翔波は結い紐を吹き落としそうになった。

この文脈とこの状況でこの台詞は、光栄ですと言えばいいのか、私ですみませんと謝ればいいのか、深い意味はないと考えてそうなんですかと流せばいいのか。千紗の表情が見えないのでまるで見当がつかない。

結い紐のおかげで返事をしないですんで助かった、と翔波はひそかに冷や汗をかいた。

とはいえ、千紗のもう半分の髪を結うのになにか余計な緊張を強いられたのは確かだった。髪形を整えなおしたあと、立ち上がった千紗に鏡を差し出し、王女殿下がにっこりと笑うのを見て翔波はやっと胸をなで下ろす。

——けれどその安らぎもつかの間で、正面から向き合うなり千紗の笑顔が曇った。

「ねえ。……夏憬叔父さまは、お父さまに背いてしまったのよね」

「そういうことに、なります」

「……私、夏憬叔父さまは嫌い。いつもむすっとしてて怖いし、冬惺叔父さまに意地悪するんだもの。でもお父さまは夏憬叔父さまのことそんなに嫌いじゃないんだわ。私も夏憬叔父さまが死んじゃったら嫌。もちろん冬惺叔父さまが帰ってこないほうがずっと嫌だけど」

うつむいていた彼女が顔を上げ、翔波の青銅の瞳を不安げに見上げる。

「翔波。冬惺叔父さまは、夏憬叔父さまとも戦うの……？」

（――――）

翔波はゆるゆると拳を握り、嘘は言わないと誓ったことを少しだけ悔やんだ。

「……今の私に言えるのは、相手が敵であれば閣下は戦われるということだけです」

千紗と別れてもときた道を戻りはじめると、翔波の肩の上にふわりと子狐が降りてきた。

「――万宵は戦を起こしたいのだよ。だから君たちを引き離して、トウセイが戦わなければならない理由を作った。そして《調停者》が戦の中心になり、自ら戦火を広げて淵妖を地上に呼び込むようになれば、私が君たちから離れると考えているのだろう……」

「北部に置かれていた地方府は次々に落ちた。紅楓家領と玉造家領に挟まれた地域の小領主たちも、賊軍に加わるか、少なくとも滅ぼされるのを恐れてあちら側に恭順を示していると聞く。もともと北西部は、古くから玉造の影響力が強い地域でもあったしな……」

北部辺境から北西部にかけての地域が赤く塗りつぶされた瑛国の地図を見ながら、春怜は執務机の上で指を組んだ。

「こうなると、鏡作をこちら側にとどめられたのが大きな救いだな。もし鏡作の権威の象徴を奪われていたら、紅楓王家は玉と鏡――古の二大家を手中に収めた、瑛国の真の継承者を喧伝していただろう。そうなればほかの北部貴族への影響は計り知れなかったはずだ。――冬惺。私はつくづく、おまえの判断の正しさを身にしみているよ」

「まさか。いくら俺でも、こんな事態になるとは予想していませんでしたよ」

肩をすくめた冬惺に、春怜は机上の地図から顔を上げた。眉尻を下げるように苦笑する。

「……おまえには、もっとなじられるかと思ったのだがな」

「？」

「明花公女との見合いの件だ。私が影珀叔父への挑発を強行し、反対していたおまえにも協力を強いた。私のあの失策の結果がこれだと、ねちねち責められるのを覚悟していたのだがな」

ああ、と合点がいく。だがその件では兄王は既に方々から批判を受けているはずで、今さら諫言を重ねる必要はない。それに。

「叔父上が今の時期に行動に出たのは縁談騒ぎゆえでしょうけど、謀反の計画自体はずっと前から練っていたはずですよ。――でなければ、夏憬兄上が謀反に加わっているのはおかしい」

さらりと言った冬惺に、春怜が目を瞠った。

冬惺は腕を組んだまま推測を語る。

「たぶんこうです。影珀叔父上は、かねてより夏憬兄上を王に担ぎ出す計画を立てていた。し

かし反乱を起こして王都方と戦っている間に、紅楓方に後背を攻められたら元も子もない。だから紅楓方の者に不介入の約定を取り付けようとして、ひそかにつながりを持った」

『北部貴族の中に紅楓方に気脈を通じている者がいる』という噂。今にして思えば、あれは玉造家のことだったのだろう。もっとも紅楓方も一枚岩ではないだろうし、影珀が最初から紅楓王家そのものと接触していたわけではないだろうが。

春怜がすっと双眸を険しくし、続きを引き取った。

「だが紅楓方は、むしろ玉造家を自陣に引き入れようと考えたのだな。それで玉造家の離反を促すために、狩占祭で綺理の暗殺をはかった……。だがおまえが、暗殺未遂の黒幕が紅楓方であることを暴いた時点で、その思惑は一度崩れている」

「ええ。だから紅楓方は、綺理を朔秋の王妃に迎えるという切り札をやむなく使ったんです。……前に会ったとき、あれを殺しておかなかったのが悔やまれますよ」

冬惺は聞く者がぞっとするような声音でつぶやいてから、続けた。

影珀もぎりぎりまで迷っただろうが、最終的にはその条件に惹かれて紅楓方と手を組んだ。そしてその時点で、夏憬はもう後戻りできないところまで反乱計画に関与していたのだ。だからこそ彼は、影珀の方針転換にもかかわらず反逆側に残った。そうでなければ、紅楓方と白桜の夏憬が同じ陣営にいるという奇妙な構図は生まれない。

冬惺がそう結論付けると、春怜は重いため息をついた。

「では夏憬は、あの弟は前々から影珀叔父と組んで私の王位を狙っていたというわけか……」
「夏憬兄上は馬鹿ですから」
容赦なく断言した冬惺に、春怜が暗い笑みをこぼす。
「……そうだな。あれはおまえと違って、昔から馬鹿でできの悪い弟だった。そのくせ、きかんきが強くて手に入らないものがあれば癇癪を起こすし、いつも不満だらけ。長男に生まれてさえいれば自分が王だったのに、くらいは常々思っていたのだろうな」
突き放すような言葉を並べながらも、彼はどこか自分に言い聞かせているようだった。
「夏憬は昔よくおまえのことを殴っていたし、今も執拗におまえを蔑んでいる。私がいくら言っても聞かない。結局あれとはとことんそりが合わなかった。こうなったのも仕方ないと――」
「夏憬兄上は馬鹿ですから、謀反の首謀者という器ではありません」
なにかを振り切るように語っていた春怜を、冬惺が遮った。
「……冬惺？」
「人の手先になっていいように使われるのが関の山の小物ですから、影珀叔父上の甘言にうかうか騙されたんです。それに夏憬兄上には、身内殺しをするほどの度胸もない。王位簒奪といっても、春怜兄上や俺を捕まえて高笑いすれば勝ち、程度に考えていたんでしょう。いざ処刑命令を下せと周囲に言われたら、その途端怯えてうろたえてそんな大それたことをする気はな

かったと叫ぶくらいには考えなしの馬鹿です。悪党になる才覚すらない」

盛大なこき下ろしに込められた意味に、春怜が目を見開いた。彼は末弟をまじまじと見つめ、ぽかんと口を開ける。

「――おまえが夏憬を弁護するとは思わなかった」

冬惺は居心地悪そうに長兄から目をそらした。

「……別に、弁護していません。討つ価値がないと言っているだけです。それにさけられる戦ならさけるべきだし、敵を内部分裂させるのは有効な戦略です。――春怜兄上。手始めに、夏憬兄上をこちら側に取り込んでみませんか？」

冬惺は兄王との話し合いを終えると、翔波を伴って軍府へ向かった。

無事な姿を将兵に見せ、いずれ正式に冬惺に賊軍討伐の勅命が下ることを伝えると、護国大将軍麾下の四将軍は一様に安堵の色を見せた。

大将軍不在の場合、四将軍のうち家格や経験が上の者が総大将を務めることになる。

しかしその筆頭格の将軍は生粋の北部貴族で、己が長年玉造家派と目されていたことを引け目に感じて総大将を辞退。ほかの将軍たちも同様の理由で二の足を踏むか、若輩者だからと固辞した。結果、総大将の座の押し付け合いに発展し、王族の冬惺が上に立たねば収まりがつか

なくなっていたのだ。

その冬惺にしても、もし縁談騒動の際に兄王への忠誠を示していなかったら——兄王の意に背いて玉造家に味方していたら、今頃疑いの目を向けられていただろう。皮肉な話だ。

（だがなんにせよ、これで綺理を取り戻すために動きはじめられる——）

冬惺はようやく出発点に立てた思いで、四将軍以下、主な武官たちを集めて会議に臨んだ。

「冬惺、今夜はもう寝なよ。今日王都に着いたばかりなんだし、旅の疲れだってあるだろ。君が焦る気持ちもわかるけど、僕は綺理から君のことを頼まれているんだ。君に倒れられたら綺理にも申し訳が立たない。それとも、君が寝ないと僕も休めないって言い方をすれば聞く？」

会議と軍務をこなし、自室に戻ってからも各地の伝令の報告に目を通して軍の編制や作戦を考えていた冬惺は、翔波に立て板に水のごとく言われてようやく寝台に入った。

冷たい敷布に寝転がっても、目が冴えてなかなか寝付けない。気がはやっているのだろう。

（綺理の薬草茶があればな……）

彼女がたまに作っていた、気分を落ち着けるという薬草茶。味が苦手で、淹れてもらってもあまり飲まなかったが、今では無性に飲みたくて仕方がない。

目を閉じて、眼裏に綺理の姿を思い描く。

綺理は北の玉造の地にいて、自分は南の王都。遠い空の下で、彼女はどうしているだろう。

この身に翼があれば、遥か遠く隔てられた彼女のもとへも飛んでいけるのに――と思ったら、翼を持つ乾ノ神衆のことが頭をかすめた。今となっては、呼ばれさえすれば綺理のもとに降臨できる火雷明王の存在を、ありがたく思う。辛い目に遭って心細くしているであろう綺理を、自分がさらいに行くときまで火雷明王が支えてくれているといい。

（……綺理。必ず俺が、さらいに行くから）

目が覚めているときはいつも綺理のことを想っているのに、彼女の夢はなかなか見られない。

――そうしてまた、綺理のいない明日がやってくる。

五章　家族の絆

遠い玉造の里で、綺理はさめざめとしていた。
「ああ……。この癒しの空間とももうすぐお別れなのね……」
「どこからどう見ても、この薬房は『癒し』と対極の空間だと思いますけどね」
後ろで奏珠がぼそりと言った。
心の楽園、憩いの毒薬調合の場で、引き出しに毒の名が書かれた薬簞笥を名残惜しげになでていた綺理は、むぅと頬を膨らませて振り返る。
「失礼ね、奏珠。私に癒されたくせに」
「感謝はしていますよ。助けてくださって、ありがとうございました」
奏珠は梁を使って懸垂をしながら返した。彼はぐっと体を持ち上げると、くるりと一回転して梁の上に飛び乗る。綺理には十分身軽な動きに見えたが、本人はまだまだ本調子ではないらしく、何ヵ所か包帯の残っている手足を不服げに見る。
奏珠はなまった体を精力的に鍛えるようになるまで回復していた。
玉造邸の家人は、綺理が彼を閉じ込めて毒薬の実験台にしているとでも思っているのか、恐れて薬房に近づこうとしない。しかも自主的に箝口令を敷いて、必死で『なにも知らないふ

り』をしてくれるので、綺理が毎日彼の世話をしに行っても薬房の中でのことがばれることはなかった。

万宵も鷹の身で行けないところには出入りできないので、密室の中なら安心だ。

「感謝『は』って、引っかかる言い方するわね？」

「……困るんですよ。あなたには借りばかりできる」

梁から飛び下りた奏珠が、音もなく綺理の前に着地する。

「私はかつてあなたの命を狙った。それにもかかわらず鏡作の里を――身内の命を大勢救っていただき、ついには私自身の命まで救っていただいた。借りが大きすぎて、どう返せばいいかわからないんです。なにをもって償い、報いればよいのかが」

跪いたままこちらを仰ぐ彼に、綺理は頬をかいた。

義理堅い少年だ、と思う。考えてみれば彼は、『命の恩人命令』を振りかざす悠蓮に逆らえず、なんだかんだで女装させられていたのだ。

「それじゃ、言うわ。――私ね、近々居を移されることになったの。お父さまと夏憬殿下が本格的に南に進軍して玉造の里ががら空きになるから、婚約者として紅楓王家の庇護下に入れって。それで、もっと北の紅楓の離宮に行かされることになったのよ」

ありていにいえば人質だ。影珀に対し、紅楓王家の玉座を取り戻す約束を忘れるな、という。

「先ほどもそんなことをこぼしていましたね。この薬房もじきに取り壊されるとか」

「そうなの。だから最初はそれまでに奏珠に逃げてもらおうと思っていたんだけど……やっぱり、できるならそばにいてほしいわ」

「無論。もしここに鏡作公がいれば、きっとそうしろと命じたでしょう。むしろ綺理さまのそばを離れておめおめと逃げ帰れば、鏡作公に合わせる顔がありません」

「えーと……それでも翔波は、奏珠が生きて戻ってくれてよかったって言うと思うけど？」

一応言ってみたら、奏珠は思い切り顔をしかめた。

「そういうことを言いそうな馬鹿当主だから嫌なんです、あれは」

「……そ、そう」

「そうなんです。とにかくご命令は承りました。私はあなたの意に従いましょう。あなたと共にいれば、紅楓の牙城にも楽に潜入できそうですしね」

奏珠は真面目な顔に戻り、思慮深げに言う。

「では……そうですね。綺理さま、紅楓の離宮に移動するにあたって、ご自分の侍女を連れて行くことはできますか？」

「ええ。そば仕えの者も向こうで人数をそろえる話になっているみたいだけど、梨英と桂鈴だけは連れて行けることになったわ。おかげであの二人をようやく私付きに戻せて……あ。奏珠は知っているわよね。淡い褐色の髪でさばさばしたしゃべり方をするのが梨英で、年上で栗色の髪のおっとりしたほうが桂鈴」

奏珠はうなずいた。彼は明花の侍女に扮していたとき、王宮で彼女たちと顔を合わせている。

「そのお二人は信用できますか？　共犯にさせられるか、という意味で」

「――できるわ。少なくとも、秘密は絶対に守ってくれる」

梨英も桂鈴も、綺理の古くからの侍女だ。玉造の民として、主家の当主を裏切ることはできないが、それでも綺理の味方としてできる限りの便宜をはかってくれる。だからこそ彼女たちは、最近まで綺理の周囲から遠ざけられていたのだ。

綺理が請け合うと、奏珠は満足げにうなずいた。

「では離宮に移る際のどさくさに紛れて、そのうちのお一人と交替させてもらいましょう。そのお二人と面識のある者は、紅楓方にはいないでしょうし」

綺理はまたたいた。それは、つまり。

「奏珠が侍女に変装して私と一緒に来るってこと？　それができるならいいけど……奏珠は元は紅楓方でしょ。奏珠こそ、向こうに顔を知られているんじゃないの？」

奏珠のかつての命令主であった空雛は、玉造の里以北の白桜方の勢力を制圧するために北部の戦場を転々としていると聞いているので、当分は顔を合わせることはない。だが朔秋はおそらく離宮にいるし、彼ら以外にも奏珠の顔を知る者は多くいるはずだ。

しかし奏珠は綺理の不安を、鼻で笑った。

「間者の変装をなめないでください。琅の宮廷に潜り込んだときは亡命中で、よもや瑛国に戻

れるとは思っていなかったから、本名と素顔を使っていましたけどね。本来はもっと念入りに変装するものなんです。顔をがらりと変えるくらいできなければ、間者など務まりませんよ」

不敵に言い切ってから、彼は少し言葉を濁す。

「それに……不本意ながら私は、最近女装の技術を磨く機会があったもので。変装術は元から自負していましたが、女装に限定するなら、今ではどんな種類の女性にも完璧に化けられる自信があります」

（……師匠だ）

綺理は奏珠の表情から察した。

彼に女装術を強制的に伝授したのは、綺理の薬師の師匠、悠蓮に違いない。彼は悠蓮と共にいた一月余りの間、いったいどんなめくるめく日々を送っていたのだろうか。

ちょっと知りたい。

「――で、でも、たとえば梨英と奏珠が入れ替わって私についてきたとするでしょ。梨英にはこっそり実家に帰ってもらえばいいとして、この薬房から捕虜が消える件はどうするの？」

「ああ。それは綺理さまが私を埋めたことにしていただければ」

あまりにもさらりと言われたせいで、その言葉の意味が綺理の頭を素通りした。

「……はい？」

「これだけ毒が詰まった毒蔵ですから、事故とか自害とかうっかりとか用法間違いとか用量間

違いとか人間としての間違いとかがあっても不自然ではないでしょう。それに私は綺理さまに助けられるまで軽く半殺しの状態にされていましたから、手当ての甲斐なく、もあり得る」

「あの、それってまさか、私が奏珠を死なせて埋めたってことにするわけ……？」

「もちろん。ああ、といっても筋書きを公表する必要はないんですよ。綺理さまが毒蔵からひそかになにかを運び出して埋め、その頃から毒蔵の捕虜がいなくなった。これだけで聞いた者が勝手に想像を膨らませてくれますし、家人は主家の姫の秘密を暴くのを恐れて追及しない」

「……」

ではそういうことで、と反論を思いつく前に話をまとめられてしまった。

釈然としない面持ちの綺理を見上げ、奏珠はくすりと笑う。

「ところで綺理さま。味方として聞きますが、あなたはなにを企んでいるんです？」

「え？」

「玉造の里にもいられなくなるというのに、あなたが存外に元気だから。目的を定めてそれに向かって動いている人間でなければ、そうはいかない。それに信頼する侍女と交替させてでも私を連れて行きたいというのは、間者としての私になにかをさせたいからでは？」

――あなたはいったい、なにをするつもりです？

うやうやしく跪く奏珠に目で問われ、綺理は表情を引きしめた。

「まずは、家族を守るわ」

「玻璃お姉さまも明日、夏憬殿下と一緒に南へ行くんですって？　私、自分の出立の暇乞いをするつもりだったのに、お姉さまを見送るほうが先になるとは思わなかった」

「私たちにとっては、南部にある夏憬の所領がそもそもの拠点だもの。そちらに戻ってお父さまの軍の支援をするってだけよ。……なに？　あなた、そんな話をするために来たの？」

玻璃が肘掛けに頬杖をつき、気だるげに綺理を見返す。

ここは玻璃の部屋だ。玉造家本邸は広く、玻璃の使っている棟と綺理の部屋とはかなり離れている。そのため姉の顔を見るのは実に婚約式以来だった。

肩までの長さに切った髪を、玻璃が落ち着かなげに耳にかける。綺理はその手つきを見るとはなしに見ながら、自分の長い髪を示す。

「それだけじゃなくて、お礼を言おうと思って。婚約式のときに私が髪を切らずにすんだのは、お姉さまが理由をつけて取りはからってくれたからだって聞いて――」

「お礼？」

玻璃は嘲るように声の調子を高くした。給仕を終えた侍女たちを下がらせながら言う。

「おめでたい妹だこと。自分を嫌っている相手にお礼だなんて」

「でも私は髪を切る覚悟をしていなかったから、お姉さまが口添えしてくれたおかげで助かったもの。口添えしてくれたのがお姉さまだって聞いて嬉しかったのも本当だし」

「……あなたのお人よしぶりには呆れ果てるわ。嫌いと言われたそばから」

苦々しい声を出しながらも、玻璃は表情を誤魔化すように茶の杯に口をつけた。

(その嫌いな妹に、わざわざ助け船を出してくれたくせに……)

綺理もまた茶に手を伸ばすと、杯の陰からさりげなく室内を見回す。——侍女は下がり、扉は閉まった。この部屋には自分と姉の二人だけだ。

それを確かめて、話の流れを引き継ぎながら核心に踏みこむ。

「ええとね。私、どうしてお姉さまに嫌われているのかなって考えたんだけど、——私が朔秋の妃になることになったせいで、お姉さまが真の意味での瑛国王妃になれなくなったから？」

この話をするためにわざわざ来たのだ。姉の神経を逆なでするのも承知の上。

案の定、玻璃の手がぴくりと震えた。硬質な音を立てて杯を卓に置き、椅子の背にゆっくりともたれて凶悪な笑顔を作る。

だが彼女の紅唇が紡いだ答えは、綺理の予想からは外れていた。

「もっと、ずっと前からよ。あなたが冬惺と仲良くして、心から楽しそうにしていたから」

「え？……え、と？」

確かに姉は昔、綺理が『白桜の面汚し』の冬惺と遊ぶのをよく思っていなかった。同じ屋敷

に住まわなくなってからも、時折会うたびに、綺理と冬惺がじゃれあっているのを見て眉をひそめていた。しかしそれだけで根に持たれるほど嫌われるというのは、釈然としない。

姉の笑みが深まる。

「前に言ったわよね？　お父さまがあなたを冬惺に嫁がせようとしたのは、私と春怜さまの縁談が流れて順番が一つずれたからだって。あなたの幸せは、王妃になりそこねた私の屈辱の上にあったのよ。だから私は、あなたたちが無邪気に仲良くしているのが憎らしかったの」

「……でも、玻璃お姉さまだって夏憬殿下のことが好きだったんじゃ……」

思わずつぶやくと、玻璃の碧玉の瞳に激しい感情の光が奔った。

「歳の近い従兄だからって、小さい頃なんとなく一緒に遊んでいただけよ。そりゃ、春怜さまよりは親しかったけどね。――でもね、いい？　私は本当は、白桜家の長男に嫁いで王妃になるはずだったの。それができなくて、仕方なく夏憬で甘んじることにしたってだけ」

「……だから、今度は夏憬殿下を王にしようとしたの？」

「そうよ。ずっと私の夏憬が瑛国王になるって話だったの。それなのにここにきて、紅楓とも手を組んだから夏憬は南部だけで我慢しろ――なんて、ひどい格下げ。笑わせるわ。それも憎いあなたに邪魔される形でよ？　あなたさえいなければ、こんなことにならなかったのに」

毒を含んだ口調で玻璃が言う。だが綺理は話があるべきところに戻ったのを見逃さずに、すると言葉を挟んだ。

「向こうも、同じことを思っているんじゃないかしら」
「向こう？」
「紅楓方。ねえお姉さま。紅楓王家だって、もともとは瑛国全土の王になるつもりだったんでしょ。なのに北部だけで我慢なんてことになったら、内心ひどい格下げだと思っているんじゃない……？　それも、旧敵に邪魔される形なわけだし……」
綺理はゆっくりと言って、最後はわざとぼかした。
言葉にしなかった部分を想像して、玻璃の表情が強張っていく。
夏憬さえいなければ。
紅楓方がそう考えていてもおかしくない。否、そう考えているほうが自然だ。
「……お父さまの力は大きいわ。夏憬に手出しして玉造家との同盟関係がこじれれば、紅楓王家の復位そのものが難しくなるってことくらい、あちらもわかっているはずよ」
「そうね。王都方と戦っている間は、夏憬殿下にも戦場に出てほしいだろうし……」
綺理の言わんとすることを察したのか、玻璃が瞳を揺らした。
——戦いが終わったあとは？　あるいは、戦場に出ている間に暗殺される可能性は？
「冬惺や春怜お従兄さまならなんだかんだといっても兄弟だし、私たちにとっても従兄だけど……紅楓王家はそうじゃないもの」
考える時間を与えるように、綺理は茶を二口、三口飲んで間を作る。

「……綺理。あなた、それを私に言いにきたの？」
「家族として、忠告しておいたほうがいいと思って。……私が言うまでもないだろうけど、紅楓方をそう簡単に信用しちゃいけないと思うの」
「もちろん信用なんかしてないわ。あなたに言われなくてもね」
玻璃はほとんど反射的に答えた。だが言葉にすることで、それは彼女自身の考えとなる。綺理の誘導によって考えさせられたことも、すべて自分の考えだったように思えてきたはずだ。
綺理の口から直接言えるのはここまで。あとは玻璃が夏憬に不安と忠告を伝え、その先の決断に踏み切ってくれることを祈るばかりだ。そうすれば姉夫婦を紅楓方から守れるし、冬惺の力にもなれる。
（それにしても、奏珠もよく考えるわね……）
馬鹿正直に忠告するより効果的だと、紅楓方への不信を煽る話運びを綺理に伝授したのは奏珠である。綺理は、彼がかつて明花公女の信頼を短期間で勝ち得た理由がわかった気がした。けれど部屋を退出するとき、綺理は気づけば予定になかったことを口にしていた。
「――もし、南部で会うことがあったら、『待ってる』って伝えてくれませんか？」
伝言の相手は言わなかった。返事もなかった。
通じたかどうかは確かめずに、綺理は扉のそばで一礼した。
「お姉さまが私のことを嫌いと言っても、私はお姉さまのことを嫌いにはなりません。――で

は。またいつか会うときまで、ご健勝に」

妹が出て行ったあとも、玻璃は侍女たちを呼び戻さずにしばらく一人でいた。

紅楓方と同じ陣営にいることの不安定さと危険。それについては今夜、夏憬と話し合わねばならない。だが考えをめぐらす一方で、綺理の言葉が耳にこびりついたように離れない。

『……でも、玻璃お姉さまだって夏憬殿下のことが好きだったんじゃ……』

(違うわ。絶対に違う。玉造の玻璃は、嫁ぐ相手が一つ格下になってがっかりしたのよ)

確かに夏憬とは二つ違いで、小さい頃一緒にいたから気心も知れている。彼はほかの兄弟と違って単純で考えが浅いし特に秀でた能力もない十人並みの男だが、その代わり昔から玻璃の意見には一目置いていて、年下の女だからと侮ることはない。女好きの春伶と違って女遊びをしたこともないし、結婚して何年もたつのに子供のできない自分に文句を言うこともない。一人の夫として考えるなら、はずれ籤を引かされたとは思わない。それは認めよう。

――だが夏憬は、あくまで『二番目』なのだ。

次男であり、夫候補の補欠。一番ではない。最高ではない。それで満足などできない、してはいけない。古よりの大家、玉造家の長女としての矜持が、二番手に甘んじるなど許さない。

(私はお父さまにそう教えられてきた。玉造家の誇りを保てと)

玉造家の誇りに突き動かされているのは、父も同じだ。父が娘を王妃にすることにこだわるのは、単なる権力欲ではなく、玉造家最後の当主としての切羽詰まった思いがあるからだ。

父には娘が二人だけ。当主権を継げる跡継ぎがいないので、いずれ玉造という家は失われる運命にある。だからせめて北部の大家、玉造家の貴い血を、望みうる最高の家系の中に残したいのだ。つまり、王家の直系の血筋の中に。

（玉造家という枠組みがある限り、私たちは……）

玻璃は肘掛けの上に投げ出した手を握り、目をきつく閉じ、ついにその感情を認めた。

――玉造家の誇りに縛られずに、無邪気に冬惺と仲良くしていた妹が、自分はうらやましかったのだ。

姉の部屋を退出したあと、綺理はその足で父のもとへ向かった。

影珀も夏憬たちと共に、明日南へと出陣してしまう。当日の見送りは形式ばったものになるだろうから、出陣前の父ときちんと話ができるのは今だけだ。

――そう思って訪ねたのだが、いざ父と卓を挟んで向かい合うと、綺理はなにを話せばいいのか途方に暮れることになった。

「なんの用だ、綺理。私は出立の最終準備で忙しい。紅楓の離宮に行くのは嫌だと駄々でもこねに来たのなら、早く出て行け」

影珀が頬杖をつき、不機嫌そうに指で卓を叩く。苛烈で威圧的な光が宿った碧玉の瞳は、玻璃のまなざしよりもさらによそよそしく、綺理は今さらながらに父を遠く感じた。

この父に、いったいなにが言えるだろう。

先ほど玻璃に対して行ったような説得も、謀反と同盟の首謀者である影珀には意味がない。紅楓方と手を切ることも、謀反を中止することも、今さらできはしないのだ。動きだした車輪は止まらない。——たとえその先が奈落や、血で舗装された道であろうとも。

そもそも影珀は、綺理の説得で考えを変えてくれるような人ではない。

「それとも、あらかじめ私に誰かの助命嘆願をしておこうという腹か？　おまえにそんな口出しをする権利を与えた覚えはない。くだらんことで私の時間を奪うな」

じろりと睨まれて、綺理は唇を噛んだ。駄目でもともとの説得はあきらめ、父に会いにきた本来の用件に徹しようと気持ちを切り替える。

「——お父さまが出陣なさる前に、ご挨拶をと思って来ました」

それは世の普通の親子であれば、別段おかしくはないことだ。それなのに影珀がひどく意外そうな顔をするのを見て、綺理は改めて自分と父との関係を思う。

思い出をたどっても、いわゆる家族らしい交流を父とした記憶はない。

父のいる思い出といったら、激怒した父に怒鳴られているところを冬惺にかばってもらったとか、字が書けるようになったばかりの頃、あの父にも誉めてもらえるだろうかとどきどきしながら書いた手紙を、父が一瞥しただけで「反古紙にしておけ」と書き損じの書類といっしょくたに家人に投げ渡したとか、そんなことばかりだ。

けれど父にとって娘が政略の道具でしかなくとも、綺理にとって父は父なのだ。謀反が成功すればいいとは思わないから武運は祈れないが、とにかく無事に生きていてほしい。

「南へ征かれても、どうかご無事で。……あの、守り袋を作ったので、どうぞお持ちください。中に傷薬を入れてありますので、持っていて無駄ということはないと思います」

一針一針祈りを込めて縫った守り袋を差し出す。綺理にできるのはせいぜいこのくらいのことだ。しかしその結果は。

「いらん。そのような物、誰が作れと言った。用件はそれだけか？」

影珀は犬を追い払うような手振りで即答した。

昔から変わらぬそっけなさに、綺理は娘としてのせめてもの思いまでいらないと言われた気がした。悲しくなりながらも、こみ上げてきたものをぐっとのみこむ。

「……いらなければ、ご自分の手で捨ててください」

努めて淡々と言って、手に取ってさえもらえなかった守り袋を卓の上に置く。突き返される前に早口で退出の口上を述べ、席を立つ。

そうして早々に出て行こうとしたのだが、その間際、思いがけず背中に声がかけられた。
「綺理。おまえが北の紅楓の離宮に発つのは、我々の出立の二日後だったな」
「……はい」
綺理は後ろ手に扉を閉めようとした手を止め、硬く応じた。
――だが次の瞬間、父の声音がわずかにやわらかくなったように聞こえたのは、気のせいだっただろうか。
「北へ行っても、息災であれ」
(――――)
盟約の要のおまえが無事でなければ計画が崩れるとか、離宮に行ったら紅楓の朔秋の心をつかむ努力をしろとか、そんな台詞が続けられるのかと思った。
だが続く言葉はなかった。最後の言葉は、ただそれだけの意味だった。
そっと振り返ると、一瞬父と目が合った。
強い意志の光を秘めた碧玉の瞳は、すぐにそらされる。守り袋も卓にむなしく放置されたままだ。それでも綺理は、最後の一言だけでよかったことにして、父との短い対面を終えた。

昔の夢を見ていた。

冬惺と翔波と、三人で玉造の里で暮らしていた頃。

冬のある日、雪の積もった庭に出て三人で雪遊びをした。途中で冬惺がふざけて綺理に雪玉をぶつけたので、綺理が翔波を味方に引っ張り込んで応戦し、あっという間に雪合戦になった。三人とも雪まみれになり、最後には雪の上に大の字になって声を立てて笑った。

それから景色は白から黒に変わり、もっと昔の夢になった。

今度はまだ翔波がいない頃。白桜の離宮にいた頃で、母が病死した日の夜だ。

あれも寒い雪の日だった。綺理が暗い自分の部屋の隅で、冷たい床に座り込んで泣いていたら、冬惺が掛布を持ってやってきた。一枚の掛布に二人でくるまって、泣いている綺理の頭を冬惺が一晩中なでていてくれた――。

カツン、トン、コトン、と不規則な音がする。

その断続的な音に起こされた綺理は、周りの光景とゆったり揺れている床に、つかの間状況を思い出せずに戸惑った。

（……。そうだった。屋形船で、紅楓の離宮に向かっているところだったのよね）

里を発ったときは屋形車だったが、途中から船に乗り換えて川を行くことになったのだ。

綺理は夢の名残で時差ぼけした気分になりながら、ここ数日間のことを反芻した。

南へ向かう父や姉夫婦を見送った日の翌夜――。

綺理は人一人入りそうな大きさの箱に、処分するには心残りがありすぎる大量の毒薬をきっちり密閉して詰め、数人の家人を呼んでひそかに薬房の裏に埋めてもらった。

よろしくない物が入っていると臭わせ、絶対に中を見るなと念押ししたら、家人たちは青い顔でがくがくとうなずき、黙々と箱を埋めてくれた。綺理は、いつか里に帰り薬房を再建できる日が来たらぜひ掘り返そうと、決意を固めた。

そして出立の日、奏珠と梨英の入れ替わりは首尾よくすんだ。

間者の矜持にかけて完璧に変装した奏珠は、梨英の双子が現れたかと思うほどで、親しい者でなければ見破れるとは思えない。代わりに身を隠す梨英と、同行する桂鈴には、あらかたの事情を話して協力してもらっている。

だがそうやって連れてきた奏珠と桂鈴は、今は別の船に乗っている。

この屋形船の中の、貴人用に仕切られた贅沢な内装の一角には、綺理一人だ。話し相手がいなくて退屈しているうちに、眠り込んでしまったのである。

カツン、とまた音がした。

綺理の目を覚まさせたその音は、物見窓のほうからする。

まるで外から誰かが叩いているようだが、物見窓の向こうはすぐ川だ。綺理は怪訝に思いな

がら物見窓を開け、空からひらひらと降るものに白い息をついた。
「あ、雪……。そっか、北部じゃそろそろそんな季節だもんね。だから寒くてあのときの夢を――って、うきょあっ！」
白い空に黒い影を見つけてとっさに身を引くと、物見窓から鷹が飛び込んできた。
「あのときの夢？」
「……万宵。ひょっとして、やたら音を立てて私を起こしたの、あなた？」
「君がなかなか開けてくれないからだよ。で、苦い顔をしているが、今度はどんな嫌なことがあったのだね？　それとも素敵な悪夢でも見たのかね？」
防寒用に敷き詰められた毛皮の上で、万宵が体を震わせて雪を落とす。
万宵は相変わらず綺理の近くをうろついては、たびたび様子を見にきていた。綺理には彼がなにを考えているかよくわからないが、とにかく興味を持たれているのは確からしい。今も彼は、毛づくろいをしながら揶揄するような目つきで綺理をうかがっている。
「せっかくいい夢を見ていたのに、あなたのせいで目が覚めちゃったのよ。って、それより濡れるからここで雪を落とさないでくれる!?……もう」
綺理は小さくくしゃみをして物見窓を閉めた。と、万宵がわざとらしく目を瞠る。
「おや、いいのかね？　敵の私を中に入れっぱなしで」
指摘されて初めて気づいた。どうも自分は万宵がいることに慣れすぎてしまった気がする。

「まあいいわ。簡単に追い出されてくれそうにないし、話し相手がいなくて暇だったから」
「話し相手……。ところでキリ、君はなにをしているのだね？」
綺理はふかふかした布を丸めて円座のようにし、隅に置いてびしっと指さした。
「巣」
「……」
言わんとすることは伝わったらしく、鷹の万宵は素直にてくてく移動した。布の塊の真ん中にぽすんと座り込み、居心地がいいように嘴でせっせと場所を整える。
猛禽のくせに、その仕草はまるで可愛らしい鳥のようだ——という感想を抱いてしまってから、綺理はそんな自分にがつんと頭を殴られたような衝撃を受けた。
（可愛いってなによ！……ああもう、調子狂う。ひょっとして私、動物に弱い？）
居場所作りに励む万宵を眺めていると、彼の目がこちらを向いた。
「君は妙な人間だな。この私と閉所に二人きりだというのに、くつろいでやしないかね？」
「とりあえず今のあなたはただの鳥だもん。一緒にいたからって直接私になにかするわけじゃないし、そういう意味じゃ朔秋より無害よ」
綺理は肩をすくめ、銀環のはめられた左手首を持ち上げた。朔秋が綺理を引き寄せるのに、しょっちゅうこの銀環を力任せに引っ張るので、左手首についた痣が消えない。まあその分、綺理も口でやり返しているので、やられっぱなしというわけではないが。

「あと、私、今やっぱり機嫌がいいからかなあ」
「機嫌が、いい？」
「えへへ。だって途中で起こされちゃったけど、久々に冬惺たちの夢を見られたんだもん。見たい夢を見られることってめったにないし、夢でも冬惺に逢えて元気が出たっていうか」
楽しいばかりの夢ではなかったが、冬惺の夢には違いない。彼からもらった組み紐のお守りを握って眠っていたのがよかったのだろうか。これからは毎晩枕の下に入れて寝てみよう。
綺理が思い出して頬をゆるませていると、万宵が不服げに嘴を鳴らした。
「……雛鳥を呼んでからまた元気になったな。私が泣かせるはずだったのに、あの雛鳥……」
「？　なにか言った？」
「いいや、なにも。――それならそれで、楽しみがまだ残っていると思えばいいか」
くっくっと笑う万宵に、綺理は眉をひそめた。だが背筋に寒気が走ってぶるりと震えたのは、万宵を恐れてではなく、単純に初冬の北部の寒さのせいだ。
（火鉢はあるけど、さっき窓を開けちゃったせいで寒い……）
綺理は腕をさすり、布の巣でぬくぬくしている万宵をちらと見た。
「――だったら、ふかふかできたのにな」
子狐真羅のやわらかい毛並みを思い浮かべて、ぽつりとつぶやく。と、万宵が反応した。
「なんだね？」

「んー、別に。ここにいるのが真羅だったらよかったのに、ってだけ」
万宵は敵で、真羅は味方。だからその発言は、なんらおかしなものではないはずだ。
なのにその瞬間、万宵の瞳の奥で、翡翠色の光がかっと燃え立った。
（……？）
垣間見えた感情は、苛立ち、だろうか。まさか嫉妬ではあるまい。
よくわからないまま、続けて思いついたことを口にする。
「あ、そっか。似ているんだ。しゃべり方もそうだけど、ふらっと様子を見にきて自分の好きなように居座るところとか、おとなしくしてるときの雰囲気とか」
「な、にが……」
「真羅に似ているから、つい万宵にもそんな風に接しちゃうのかなって。……あ、でも、似ているっていう言い方は変よね。あなたたちはもともと一つの存在だったんだもの」
人形のときは真羅は子供の姿になり、万宵は大人の姿になる。それが象徴するように、真羅は万宵をずっと昔に——悪心を持つようになる前に戻した存在である。もともとは同じ人格なのだから、二人の行動が似通うのは当たり前だ。
（あれ？　じゃあ逆に言えば、万宵はものすごくぐれて育った場合の真羅ってこと……？）
彼はあくまで、もう一人の真羅なのだ。改めてその事実を思うと、余計万宵に対して調子が狂うような気がしてきた。……もちろん万宵が北瑛島を淵海に沈めようとしている張本人であ

ることは忘れていないし、今回の内乱も万宵が裏で糸を引いていると、彼自身の口から示唆されたことはあったのだが。

自分の考えに没頭していた綺理は、それゆえに、万宵の瞳の中で翡翠色の光が凍りついていたことに気づかなかった。

最初に認識したのは、万宵がばさりと翼を鳴らす音。

「万宵？　え、ちょっと、せっかく巣作りしたんじゃないの？」

綺理が顔を上げれば、万宵は鉤爪で布の塊を引き裂いて滅茶苦茶にしていた。

「……違う。私はこんなものは求めていないのだよ」

「なに？　もっと上等な巣じゃなきゃ嫌だとか――きゃっ！」

万宵が飛び立った。

彼は物見窓に体当たりするようにして屋形船を飛び出し、雪空に羽ばたいていく。

「なに、あれ……」

綺理はひらりと落ちてきた羽と、ぼろきれになった巣とを交互に見やり、物見窓から吹き込む雪にまた一つくしゃみをした。

運命の分かたれたあの秋の夜から日々は経ち、冬の呼び声が近い。

紅楓の離宮に着いた綺理のもとに、やがて遠い南部から報せが入った。
——護国大将軍、白桜の冬惺が、討伐軍を率いて西山道を北上。
向かう先は、彼の次兄夏憬のいる砦だという。

（——どうする）
その夜、夏憬はこめかみに冷や汗をにじませながら、砦の廊下を歩いていた。
報告では決して進軍速度は速くないとのことだが、とにかく冬惺の軍がこちらに向かっている。冬惺率いる討伐軍が、逆賊を、つまりこの自分を討つためにやってくるのだ。
（この砦は後方支援だけのはずだったんだぞ！　冬惺のやつめ、なぜ真っ先に私のところにくる。いや、私だからか？　ま、まさかあいつ、私を討って積年の恨みを晴らそうと……）
一応こちらの砦の後背には、援軍として紅楓方の鵜飼家の軍が控えている。兵力を合算すれば、討伐軍の先鋒隊を十分上回る戦力になる——と部下も言っている。
だが相手はあの常勝将軍の冬惺だ。そう簡単に勝てるとは思えない。
それに、と夏憬の心にまとわりついて離れない不安が頭をもたげる。
——もしもあの冬惺に勝てたとして、果たして勝ってしまってよいのだろうか？

（紅楓方はどこまで……いつまで信用できるんだ？）

目下、こちらの陣営内での夏憬の立場は、影珀の娘婿であるという点――玻璃の夫であるという点によって保障されている。それなのに当の玻璃が、「紅楓方が覇権を得たら夏憬は邪魔者として消されるかもしれない」と口にしたのだ。もはやなんの保障もないのと同然だ。

（この乱がこちらの勝ちで終われば、今度は私が危ない。いや、冬惺を倒した瞬間に鵜飼家の軍が私に襲いかかってくるかもしれない。それに……それに）

――まかり間違って冬惺を討ってしまったら、もう後戻りできない。

脳裏をよぎった考えに、夏憬は呆然とした。

自分はまだ後戻りできるつもりでいたのか？　決起のために玉造の里に行き、里に着いてから紅楓との同盟を知らされた。もう後戻りできないと思ったからこそ、自分はいまだに反乱方に与しているのではなかったか？――それとも、後戻りできないというのは人として？　兄弟として？

（――と、とにかく玻璃だ。玻璃と話をしよう。あいつなら冬惺のことも知っているし……）

夏憬は汗ばんだ手を握ったり開いたりしながら、廊下の奥の自室へ向かった。

周囲が暗い気がするのは、自分の心のせいだろうか。人けのない廊下が寒々しい。

扉を開ければ部屋の中も暗く、普段は一人くらい控えているはずの家人もいない。夏憬は舌打ちすると、人を呼んで部屋を暖めさせる前に上衣を羽織ろうと、奥へ入っていった。

「くそ、どうしてこんなに暗い――」
手探りでどうにか上衣を見つけたとき、背後で扉の閂をかける音がした。
「！」
ぎくりと振り返れば、いつの間にか扉のそばに人影がある。
「――お静かに願います、兄上」
誰かが横で灯明台に火を灯し、ほの明かりの中に人影が浮かび上がった。
墨染めの装束に身を包んだ少年だ。闇のような黒髪に、冷たく端整な面差し。――否。姿を見ずとも、夏憬を兄上と呼ぶのはこの世で一人しかいない。
「冬、惺……」
夏憬は舌を凍りつかせ、よろめくように後ずさった。
「お、おまえ、なぜここに。ど、どうやって……」
「私の従者の臣下に隠密活動の玄人集団がいるので、力を借りました。私も一応兵権を預かる身ですから、白桜王家の砦の内部構造は知っていますし。あとは……反則技も少々」
冬惺は肩をすくめて続ける。
「この部屋の近くにいた人間は、薬で眠らせています。一人も殺していないのでご心配なく」
「だ、だがっ、おまえ――まさか」
この弟がひそかに自分の前に現れた理由を考えたら、最悪の想像が頭をかすめた。冬惺と、

冬惺の腰の太刀とを交互に見ていると、相手が苦笑して両手を上げる。
「安心してください。私は夏憬兄上に危害を加えたりしません。内密の話がしたいだけです。
――私は、兄上を助けに来たんです」

――今兄王方に戻ってくるなら、反逆の罪は問わない。これまで通り王弟として遇する。
冬惺がそう告げると、夏憬の琥珀の瞳が限界まで見開かれた。
二人は卓を挟んで向かい合っている。冬惺の後ろには翔波が影のように控えているが、夏憬が安心して話し合いの席につけるよう、冬惺の太刀は夏憬に預けていた。
「……信じられん」
夏憬は太刀を抱えたまま呆然と言った。しかしその「信じられん」は、頑なな疑心から突っぱねているというより、あまりの好条件に驚いて漏れたつぶやきのようだった。
「本当に……本当に、罪に問われないというのか？」
「ええ。所領も据え置きになります。私の口約束では心もとないと言うのであれば、これを。同じ旨を、書面で春伶兄上に約束させたものです」
密書を差し出すと、夏憬は灯明台の下でじっくりと確認し、「兄上の筆跡だ」とつぶやいた。
その態度からして、夏憬の心がどちらに傾いているかは一目瞭然だ。冬惺が説得を試みるま

でもなく、夏憬は紅楓方と同じ陣営にいる危険性をはっきり認識していたらしい。おかげで夏憬が先走って兵を呼びたてることもなく、驚くほど簡単にここまで話が進んだ。

だが夏憬は、密書を命綱のように握りしめながらも、疑いの表情を消してはいなかった。

「し、しかし冬惺。おまえはどうなんだ。おまえは私を討ちたいのではないのか？」

「まさか。このことを春怜兄上に提案したのは私ですよ」

「おまえが……!?　なぜだ、おまえは私を憎んでいたんじゃないのか？　私が昔おまえになにをしたか、忘れたわけじゃないだろう！」

「もちろん。自分より体の大きい相手や複数人から攻撃をしかけられた場合の、かわし方や逃げ方や受け身の取り方を実地でご指導していただきました」

さすがの夏憬もこの皮肉は解した。ぐっと詰まってから、問いを絞り出す。

「……そのおまえが、なぜ私を味方に受け入れようとするんだ」

「春怜兄上にも同じことを聞かれましたよ」

冬惺は肩をすくめた。王都に帰還を果たした日のことを、思い出しながら語る。

『――だが、おまえと夏憬は仲が悪かっただろう。なぜおまえが夏憬を助けようとする？』

夏憬を味方に取り込もうと提案したとき、春怜は意外そうに言った。

冬惺は顔をしかめ、うなるように返す。

『そりゃ、俺が夏憬兄上に好意を持つ理由は何一つないですが、殺したいほど嫌いなわけじゃない。それに夏憬兄上は、綺理の姉君の夫です。俺にとってはそれだけで助ける理由になる』

『……おまえはどこまでも綺理なのか』

呆れたつぶやきを聞き流して、冬惺は言葉を重ねる。

『だいたい兄上が言ったんですよ。「一人の弟が、もう一人の弟を殺したかと思った」――。あれは、俺が夏憬兄上を討った場合にも当てはまるはずだ。春伶兄上は、俺たちに兄殺しも弟殺しもさせたくないんでしょう？――俺に、夏憬兄上を討てと命ずることも』

静かに言うと、春伶の顔からすとんと表情が抜け落ちた。彼はどこか虚脱したような声で、つぶやく。

『……ああ、そうだ』

王としてその命令を下さねばならないと、理性ではわかっていても、それでも。

だから冬惺は、そんな長兄のためにも道を提示する。

『春伶兄上。夏憬兄上に、戻ってきていただきましょう。――兄弟として』

「きょう、だい……」

夏憬が舌足らずの子供のように復唱した。彼は抱えていた太刀を椅子の脇に下ろし、卓に片肘をついて金の前髪をかき上げる。

「……兄上は、おまえだけを可愛がっていると思っていた」
「まあ、私のほうが春怜兄上と兄弟仲がいいのは否定しませんね」
「兄上がおまえを可愛がるのは、おまえが乾ノ術を使えない白桜の面汚しで、事実上王位継承権がないからだと思っていた。私が疎まれるのは、私なら王位を狙えるからだと思っていた」
続けてしゃべり出した彼に、冬惺は目を丸くした。
「そんな風に思っていたから、影珀叔父上の甘言にうかうか乗ったんですか？　馬鹿ですね」
自分が兄王に疑われていると思ったから、それならばと自分から先に謀反を起こす気になったというのか。
冬惺が呆れきったため息を漏らすと、夏憬は突如、卓に拳を叩きつけた。
「ああ、くそっ。本当はわかっていたさ！　昔から私だけできが悪いからだ！」
面食らった冬惺と翔波の前で、彼は爆発したように語りだす。
「『兄君はこのくらい簡単におできになったのに』『兄君が夏憬さまのお歳の頃には、もっと賢くていらっしゃったのに』！　小さい頃から私はそういう目で見られていた。兄のできがよすぎるせいで、私はいつも劣ったできそこない扱い。だからもっとできそこないの、黒い髪のおまえが生まれてきてほっとしたんだ！」
だから執拗に冬惺を白桜の面汚しと蔑み、自分は違うのだと安心感を得ていたのだという。
「なのに結局おまえも、できがよかった。頭は回るし腕も立つ。おまえと兄上は似ている。私

だけが愚鈍で、兄弟で一人だけ違うのはひょっとして私なのかもしれないと……っ」

冬惺の出生疑惑がまことしやかにささやかれる土壌には、白桜家の先代当主が戦に明け暮れて屋敷にほとんど居着かなかったことと、先代妃の不品行がある。ゆえに不義の子である可能性は、潜在的には冬惺以外の兄弟にもあるのだ。

（だから王になれば、自分の立場や存在の不安定さがなくなると思ったのか？）

冬惺はちらとそんなことを思ったが、とりあえず本音を口にする。

「夏憬兄上の悩みはどうでもいいです。同情する義理はありませんし」

「どう……っ!?」

「……閣下、正直すぎです」

後ろで翔波が額に手をやったが、その台詞自体が追い討ちである。

酸欠の金魚のように口をぱくぱくさせている夏憬に、冬惺は本気で面倒くさいと思った。――心にもない甘言を弄してなだめるのは面倒だ。ここは本音で勝負したほうがいい。

「俺は感動の兄弟和解ごっこをする気はないんです。好きか嫌いかで言ったら夏憬兄上は嫌いですし。ですが好きだからどうだとか、嫌いだからどうだとか言う前に、――兄弟でしょう」

「……」

「父親が誰であっても、兄弟であることに変わりはない。兄弟だから、嫌いでも助けたいんです。――夏憬兄上をこちらに取り込めば、戦略的にも有利になりますし」

「ですから閣下、正直すぎです！」

翔波が頭を抱えた。だが夏憬は逆に冬惺の言葉に嘘がないと――罠ではないと信じたようだった。中腰の状態からすとんと椅子に座りなおし、しばし沈黙する。

「――兄上のもとに戻るには、一つ条件がある」

「既に十分すぎるほどいい条件だと思いますが？」

「いや、この書状には玻璃のことが書かれていない。玻璃も反逆の罪に問わないと確約してもらわねば、私は戻れない。いや、この際私への特赦を玻璃のほうに使ってもいい。だから――なんだその驚いた顔は！　なぜ笑う。兄を馬鹿にしているのか！　この生意気な弟め！」

顔を赤くして言い立てる夏憬に、冬惺は笑いをかみ殺す。

「はいはい。玻璃義姉上のことは、もう一通の書状に書いてありますのでご心配なく」

「だったらそのもう一通とやらを出せ！　玻璃と話をしに行く！」

「その必要はないですよ。聞いてらっしゃいましたよね？――玻璃義姉上」

冬惺はもう一通の密書を卓に出しながら、振り返った。

「……ええ。気づいていたのね、冬惺公」

続き部屋との扉の前に置かれた衝立。その裏から、玻璃が姿を現した。

口を開けたまま固まっている夏憬のもとに、玻璃は微妙にそっぽを向いたまま歩む。

「夏憬」

「な、なんだ」
「冬惺公と春怜さまの申し出、一緒にお受けするわよね？」
「あ、ああ。……玻璃。おまえは……いや、なんでもない」
「なに？　言って」
玻璃が妖艶な流し目を送る。夫婦の力関係が垣間見える光景だ。
「いや……。おまえは私が王になれなくても……王になれない私でもいいのか？」
「いいわ。……さっきの聞いたから、もういいことにしたの」
夏憬がぐごふげほと変な咳払いをした。
冬惺と翔波は顔を見合わせる。いわゆる恋愛感情ではないにしろ、夏憬と玻璃が互いを憎からず思っているのは確かだろう。密議も夫婦仲も、落ち着くべきところに落ち着きそうだ。
咳払いを収めた夏憬が、表情を改めて妻をうかがう。
「だが、おまえはいいのか？　私にとっては兄弟のもとに戻ることでも、おまえには……」
家族を裏切ること。
玻璃は夫にみなまで言わせず、肩をすくめた。
「私たちが生き延びられる道が一つになったのは、お父さまがあんな同盟を強行したせいよ。それにあの子は、私たちがこうすることを望んでいたはずだわ。私たちをそう仕向けたのもあの子だもの」

冬惺がぴくりと反応すると、玻璃が碧玉の瞳でまっすぐに義弟を見た。
「伝言を預かっているわ。――『待ってる』、ですって」
（――――）
伝言の主は確かめなかった。それで十分だった。
翔波がはっとこちらを見るのにも気づかずに、冬惺は無意識のうちに口元を手で覆っていた。
目を閉じて、もう一人の碧玉の瞳の主を心に描く。最後に見た、涙に濡れた瞳を。光のようにまばゆい金の髪を。誰よりも愛しい、彼女の面影を。
姉夫婦に忠告し、王都方に寝返る下地を用意してくれたのも彼女なのだ。自分たちの心はつながっている。心と心が、互いの兄と姉を通じて、その伝言を通じて、今重なり合った。
「――ありがとうございます、義姉上」
冬惺は手をゆっくりと下ろし、誓いを新たにするように拳を握った。
（綺理……）

砦に潜入するときに比べれば、脱出はずっと簡単だった。
密使が出入りしていることを近くの紅楓方の軍に悟られるわけにはいかないので、あくまで

ひそかに引き上げることになるが、夏憬に指示して一時的に警備の穴を作らせた。手引きをした紺装束の鏡作の里人たちと共に、鉤縄で城壁を越えて悠々と外に出る。

「翔波さま、冬惺公閣下。四番の地点に馬を用意してございます」

「ありがとう。沙良たちも気をつけて」

翔波が小声で言うと、紺装束の者たちは「御意に」と唱和し、夜闇に散るように林の中へ消えていった。冬惺と翔波も、事前に打ち合わせた場所を目指して林の奥へ分け入っていく。

さすがに暗いなと思っていると、道行きを照らすように浅葱色の光が灯った。

真羅だ。淡い浅葱色の光をまとった童子が、冬惺と翔波のそばに現れる。

「おめでとうと言っておこう、少年。キリからの伝言、よかったではないかね」

「真羅。おまえ、やはり盗み聞きしていたのか」

冬惺は驚かなかった。たぶん真羅が聞いているだろうと予想していたから、感動の兄弟和解ごっこは意地でもしたくなかったのだ。

「もちろん聞いていたとも。私も君たちに手を貸した以上、首尾は気になる」

――冬惺が夏憬に反則技と言ったのは、砦に潜入する際に真羅の力を借りたことである。

冬惺の考えから言えば、それは紛れもない反則だ。行く手に兵がいないか先回りして確認してもらう程度の助力だったから、ぎりぎり許容できたが、何度も使いたい手ではない。

玉造の里から逃げ、王都に帰還するまでに彼に並々ならぬ力を借りたのまではいい。だがも

し彼の力に依存して戦に勝とうとするようになってしまったら、己の欲望のために大淵妖と《契約》した者たちと同じになってしまう。――それで真羅との《契約》を汚したくはない。

真羅のほうも気持ちは同じであるようで、二人と並んで歩きながら言う。

「私は人間同士の戦に加勢する気はないがね。今回は《契約者》の命を守るための手助けということだ。それにしてもいろいろと聞けたな、君たち」

密議のあとに兄夫婦から聞き得た情報のことだ。翔波が真っ先にうなずく。

「うん。奏珠の安否もわかってよかった。玉造家に引き渡された捕虜を綺理が引き取って飼っているって言うから、最初はなんのことかと思ったけど……。綺理の手元にいれば奏珠も安全だろうし、奏珠が綺理にそばについていてくれるなら少しは安心できる」

「ああ。とはいえ玻璃義姉上が、直接綺理の姿を見る機会はほとんどなかったと言っていたのが気になるな。影珀叔父上の厳命で、綺理の行動範囲は別の棟の一帯に限定されていたというし。それに今はもう、紅楓の離宮に移されたと……」

冬惺が首を振ると、真羅は考え深げに指を口元にやった。

「ふむ……。私もこれまで何度かキリを訪ねようとしたのだがね、いつも一定範囲内に万宵の気配があってどうにも近寄れなかった。やはり万宵はキリに興味を持っている。キリを孤立させたのも、あるいは万宵の意思か……」

「だが万宵が操っている可能性があるとしたら、空騒だろう。そうでなくば、あいつの怪我が



なかったことになっているのは解せない。空雛は北部で軍を率いて戦っているというし、兄上たちの話では、里で会ったときから怪我をしている様子はなかったという」

冬惺は木立の向こうに馬を見つけて歩み寄りながら、苦い口調で応じた。

応じてから、真羅の台詞を聞きとがめる。

「真羅。万宵が綺理に興味を持っているというのは、どういう意味だ？」

「……万宵は、きっと知りたがるはずだということだ」

真羅はそこに納めてあるものの感触を確かめるように、懐を手で押さえた。

「知りたがる？　なにをだ？」

「――もう一人の自分が、なぜキリに惹かれたのかを」

そう言って、妖王の半身は虚空に姿を消した。

夜陰に乗じて、冬惺たちが自軍の宿営に戻ってから二日。

冬惺率いる討伐軍と、夏憬の軍は、砦の南の野で対峙する。しかし両軍の間で矢が飛び交うことはなく、時をはかったように夏憬の軍の中で声が上がった。

「私は我が父、我が兄弟の家を崩壊に導くつもりはない！　我らの真の敵は、紅楓の家にあり！　我が忠誠は、実の兄にして正統の王、白桜の春怜のもとに返る――！」

呼応する声が討伐軍からも上がり、両軍は速やかに合流を果たす。
そして両軍は、夏憬軍の後方に布陣していた紅楓方、動揺している鵜飼家の軍勢になだれかかり、勝敗はまたたく間に決した。
――この内乱における討伐軍の猛反撃の、その始まりの戦であった。

万宵は物思いにふけりながら、雪空を羽ばたいていた。
紅楓の離宮の上を数度旋回し、降下して庭木の枝に降り立つ。視線は知らず識らずのうちに殿舎のほうへ向かっていた。より正確には、綺理のいる部屋のほうへ。
『あ、そっか。似ているんだ』
（そんなはずはない。そんなはずは、ないのだよ）
耳に蘇った声を否定して、万宵は枝に積もった雪を落とす。
万宵があの《契約者》の少女に近づいたのは、真羅が地上に執着する理由を知るためだった。
この自分に恐れ気なく接し、逆境にも潰されない彼女の強さは、確かに珍しいと思った。
その彼女がかつて真羅のために泣いたというから、自分も泣かせてみたいと思い、湿ノ神を淵海に取り戻すまでの暇つぶしも兼ねて何度もちょっかいを出した。そのたびに彼女が予想外

の反応をするのが面白くて、もっと見ていたいと思った。

――それを彼女は、なんと評した？

『真羅に似ているから』

万宵は、自分の存在が侵食されていくかのような感覚にひやりとした。

真羅と同じものに執着することで、自分は真羅に近づいてしまったとでもいうのか？

（違う。真羅が惹かれているのは《契約者》たちとのあたたかい関係で、真羅が見守りたがっているのは彼らのお綺麗な絆。私はそんなものは求めていないのだよ。私は――）

私はそれを、汚したい。

浮かんだ考えは、万宵の心にぴたりとはまった。

そうだ。自分はあの《契約者》たちの関係が壊れるところが見たいのだ。彼らの絆が壊れて泥にまみれ、冷え冷えとしたものになってしまうのが見たい。そうすれば真羅も、惹かれていたものとは違うと感じて執着を失うだろう。

あたたかく居心地のいい関係などいらない。《契約者》たちの絆など、この自分が壊してやる。ぼろぼろに引き裂いた、あの布の巣のように。

身の内からこみ上げてきた歪んだ思いと、破壊衝動に、万宵は喉を震わせて笑った。

――この歪みがある限り、自分は確かに万宵だ。自分が自分でなくなることはない。

六章　崩壊の夜明け

冬惺は真紅の旗がたなびく敵軍に太刀を向け、馬の腹を蹴った。
「名誉が欲しい者は続け！　勝利を獲りに行くぞ！」
号令一下、轟くような鬨の声が上がり、騎兵隊が砂塵を立てて紅楓方の軍に突撃する。
「――正統の王、春怜陛下のために！」
「――我らのもとには冬惺公閣下がある！　勝利は我らのものだ！」
叫ばれる名前は、春怜のものと冬惺のものと果たしてどちらが多かったか。
先陣を駆ける冬惺が、馬上から一太刀で旗手を斬り伏せる。紅楓方の旗が倒れるのを見て討伐軍の士気はますます上がり、蟻を踏み潰すように敵兵を討ち取っていく。
冬惺は突き出された槍穂を叩き払い、返す刀で敵兵を斬り払うと、血に濡れた太刀を掲げた。
「突き進め！　このまま進撃し、地方府を奪い返す！」
敵の敗走する先を目がけて、太刀を振り下ろす。冬の日差しに切っ先がきらめき、喚声と共に討伐軍の騎馬が大地を震わせて駆けた。
（これでまた一つ、拠点を取り返せる）
馬を駆りながら、冬惺は懐にある守り袋の存在を意識した。

今は奪われた街道沿いの拠点を確保し、進軍してくる敵を迎え撃つばかりだが、態勢が整えばいずれ北部に攻め込める。綺理に、近づける。

（俺は綺理を取り戻す。そのために）

そのために冬惺は太刀をふるい、戦いの日々を重ねる――。

（冬惺は、戦ってる……）

時間差はあれど、南部でのできごとは紅楓の離宮にも伝わってきていた。

冬惺が南で戦果をあげていること、そのせいで紅楓方が王都を攻めあぐねていること。同時にそれは、冬惺の無事を知る報せでもあった。

冬惺は護国大将軍として、いずれ北部にも進軍してくるだろう。それを、彼は自分のもとにやってくるのだ、と思ってみるくらいは許されるだろうか？

彼は必ず綺理をさらいにくると約束してくれた。さらいにきて――その後のことは、まだ考えない。今考えるべきは、もっと別のことだ。

「――じゃあ、夏愾殿下が白桜方に戻った影響は小さくないのね」

綺理は居室としてあてがわれた部屋で、卓に飾られていた花をむしりながらつぶやいた。

「はい。夏慟殿下が異例なほど寛容に白桜方に迎え入れられたことから、現在紅楓方に降っている北部の小領主たちも、白桜方に走ることを考えはじめているようです。――というより、彼らが白桜方に寝返るのではないかと、元来の紅楓方貴族の間で不信感が広がっています」

花びらをざるに移しながら綺理の耳元でささやいたのは、奏珠だ。

梨英を手本に女装した彼は、淡い褐色の鬘をかぶり、眉毛や睫毛も同色に染めている。どんな化粧を施したのか、目許がきりりとした面差しは梨英そっくりで、色香をたたえた大人の女性に見える。身長はもともと同じくらいだったが、梨英の豊かな胸や腰つきまで完璧に再現しているというのは、玄人根性のなせる業だろう。声までかなり梨英に近づけている。

「その小領主たちっていうのが、具体的にどこの家かまでわかる？　名前と交友関係を洗いだせれば、そのうち揺さぶりをかけられるかも」

「それは既に調査対象に入れています。……紅楓方の内部を引っ掻き回すつもりですか？」

くすりと笑った奏珠に、綺理は黙って肩をすくめた。

赤い花びらで一杯になったざるを見て、とりあえず寝室に置いてくるよう指示する。

「ところで姫さま。この花びらはなにになさるんです？　香りはないようですが」

『梨英』の口調で問うた彼に、綺理は「えへ」と笑顔を見せた。

「えっとね。この花びらを乾燥させて、粉末を別の薬と混ぜると――」

「愚問でした。姫さまが長いこと毒薬調合を我慢していられるはずはありませんものね」

奏珠はざるを手にすると、去り際に再び声をひそめて付け加える。

「……影響というなら。娘と娘婿が寝返ったことで、玉造公が紅楓方に対し面目を失ったことも確かです。もちろん玉造家は最有力の大貴族ですから、紅楓方内部での立場や影響力は磐石ですが……、玉造公本人が、名誉挽回のために躍起になるかもしれません」

躍起になる、の具体的な内容を想像して、綺理は眉をくもらせた。

（お父さまの軍は、西海道を南下しているらしいって話だけど……）

奏珠が寝室に消えたあと、花のなくなった茎を指でくるくる回しながら父のことを考える。心に浮かぶのは、南へ出陣する馬上の父を見送ったときのことではなく、その前日に父の部屋を訪ね、渡した守り袋を突っぱねられたときのこと。

昔から父は、綺理の手の届かないところにいる。

家族として父のことは守りたいと思うが、反乱計画が成功してもいいとは決して思えない。父が親戚の血で手を汚すような事態になるくらいなら、内乱が鎮圧されるまで白桜方の捕虜になっていてほしいとさえ思う。だがそれらはすべて、綺理の手が届かないところでの話だ――。

（――？）

ふと、綺理の思索を破るように、廊下のほうからせわしない足音が近づいてきた。

顔を上げたのと同時に、桂鈴が慌ただしく部屋に入ってくる。いつもおっとりしている彼女にしては珍しい。

「姫さま。朔秋殿下がいらっしゃいます」
「朔秋が？」
「はい。夜分遅くですからお断りすべきでしたのに、こちらの離宮の侍女たちが通してしまって。せめて私がお取り次ぎしますと申し上げましたのに、無理に……」
綺理は顔をしかめ、寝室から戻ってきた奏珠と目を見交わした。
夏憬の寝返りの報が入ったときも、朔秋は綺理のもとにやってきた。綺理の姉夫婦の誓い破りを罵って怒鳴り散らし、しかし綺理が特に衝撃を受けていないことに苛立って、「なぜ貴様は青ざめて卒倒しないんだ！」と無茶苦茶なことをわめいて去っていったのである。
綺理たちが一様に身構えたとき、扉が大きく開かれた。
「愉快な報せがあるぞ、玉造の娘！」
部屋に足を踏み入れた朔秋が、まっすぐに綺理のもとに歩んでくる。彼はやんわりと立ちふさがろうとした桂鈴と『梨英』を腕で振り払い、綺理の前に立った。
「朔秋。いくらなんでも無礼な――」
長椅子から立ち上がろうとした綺理の腕を、朔秋がつかんだ。彼は腕を引き上げるようにして綺理を立たせ、ぎらつく琥珀の瞳で綺理を見下ろす。
「おまえのために吉報を持ってきてやったんだよ。なんだと思う？」
「私にとって吉報といったら、あなたとの婚約解消とかそのあたりなんだけど？」

綺理が滅らず口で返しても、朔秋は上機嫌でにやにやしている。
「教えてやるよ」
彼は口の端を歪め、もったいぶるように言葉を切った。綺理が嫌な予感に瞳を曇らせるのを待ってから、高らかに言う。
「玉造公影珀の大軍勢が、とうとう白桜の冬惺の軍と戦うぞ！」
（！　お父さまと、冬惺が――!?）
いつかは起こり得た状況にもかかわらず、その言葉の響きは、綺理に強く殴られたような衝撃を与えた。ぐらりと視界が傾くような感覚。朔秋の凶悪な台詞が耳朶を打つ。
「ははは っ！　戦力は玉造軍が圧倒的に上！　これで白桜の冬惺も終わりだな！　早ければ夜明けには両軍が激突し、白桜軍を蹂躙する。嬉しいだろう？　貴様の父親が、じきに白桜の冬惺の首級をあげるんだ。俺の手でやつをなぶり殺しにできないのは残念だが、やつの首が届いたらその前で祝い酒を飲むのも楽しそうだ。そのときは貴様に酌婦をさせてやるよ」
朔秋が綺理の顎をつかみ、仰向かせて残虐に笑う。
綺理はぞっとしてその指を払いのけたが、返す言葉はひどく弱々しくなった。
「……冬惺は、負けたりしないわ……」
「いいや、明日がやつの命日だ。もし鏡作の銀髪こぞうが白桜軍にいれば、影珀はあいつも白桜の冬惺の骸の道連れにするだろうよ。――それとも貴様は、父親の死を祈るか？」

（――っ！）

朔秋は自分の台詞が興に入ったのか、綺理を突き放して高笑いをした。

よろめくように長椅子に座り込んだ綺理に、桂鈴と奏珠が駆け寄る。だが二人の顔も青ざめており、「姫さま……」と声をかけたまま言葉を失ったように黙った。

そんな綺理たちの姿に、朔秋はもう一度哄笑を部屋に響かせた。

「祝杯の用意をしているがいい、玉造の綺理！　白桜の冬惺の訃報が入ったら、真っ先に貴様に報せにきてやるよ！」

深更――、綺理はまんじりともせずに寝台の上で膝を抱えていた。

次の報せがいつ舞い込むとも知れないので、夜着には着替えていない。真っ暗で静かな寝室に一人。室内は十分に暖められているのに、胸に重く立ち込める暗雲のせいで四肢が冷え、感覚が失せているような気がする。握っている組み紐のお守りの感触だけが確かだった。

（お父さまは謀反を起こした時点で、冬惺たちを始末することを考えていたはず。そのお父さまが、今さらなにかをためらうとは思えない）

説得は無意味だと重々わかっていても、父に最後に挨拶に行ったとき、冬惺たちへの温情を

頼んでおかなかったことが悔やまれる。

朔秋が出て行ったあと、奏珠が離宮に届いた報せの詳細――影珀の動向について調べてきてくれた。

それによると影珀は、西山道沿いが白桜方の勢力圏に戻りつつあるのを止められないと判断して、そちらの戦線維持をあきらめたという。その代わりに自軍を結集し、西海道を攻め上って一気に白桜方の喉笛に食らいつくことにしたらしい。

影珀は早々に決着をつけにかかった。つまり、それに足るだけの大兵力を率いているのだ。対して冬惺の軍のほうは――どうなのだろう。

（早ければ夜明けには戦が始まるって言っていたけど……）

報せがこの離宮に届くまでには時間差があるし、戦況は刻一刻と変わるものだ。既に戦が始まってしまっている可能性も、ないとはいえない。

だが今このとき、この瞬間になにが起きているかを知るすべは、綺理にはない。

（冬惺……翔波……冬惺……！）

今までも彼らが戦に明け暮れているのは知っていた。けれどこんなに不安と恐怖に押しつぶされそうになったのは初めてだ。そばにいるならどうか二人を守ってほしいと、真羅に祈る。

そうして、どのくらいの時間が過ぎた頃だったか。

「――キリ。玉造のキリ」

不意に、優しい声がした。

真羅をそのまま大人にしたような声。万宵の声のはずなのにどうしてこんなに優しいのだろう、と綺理は抱えた膝に顔を埋めたまま漠然と思う。

「キリ。トウセイが今どうしているか、知りたいかね？」

「……そりゃ、知りたいわよ。教えてくれるの？」

胸がぎゅっとしめつけられるような思いで答えると、万宵がやわらかく言った。

「逢わせてあげることはできる。――少年に、逢いたいかね？」

心の隙間にすべり込むような言葉に、綺理はかすかに声を震わせる。

「――逢いたいわ。冬惺に、逢いたい……！」

「なら、連れて行ってあげよう」

顔を上げると、闇の中に浅葱色の光をまとった半透明の青年が浮かんでいた。

翡翠の瞳に、金銀交じりの黒髪。月草の襲の装束をまとい、人間離れした美貌には穏やかで気遣わしげな表情を浮かべている。――万宵が、こんな真羅のような表情を浮かべるはずはない。そもそも彼は、鷹に憑りついているはずだ。

これは夢だろうか。きっとそうだ。自分はいつの間にか眠ってしまったのだ。だから万宵が優しくて、綺理の願望を叶える言葉を言ってくれる。

「連れて行ってくれるって、どうやって……？」

「夢の通い路をたどって。想い焦がれる相手のもとへなら、心の翼は千里を翔る。その道行きを私が案内しよう。――さあ、案内人の名を呼びたまえ」

万宵がこちらに手を差し伸べる。綺理はぼんやりとしたまま、導かれるように手を伸ばしていた。名前。彼の名前は。

「万の宵を統べる者、万宵。――連れて行って」

万宵の手を取った途端、ふわりと体が軽くなった。万宵と同じ高さまで浮かび上がる。

「え？　これって……」

「夢路を渡れるのは魂だけだ。想う相手のもとに行きたいと強く願えば、魂は生き霊となって体を離れる。そうして相手のもとに飛ぶのだよ」

下を見れば、綺理自身の体がそこにあった。力が抜けたようにくたりと寝台に横たわり、静かに寝息を立てている。やはり自分は眠っているようだ。

万宵を振り返ると、彼の姿はもう半透明ではなかった。彼が片手を虚空にかざすと、暗い部屋の風景が陽炎のように揺らぎ、ぽっかりとした闇が生まれる。

「来たまえ」

万宵は微笑んで、綺理をその闇の入り口へと誘った。

――泥のような闇の中を、ゆっくりと落ちていく。

闇の入り口に滑り入った途端、綺理を包んだのは、深い森の中のようなしっとりとして濃密な気だった。そこは右も左も前も後ろもない闇の中だったが、少し下を行く万宵は淡く光ってはっきりと見えるし、あたりには紺碧の光がぽつぽつ灯っている。

（ここ……は？　あの光は……）

紺碧の光が、闇の海を泳ぐ魚のように視界をよぎる。それを目で追ってきょろきょろしながら、綺理は万宵と手をつないで闇の空間をゆっくりと沈んでいった。

沈み続けるうちに、じわじわと違和感が生じてくる。頭の片隅で警鐘が鳴る。

変だ。夢の中にしては、全身を包む湿った気の感覚が生々しすぎる。それにあの紺碧の光。あれはもしや、淵妖ではないだろうか？

（待って。ここに入る前、体から抜け出す前、私は万宵の名前を呼んで――）

――伝承は言う。大淵妖の言葉に耳を傾けてはならない。彼らと取り引きしてはならない。ある考えが閃光のように脳裏でまたたき、綺理はつないだ手をびくりと震わせた。

「キリ。どうしたのだね？」

万宵が怪訝な顔でこちらを振り仰ぐ。綺理はごくりとつばを飲み込んで、言った。

「……万宵。これ、夢じゃなくて現実？」

「ふむ。現実だとしたら、君はここをどこだと思うのだね？」

「……淵妖の通り道？」

最初に浮かんだことを口にすると、万宵が笑った。
「ご名答！　ここは妖道。地上のひび割れにして、空間と空間をつなぐ淵妖の通り道だ」
「！　それじゃ、やっぱり――」
「おっと、手を離さないでくれたまえ。私は案内人だと言っただろう？　この妖道は深いし広いし、出口がいくつもある。短い距離をつなぐ妖道と違って、ただ落ちていけば出られるというわけではないのだよ。一度私とはぐれれば、君の魂は妖道の中でさまようことになる」
振り払いそうになった手を、逆に強くつかまれる。以前と同じ冷たくなぶるような表情になった万宵に、綺理は怒りと悔しさが湧き上がるのを感じた。
「わ、私を騙して連れてきたのね！」
「やっとわかったかね。虚言を弄して人を惑わすのは、大淵妖の性。夢だと信じて無防備に私の言うことを聞いた君が悪いのだよ」
「……っ。だ、だけどっ、魂だけで移動なんてできないと思っていたもの！」
魂だけでは長く動けないからこそ、万宵は鷹を依代にしていたのではなかったのか。
万宵は薄く笑んだ。綺理と指を絡めるように、手をつなぎ直す。
「私と君だからできるのだよ。君は《契約者》。今は真羅がそばにいないから、湿ノ力の放出が完全には抑えられていない。そして湿ノ力を放つ存在は、淵妖に力を与える」
「！」

「淵妖の体は湿ノ力の塊だ。君から湿ノ力をもらえばこうして仮初めの姿ができ、一時的に存在を安定させられるのだよ。君の魂を通じて力を使わせてもらえば、妖道も開ける。特に君の放つ力は、真羅と同質――つまり私とも同質なのでね、私の魂によく馴染む」

つないだ手を介して湿ノ力を補給されているのだと知り、綺理は手を振りほどきたい衝動に駆られた。そんな綺理の手をしっかり捕まえたまま、万宵は続ける。

「そして仮初めの姿はあっても、今の私の存在はまだ魂だけの状態に限りなく近い。ゆえに実体には触れられない代わりに、君の魂には触れられる。この文字通りの離れ業は、私と君ならではのものだということだ。――ああ。心配せずともこの妖道を抜けさえすれば、帰りは簡単なのだよ。私と手を離せばいい。そうすれば君は、時間がたてば魂と体をつなぐ糸に引っ張られて、勝手に体に戻る」

体に戻る方法についての懸念はひとまず晴れたが、それもこの妖道を出てからの話だ。今は万宵に手をつかまれたまま落ち続けるしかない。その先がどこであっても。

「……私を、どこに連れて行く気なの？」

警戒心をあらわに問うと、万宵がふっと翡翠の瞳をなごませた。

「心配せずとも向かう先は同じだよ。夢だと思わせなければ君が警戒して来ないと思っただけだ。――夢ではなく現実で少年の様子がわかるのだから、君は嬉しいのではないかね？」

（え……）

では、冬惺のもとに連れて行ってくれるというのは本当だったのか。

「あ……あの、ありがとう。万宵」

「……敵の妖王に礼を言うかね、君は。とにかく逢いたい相手のことを考えていたまえ。そうすればそこに引き寄せられて、早く妖道を抜けられる」

万宵がふいと下を向く。

言われて、綺理は黒髪の少年の姿を思い描いた。不安と焦燥と、それに彼に会える期待とがない交ぜになって、嵐のように胸に渦巻く。

（冬惺……今、どうしてる？　無事でいてくれてるよね……？）

万宵に手を引かれて落ちていく綺理は、それゆえに気づくことはなかった。

――万宵が瞳に暗い愉悦の光をたたえ、ほくそ笑んでいたことに。

いまだ東の空が暗い頃――。

瑛国南部西海道沿いの開けた野で、両軍はじっと時を待っていた。

玉造軍はその大兵力を三つに分け、小高い丘の上と左右に陣をしいていた。玉造家の緑の軍旗が掲げられた下には、多くの天幕が張られ、篝火の光の中に浮かび上がっている。遠目には

光の群れが丘を覆っているように見えただろう。
対して、その南側に陣取る白桜軍は少数だった。
まがりなりにも一軍としての陣容を整えてはいるが、とうてい玉造家の大軍勢に抗しうるものではない。夜営も篝火が少なく、暗くてこぢんまりとしている。
――この玉造軍の圧倒的優位を作り出したのは、彼らの異例な速度での南下だった。
玉造軍が南へ急進した頃、白桜軍の主力は西山道のかなり北まで進軍していた。そこから最低限の守備兵を残してとんぼ返りを打っても、時既に遅しだったのである。
つまり玉造軍は、「自勢力の奥深くまで白桜軍を引き込む代わりに、入れ替わりで王都に攻め上る」という、肉を切らせて骨を断つ作戦――ないしは賭けに出たわけだ。
そして彼らは今のところ賭けに勝ち、西海道に辛うじて立ちふさがっている白桜軍の前に、その兵力差を見せ付けているのだった。

翔波は白い息を吐きながら、白桜軍の天幕の間を早足で歩いていた。
戦を控えて緊張が走り、兵たちが落ち着かないそぶりで立ち動く中、きょろきょろとあたりを見回しながら行く。宿営地の端まで来たところで、彼は目的の人物を見つけて駆け寄った。
「冬惺。ここにいたんだ」

振り返った冬惺に、両手に持っていた杯の片方を渡す。中身は酒だ。翔波も冬惺も普段は酒を飲まないが、こんなときは別である。体を温めるためと、戦の前の景気付けのために。

「君ね、一人でふらふら天幕を離れるなよ。たぶん夜明けには戦が始まるだろうから戦闘準備しとけ――って言った張本人が迷子で行方不明なんて、洒落にならないから」

冬惺は兵を率いているときだけはなぜか方向を間違えないが、基本的に想像を絶する方向音痴である。一人で外を歩かせたら、うっかり敵陣の天幕にでもたどり着きかねない。

冬惺が杯を受け取り、敵陣の夜営の光を眺めながら言う。

「おまえが絶対に捜しにくると思って安心していたんだ」

「そりゃそうだけどさ、僕にだって捜索可能範囲ってものが」

「こちらの宿営地はそう広くないしな」

「……」

冬惺が酒を一口飲み、翔波もその隣で黙って杯に口をつけた。

(本当ならここで後続の軍を待って、合流してから迎え撃つはずだったんだよなあ……。でもまさか、玉造軍がこんなに速く到着するとは思わなかったし)

翔波は杯の陰から、ちらと冬惺の横顔を盗み見た。

――冬惺とて、決して西海道の防衛をおろそかにしていたわけではないのだ。

しかし玉造軍は、淵妖の多く出没する危険な湿地帯を踏破し、西山道から西海道に予想しえ

ない速さで移動した。西海道の守備軍にしてみれば、前線ではないからと油断していたところに突如敵の大軍勢が現れたことになる。

しかもその少し前に、北部の拠点が空虚の軍に急襲されたため、西海道の守備軍はそちらに援軍を割いてしまっていた。そんな状態で結集した玉造軍を押しとどめられるはずはなく、手薄になっていた西海道は彼らの迅速な南下を許してしまったのである。

付け加えるなら、玉造家の誇りにこだわる影珀が、玉造の里に至る西山道をこうもあっさり明け渡すとは思わなかった——というのもある。

（いろいろ重なった結果なのは確かだ。けど、やっぱり玉造軍がたいした損害もなしに湿地帯を抜けられたのは、万宵が向こうに手を貸しているからってことだよね……）

翔波は思わずこぼれたため息を、熱燗の酒を吹き冷ますことで誤魔化した。

「……閣下。援軍が到着するまで、この軍だけで持ちこたえるんですよね」

「ああ。さっき作戦会議で言った通りだ。俺たちが尻尾を巻いて夜逃げすれば、少なくとも現時点では、王都に進軍する玉造軍の道行きを阻むものはなくなる。援軍が着くまで俺たちが時間稼ぎできるかどうかが勝負だ」

「正直なところ、勝算はどのくらいですか？」

冬惺が一瞬動きを止め、残りの酒を一気にあおった。

「おまえを安全な場所に置いて出陣したいくらい、だな」

「……本当にやらないでくださいね、閣下。置いていかれても絶対に捜しにいきますから」
わかっているさ、と冬惺が肩をすくめた。空の杯をぽいと投げて寄越す。
翔波は念押しすると、冬惺につられて敵陣のほうへ目をやった。——目をやってから、彼が今までずっと影珀のいるほうを見ていたのだと気づいて、はっとなる。
そして翔波が気づいたことに気づいたのか、冬惺が小さく苦笑した。
「……綺理が今頃どうしているか考えていたんだ」
「え？」
「戦の結果がどんなものになって、どんな形で綺理のもとに伝わるか、わからないからな。……今くらいは、なにも知らずに優しい夢の中にいてくれるといいと思ったんだ」
返す言葉を失った翔波の肩に、冬惺が腕を回した。互いの武具が当たって硬い音を立てる。
「おまえは、綺理を悲しませる報せを作るなよ」
それが「無事でいろ」の意味だと気づいて、翔波は目を瞠った。
普段ならにやりと笑って「君もね」と返すところだが、それは無理だろう。冬惺が勝っても負けても、おそらく綺理には吉報にはなりえない。だからせめて、淡く笑って応じる。
「……君も、僕を悲しませる報せを作らないでよ」
——その間にも、夜明けの足音は容赦なく迫ってくる。

夜明けを待つ玉造軍の本陣の天幕の中では、最後の作戦会議が開かれていた。
「白桜方の援軍はいまだ西山道の途上にあり！　その先遣隊にあたる騎兵五十余騎も、どれほど早くとも到着にはあと一両日はかかろうかと！」
斥候の報告に、指揮官たちは満足げにうなずく。
「ならばその者たちが馳せ参ずる頃には、この野は白桜軍の骸で覆われているでしょうな」
「なに。あそこにいる白桜軍を皆殺しにしたとて、この野を覆うほどの数にはなりますまい」
「さしもの彼の護国大将軍も、この戦力差ではどうにもならぬでしょう。地の利はこちらにあって夜襲はかけられず、伏兵を隠す森もない」
実をいえば、西海道南下という賭けに出たあと、冬惺指揮下の白桜方の対応がこちらが予想していたより早かったため、一度ならずひやりとしたことはある。だが結果的に彼らが援軍と合流する前に間に合ったのだから、勝ちは決まったようなものだ。
口々に言う指揮官たちに、不意に威厳ある声がかけられた。
「――して、琅公国の動きはどうなっている？」
玉造軍総大将、玉造公影珀である。

彼は出陣に備えて武装し、最上座に微動だにせずに座っていた。
天幕内が静まり、碧玉の視線を向けられた指揮官の一人が「――は」と答える。
「白桜方が琅公国に援軍を要請したとの件ですが、最新の報告でもいまだ南海道に琅公国軍の影なしとのこと。援軍の派遣が遅れているか、要請を断られたか、あるいは水海の北限まで船で移動してから上陸するつもりやもしれません。なんにせよどの港にも、琅公国軍が入ったとの情報はまだ寄せられておりません」
船が航行できる塩水の海、水海は、北瑛島と南晶島の間にのみ存在する。水海に接しているのは瑛国南部の一部地域だけで、ここからは遠い。たとえ今すぐ水海の北限ぎりぎりから上陸を果たしたとしても、ここに到着するまでには三、四日はかかる。
「ふむ……。いずれにせよ冬惺は、どの援軍とも合流を果たすことはない。確実にあやつを討てるということだな」
影珀の口から彼の甥の名が出たことに、指揮官たちは思わず目を見交わせた。
影珀は既に、冬惺を討ち取った者には莫大な報奨を出すと宣言している。今さら温情もなにもないだろうが、それでも冬惺の年少期を知る玉造の里出身の指揮官が、おずおずと言った。
「……開戦前の降伏勧告は、如何様に？」
「笑止！」
影珀は拳で卓を叩き、重々しく叫んだ。

「白桜の白き軍旗を冬惺の血によって紅く染め、我らの勝利の旗とせよ！――夜明けをもって、全軍攻撃開始する！」

夜明けと共に戦鼓が打ち鳴らされ、鬨の声が暁の空に響き渡った。

「――玉造家のために！」

「――玉造家当主、影珀公のために！」

「――正統の王、朔秋陛下のために！」

玉造軍のしるしである緑を身につけた兵たちがどっと沸き立ち、前方に一塊になって布陣している白桜軍目がけて押し寄せた。

丘を下れば地の利を捨てることになるが、それはもはや問題にならない。相手の何倍もの兵力を有しているのだから、一気に押し包んで殲滅してしまうという策に出たのだ。

「囲め！　一兵たりとも逃がすな！」

両翼の部隊が突出して陣形を変え、白桜軍の左右に回りこむ。

三方から迫る玉造軍に対し、白桜軍はこの状況で唯一有効な策を取った。

――さっさと逃げたのである。

「て、敵軍、撤退しています」

潮のように退いていく白い戦旗に、玉造軍内で驚愕の声が上がったのも無理はない。なにしろ勇猛果敢で知られた護国大将軍が、戦わずして敵前逃亡したのだ。

しかし白桜の冬惺を討ち取る絶好の機会というのは、みすみす逃すには大きすぎる餌だった。

「なにをしている！　追って、臆病者どもにふさわしい死をくれてやるのだ！」

本隊の馬上で影珀が吠え、玉造軍の呪縛が解けた。なにかの罠かと深追いを躊躇していた指揮官たちも、追撃命令の戦鼓を聞いて動き出す。

かくして、追走劇が始まった。逃げる白桜軍に、追いすがる玉造軍。途中で玉造軍が相手を囲みかけたが、包囲陣が完成する寸前で兵力の一番薄いところを騎兵隊に破られ、突破された。とはいえ白桜軍も、いつまでも逃げ続けていられるわけではない。

「このまま川辺へ追い込め！」

街道を離れて逃げてゆく白桜軍の前方には、大きな川が横たわっている。しかし白桜軍はむざむざ川へ突き進むことはなく、進路を斜めに変えて川べりに沿うように撤退を続けた。

だが上流に向かうと、ほどなくして行く手に切り立った崖が現れ、白桜軍の動きが止まる。崖と川と玉造軍とに三角に囲まれて、白桜軍はついに逃げ場をなくしたのだった。

その様を後方の本隊から見てとった影珀が、勝利を確信した声で叫んだ。

「これで敵は袋のねずみだ！　一兵残らず討ち取れ！」

「これで敵は前面だけだ！　なんとしても持ちこたえろ！」

白桜軍の中で、冬惺は馬首をめぐらして叫んだ。

野原の真ん中にとどまっていれば、囲まれて四方八方から押し潰されるのは免れない。けれど川と崖を背にして、前面の敵だけに集中すればよいようにすれば、持久戦に持ち込める。

（あとは、援軍が少しでも早く到着するのを祈るばかりだな……）

槍兵隊を前面に展開して大盾を並べさせ、その後ろから弓兵隊に矢を射させる。

じきに矢の雨が、空を覆い隠さんばかりになった。また、両軍にごく少数ながら混じっている乾術師が互いに火球を撃ち合って相殺し、あちこちで破裂音と爆風が生じる。

次第に槍の打ち合う音、剣戟の音が響くようになり、悲鳴と怒号、熱気と血の臭いがあたりに満ちていった。甲冑と刃のぶつかり合う音に、断末魔の叫びが続く。

じりじりと疲弊しながら、白桜軍はひたすら待っていた。

そのときを。

それは、玉造軍が白桜軍の前面の部隊をじわじわと削り取り、今にも相手の布陣を破ろうとしていたときだった。

「？　なんだ、あれは。船……？」

あと一歩での完勝を確信していた指揮官の耳に、背後からざわめきが聞こえてきた。
怪訝に思った指揮官のもとに、伝令兵が駆けてくる。
「後方、下流よりなにかが近づいてきます！」
「なにかとはなんだ！　敵か？　味方か？」
川べりにいた兵たちが振り返って目を凝らすが、川面には朝霧が立っている。霧の中からぐんぐんと近づいてくる多数の軍船の影。そこに掲げられた旗の色は――。
「――赤！」
一人が叫び、その声が次々に伝えられていく。
「軍旗の色は赤！　紅楓方の軍です！」
「友軍か！」
玉造軍は緊張を解くと共に、なぜここに味方が来るのかと困惑した。
――だがそれは、大いなる間違いだった。
玉造軍が困惑している隙に、川船の船団は次々に彼らの後方に接岸する。そして船の軍旗と同じ色を身につけた兵たちが、上陸するや否や、なだれを打って玉造軍に斬りかかった！
友軍と思って警戒を解いていた不運な玉造の兵たちが、続々と彼らの餌食になる。
さらに接岸しなかった軍船が、川の上から玉造軍の側面に矢の雨を降らせる。
「な……っ、う、うわああああっ!!」

「て、敵襲だあっ！　後方よりっ、川より敵襲！」
「味方じゃない！　あれは、あの軍は――！」
霧の中から現れ出でた軍旗が、ばさりと翻った。
その色は、紅楓の真紅ではなかった。もはや見間違えようはない。色彩は確かに赤系だが、ずっと淡く、鈍く、橙がかった銅のような色。
琅公国の、貴銅大公家の色だ。
「――あれはっ、琅公国軍だあああっ」
驚愕と恐怖の絶叫が上がる。
琅の援軍は、確かに水海からは上陸していなかった。上陸する代わりに、小型で喫水の浅い川用の軍船に乗り換え、河口から遡上して一気にこの戦場に駆けつけてきたのである。
白桜軍が玉造軍をここに誘い出したのも、川から現れる援軍の力を最大限に発揮させるため。
「敵の援軍だ！　琅の軍が攻めてきたぞ！」
来るはずがないと高をくくっていた敵の援軍に奇襲され、玉造軍が浮き足立つ。
それを見逃す冬惺ではなかった。
待っていた援軍、待っていたときの到来に、大音声で突撃命令を下す。
「続け！　勝利は我が手にあり！　今こそ盟友と共に賊軍を打ち破るぞ！」
白桜軍の前面を死守していた徒歩の兵たちが左右に分かれ、その奥から騎兵隊が地響きを立

てて突進する。

「――冬惺公！　我らが冬惺公閣下！」

「――正統の王、春怜陛下のために！」

「――我らが盟友、白桜王家のために！」

今や戦の流れは完全に白桜方のものだった。兵の数ではまだ玉造軍が上回っていたが、それはもう関係ない。勢いを得た白桜軍は、恐慌状態になった玉造軍を猛然と蹴散らし、斬り払い、琅公国軍と呼応して敵の布陣を縦横に切り裂いていった。

――玉造軍が、瓦解する。

その様を、綺理は崖の上から呆然と見ていた。

（お父さまが、負けてる……？）

ずっと冬惺たちの心配ばかりしていたから、こんな事態は想定していなかった。

暗い妖道を落ち続けた末に、唐突にこの崖の上に出たとき、綺理の耳朶を打ったのは戦の喧騒だった。そして最初に目にしたのが、琅公国の船団が彼方から凄まじい速さで遡上してくる光景だったのである。

琅公国軍が動きの鈍い玉造軍の後方を陸上から、側面を水上から攻撃する。そこに白桜軍の騎兵が突っ込み、三方から攻められた玉造軍は見る見るうちに陣形を崩していった。

あれは、あそこにいるのは玉造の民だ。綺理が顔を知っている者も、話をしたことがある者も、きっとたくさんいるだろう。その玉造の兵たちが騎馬に蹴散らされ、槍に突かれ、矢を受けて地に伏していく。血と死の臭いがここまで立ちのぼってくるかのようだ。

（……お父さまも、この中にいるの？　冬惺と翔波は……）

目を凝らしてもこの距離では一人一人の判別はつかない。それでもふらりと前に出ようとすると、つないだままの手を後ろから引き寄せられた。

「駄目だよ。まだ行かせない」

万宵の胸に倒れかかり、背後から彼の腕に拘束される。万宵が、綺理の耳元に口を寄せる。

「今はじっくりと見たまえよ。その玉造の碧玉の瞳に、しかと焼き付けたまえよ。――トウセイが、玉造を滅ぼす光景を」

冬惺が、玉造を、滅ぼす。

万宵はその響きを綺理の脳裏に刻み込むように、ゆっくりとささやいた。

だが――、と、綺理は瞳を凍りつかせて崖下を見つめながら、ぼんやりと思う。

だが、『冬惺が』だろうか。確かに白桜軍は戦場を駆け回り、獅子奮迅の働きを見せている。しかし直前まで彼らは大軍に蹂躙されかけていたのだ。よく頑張って持ちこたえていられた、

とさえ思う。むしろ目に見えて玉造軍を劣勢に追いやっているのは、琅公国軍だ。

銅色の鎧の琅の兵が、緑の戦旗を引き倒して玉造の兵の命を刈り取っていく。琅の銅色が戦場に満ち、玉造の緑を侵食していく。

ああこれは玉造家と琅公国の因縁の戦でもあるのだ——と、綺理はふと思った。

かつて玉造の綺理と琅の明花公女は、冬惺をめぐって争い、最終的に綺理が勝ちを収めた。あのときは女の戦いだった。今は男の戦いで、じきに琅が勝利を収める。

（琅が、玉造を滅ぼす）

その言葉が自分自身の中から浮かんできて、綺理は慄然とした。慄然として、ゆるゆるとその事実を悟った。寂寥が潮のように胸に押し寄せてくるのを感じた。

——滅ぶのだ。このまま大敗を喫すれば数多くの玉造の民の命が散り、玉造の強大な勢力も失われる。玉造家の一族の命は残っても、玉造家という家は破滅し、いずれ取り潰される。父が固執した玉造家は、滅ぶのだ。

怒号と地響き、軍馬のいななきが鼓膜を震わせる。銅色と白の戦旗がはためく。

琅公国軍の怒濤にのまれるように、玉造軍が崩れ去っていく。

（玉造が……滅ぶ……）

——『あなたは、海からの使者が玉をさらっていくのを見送ることになるでしょう』

綺理は明花の占いの最後の一節が脳裏でこだまするのを聞きながら、瑛国最古にして最大の

貴族、北部の大家玉造家の、その終焉を見た。

やがて――、霧が流れてきた。

白い帳が死装束のように戦場を覆い、玉造の滅びゆく様を綺理の目から隠す。

綺理は後ろから自分を抱きしめている万宵に、かすれた声で問うた。

「……万宵。あなた、私にこれを見せたくて連れてきたの……？」

肯定の代わりに、くすくすと笑う声が返ってきた。

「最初の予定では、玉造家にはもっと長く戦火を煽る一翼でいてもらうつもりだったのだがね。少年が君の玉造を滅ぼして、君の仇になるのなら、それも一興と思ったのだよ」

（冬惺が玉造の……私の、仇？）

万宵が綺理の頬に手を添え、自分のほうを向かせてその青ざめた顔をのぞきこむ。

「キリ。君もだんだん、この私好みの表情になってきたな。今の一幕はもう十分楽しめたようだから、今度はもっと愉快なものを見せてあげよう。――と、その前に」

不意に万宵が顔を上げた。綺理の頬から手を離し、虚空に目をやる。

「私のできそこないの分身が来るようだ」

はっとして彼の視線を追った綺理は、その先に一人の童子が現れるのを見た。

「真羅！」

「万宵！　キリの魂をこんなところに連れてきて、いったいなんのつもりだね!?」
童子姿の真羅が、翡翠の瞳を爛々と輝かせて崖の上に降り立つ。
「しばらくぶりだね、もう一人の私。会えて嬉しいよ」
「私が会えて嬉しいのはキリだけだがね。――キリを放したまえ、万宵」
険しい表情で万宵と向かい合う彼に、綺理は冷たいものが背筋を這うのを感じた。
真羅は万宵に近づけば憑依されかねない。二人を会わせてはならないとわかっていたのに、冬惺たちの近くに真羅がいる可能性をどうして失念していたのだ！
いやそもそも、万宵が冬惺の居場所を正確に知っていたと思うほうがおかしい。万宵は冬惺ではなく、その近くにいるであろう真羅を目指して――己と真羅をつなぐ魂の糸をたぐって、この場所にたどりついたのではないか？
（まさか万宵の本当の目的は、私を利用して真羅に近づくこと!?）
「真羅！　逃げて！」
綺理は万宵を行かせまいと、彼の腕に強くしがみついた。
しかし予想に反して、万宵は悠然と真羅に言う。
「そう警戒せずとも、今回は君を乗っ取りに来たわけではないよ。今の君を確実に乗っ取れるかはわからないし、ここで乗っ取ってしまってもせっかくの楽しみが半減してしまうのでね」
「……楽しみ？」



真羅が心配そうな目つきで綺理をちらと見る。万宵はそのかすかな目の動きを見逃さず、見せつけるように綺理の体に手を回した。

「君の惹かれていたものが色褪せて、絆が冷たくひび割れたとき、君の魂がどう揺らぐのか。私はそれを確かめたいのだよ」

「！　万宵、キリになにを――」

真羅がぎくりと叫ぶ。同時に綺理は、凄まじい力で崖のほうに突き飛ばされた。

（――！）

落ちる、と思った。自分が今は魂だけであることを忘れて、身を硬くする。

――だがその一瞬後、綺理の視界は闇に切り替わっていた。

密度と湿度を持った闇の中だ。空を切った腕には、泥をかいたような重い感触があった。

（え？　ここって、妖道？）

妖道に一人で放りこまれたのだと気づいて、次いで万宵の台詞を思い出す。

『今度はもっと愉快なものを見せてあげよう』

（この妖道を抜けた先に、万宵が私に見せたいものがあるってこと……？）

ひどく不吉な予感が胸を襲うが、綺理にはなすすべもない。もがいても落下は止まらない。

綺理は前後を失ったまま、闇の海を沈んでいった。

「そこをどきたまえ、万宵。キリをどこに行かせた？」

真羅は妖道の入り口の前に立ちふさがる万宵を睨みつけた。

――万宵の気配が突然近くに現れたとき、真羅は憑依を恐れて一旦その場を離れた。しかし万宵の気配がいつまでも自分を追ってこないことに不審を覚え、また万宵がなぜ妖道を使ってここに来られたのかを考えたとき、嫌な予感がして、いてもたってもいられなくなったのだ。

そうして駆けつけてみれば案の定、万宵は綺理の魂を捕らえてこの場に連れてきていた。どちらも湿ノ力で仮の姿を作っているようで、体は透けていなかったが、真羅には二人が生身の状態でないことはすぐにわかる。

そして、その綺理は今。

「必死だな、君も。心配せずともこの妖道は一本道だし、行き先もすぐ近くだよ」

彼女を妖道に送りこんだ張本人はひょいと肩をすくめると、不意に酷薄な笑みを口元に刻んだ。七、八歩離れて対峙する真羅を見すえ、翡翠の双眸をすっと細める。

「――真羅。君も知りたくはないかね？」

真羅もまた、同じ色の瞳に剣呑な光を宿らせる。

「『なにを？』と聞き返してほしいのかね？　話したいのならば勝手に言いたまえ。君がなにを知りたくて、キリをこの戦場に連れてきたのかを」

「ならば言おう。私は絆の行方を知りたいのだよ。玉造のキリと、玉造を滅ぼした少年。敵同士になった二人の絆が、どこに行き着くのかを」

子供の姿の妖王と、大人の姿の妖王。二人の間で挑戦的な視線が交錯する。

「無駄だよ、万宵。あの二人が心まで敵同士になることはないのだよ」

「それはどうかな。少なくともあの妖道の先へ行けば、今までほど無邪気な関係ではいられなくなるよ。――なんなら賭けでもするかね？　君は絆が壊れないほうに、私は壊れるほうに」

万宵は喉を震わせて笑うと、真羅がどういうことかと問いただす前に踵を返した。月草の襲の装束を翻し、ふわりと虚空に身を躍らせる。

「私はそろそろ退散しよう。キリからもらった湿ノ力が底をつく前に、器に戻らなくてはならないのでね。――それでは、もう一人の私。いずれまた」

七章　その心を貫いて

霧が立ち込めはじめた頃から、戦況は乱戦となっていた。
遠目には敵も味方も区別できない濃い霧に、飛び交う矢はすぐになくなった。どの軍も陣形を崩し、霧の中をさまよっては敵を見つけて交戦する。
もっとも勝敗そのものはとうに決しており、覆りようはない。今はいわば掃討戦の段階だ。敵を壊滅させるか、潰走させるか、敵将の身柄を確保すれば、戦に終止符が打てる。
だが見通しのきかない戦野を駆ける翔波は、それよりも別のことに気を取られていた。
（この霧はおかしい）
川霧が野に流れ込んできたというには、霧がかかるのが速すぎるし、濃すぎる。
翔波は馬を止めると、片眼鏡の奥で右目を銀に変えた。不自然な霧を睨みつけ、自分の勘が正しかったことを知る。——やはり、ただの霧にしては湿ノ力が強い。これは淵妖の生み出した霧だ。
（万宵が淵妖に命じたのか？　だったら万宵は、玉造軍を助けるというより戦を長引かせたいってことなのか。それともまた別の目的が——）
「鏡作卿！」

名を呼ばれ、翔波ははっと右目を青銅色に戻した。霧を割って現れた白桜軍の武官が、翔波の隣に馬を寄せる。

「ご無事でしたか、鏡作卿」

厳密には翔波はまだ鏡作家の当主権を得ておらず、白桜軍内での立ち位置も冬惺の従者に過ぎない。しかし武官の中には翔波を護国大将軍の補佐役と目している者が多く、彼もその一人だった。いつもの翔波なら『卿』の敬称から訂正するところだが、今はそれどころではない。

「鞍作どの。あなたは突撃のとき冬惺公閣下の隣にいましたよね。閣下は今どこに――？」

翔波は従者として、また乾術師として冬惺を護衛するため、彼の出陣には常に付き従っている。だがさすがに騎兵隊の突撃にまでは同行できない。

この武官が単騎でやってきたときから予想はしていたが、彼は首を横に振った。

「はぐれました。閣下が必要な指示を下し終えたあとでしたが……面目次第もない」

やはり、と翔波は額に手をやりたくなった。だが口にしたのは別件だ。

「そうですか……。ではそれとは別のことで、一つお頼みしてよいですか？　鞍作どのは従四位乾術師でしたよね」

「はっ。乾術師としての任ですか？」

この場にいる白桜軍の中には、正三位である翔波より高位の乾術師はいない。上位乾術師に対する敬意で畏まった武官の横で、翔波は腕を前へ伸ばした。

「――天空を廻る形無き馬、地上に降りて蹄を鳴らせ！」

翔波の手のひらに乾ノ力が集まり、乾いた風となってゴゥと吹き放たれる。

風の渦が前方の霧を吹き払い、そこだけぽっかりと視界が開けた。だがこれがただの霧であればもっと広範囲を晴らせていたはずで、翔波の意図に気づいた武官が息をのむ。

「これは淵妖の起こした霧です。……この土地は湿ノ力が溜まって淵妖の棲み処になっていたのかもしれません。これではいつ霧が晴れるかわからないし、長く湿ノ力を浴びていたら負傷兵の体にもよくない。私も霧を払いながら行くつもりですが、鞍作どのにはほかの乾術師を集めて、協力して霧払いの術を行うようお願いします」

「了解しました。……鏡作卿はどこに行かれるんです？」

翔波は馬首をめぐらしながら短く答えた。

「閣下を捜しに」

味方とはぐれて霧の中を惑ううちに、冬惺は戦場の端まで来ていた。

戦の喧騒は遠ざかり、あたりの草地にも軍勢に踏みしだかれた跡がない。微風がさわさわと草を揺らし、霧がゆっくりと周囲を流れている。

（さすがに離れすぎたな。霧のせいとはいえ、味方を完全に見失うとは……）

これは味方が捜しにくるか通りかかるのを待ったほうがいい。

そう思って馬を止めたときだった。

別の馬の足音と甲冑のすれる音が耳朶に触れ、冬惺ははっと前を見た。

霧の幕の向こうから、一騎こちらに近づいてくる。

まずわかったのは、騎手の豪奢な鎧に施された緑の彩色――敵の色だった。玉造軍の指揮官の誰かだろうと身構え、次いで、琥珀の瞳を大きく見開く。

「影珀叔父上……！」

なんという偶然だろうか。霧の奥から現れたのは、影珀だった。

影珀が馬を止め、薄暗い笑みを浮かべる。

「――冬惺か」

血染めの太刀を構えなおした彼に、冬惺はぐっと顎を引いて言った。

「叔父上、いや、玉造公影珀どの。勝敗はもう決しました。降伏してください」

「して、どうなると？」

「謀反の主謀は大罪ですが、降伏するなら助命できます。私は無用な血を流したいわけじゃない。投降すれば捕虜として丁重な扱いも約束します」

冬惺は自軍に、影珀は生かして捕らえるようにと命じていたが、乱戦ではなにが起こるかわ

からない。まさかと思いつつも身を案じていたので、ここで出会えたのは幸運だった。
しかし冬惺の思いとは裏腹に、影珀は馬の腹を蹴った。
「笑止！　叛した相手におめおめとひれ伏すくらいなら、おまえを玉造の滅びの道連れにしてくれるわ！」
「――影珀どの!?」
猛然と斬りかかってきた影珀に、冬惺はやむなく太刀を構えた。
太刀と太刀とが激しくぶつかり合い、火花を散らす。一撃を弾かれた影珀は、冬惺とすれ違うとすばやく馬首を転じ、再び馬上から斬りかかってきた。
「やめてください！　あなたとは戦いたくない！」
「いっそう笑止！　勝利を得るか、さもなくば戦場を墓場とするのが真の北部の武人よ！」
冬惺は影珀の太刀を危なげなく防ぎ、受け流していくが、防戦一方では埒が明かない。血走った目で何度も打ちかかってくる影珀に、唇を噛んで白刃を閃かせた。
「影珀どの、――御免！」
ザッと、右腕を得物をふるえない程度に浅く斬りつける。
さらに冬惺は、馬を走らせる勢いを乗せて相手の太刀を弾いた。太刀が回転して飛び、影珀は大きく体勢を崩す。
影珀の馬の脇をすり抜けていった冬惺は、背後で影珀が落馬する音を聞いた。

「ぐ……はっ」

振り返れば、影珀が草地に転がってうめいていた。だが冬惺が思わず彼の身を案じたのもつかの間。影珀は闘志の消えない表情で、もう一本の小ぶりの刀を杖に立ち上がろうとする。

（くそっ。……まだ抵抗する気なら、気絶させてでも！）

冬惺は舌打ちし、馬を下りた。武術にかけては、所詮影珀は冬惺の敵ではない。だが鎧を着込んだ相手を気絶だけさせるというのは少々厄介だ。

そう思いながら、影珀のほうに歩みだしたときだった。

突如、影珀の体を紺藍色の光が包んだ。

（――っ！）

彼の全身からねっとりと湿った気が放たれ、あたりの空気が重みを増す。異常を感じとった二頭の馬が、ぶるりと体を震わせて逃げていった。

影珀がゆらりと立ち上がり、血の滴る右腕を見せ付けるように上げる。

「ああ、酷いですねえ、君は。傷がついた。君につけられた傷をふさぐのは面倒なのに」

「な……」

影珀の顔に、影珀が浮かべないようなどす黒い表情が浮かび、冬惺は総毛だった。

凍りついた冬惺の視線の先で、影珀の傷からどろりとした紺碧の泥が染み出してくる。泥と血が混ざり、見る見るうちに傷がふさがっていく。

「ああ、ふさがった。これでよし」
「――おまえっ、大淵妖……！」
冬惺が叫ぶと、影珀の姿をした男がにいぃと口の端を吊り上げた。威厳を備えた影珀とは似ても似つかない、べったりと絡みつくような口調で言う。
「ええ、そうですよ。ようやく気づきましたねえ、真羅さまの《契約者》さん。この私は、淵海の深淵より来たりし大淵妖、『閃耀に禍する者』閃禍です」
「おまえ、叔父上と入れ替わっていたのか！」
かつて明花に化けて入れ替わっていた大淵妖のことが脳裏にまたたく。けれど閃禍と名乗った大淵妖は、にやにや笑いを浮かべながら否定した。
「いいえ。特定の人間の姿を写し取るなんて芸当、幻招にしかできませんからねえ。この身体は正真正銘、君の叔父さんのものですよ。私が憑依して、乗っ取ってやったんです」
「乗っ取った、だと……？　おまえが、ずっと影珀叔父上を操っていたのか!?」
愕然と叫んだ冬惺に、閃禍は爆発したようにけたたましく笑った。
「あっは！　ご明察。君の叔父さんが謀反を起こしたのも、娘を敵に投げ与えて同盟を結んだのも、君を殺そうとしたのも、この男の悪事は最初から最後まで全部私の仕業!!――なーんて言ってあげたら、君は少しは安心するんですか？」
「……っ」

「残念でしたねえ。大淵妖を地上に招くのは人間の強欲。この男は自分の欲望を叶えるために淵海に釣り糸を垂れたんです。君の叔父さんは私の《契約者》。『自分の娘を王妃にしたい』と望んだのは君の叔父さん。私はそのお手伝いをしてあげただけ！」

閃禍は嬉々として語る。

《契約》をしたのは、狩占祭の一件のあと、影珀が玉造の里に戻ったとき。閃禍は《契約》直後に影珀に憑依したが、その時点で彼はもう謀反の意志を固め、計画を進めていたのだと。

「今でこそ私がこの体に馴染んで、完全に乗っ取っていますけどねえ。里で君と会ったときなんかは、影珀のほうが体の主導権を得ていたんですよ？」

それに影珀を紅楓との同盟にまで踏み切らせたのは閃禍だが、影珀は《契約》前から紅楓方の一部と通じていた。閃禍が、空騅を利用して万宵の魂を地上に喚ばせるよう裏で工作できたのも、そうした土壌があったからだという。

（玉造の里の近くの森で淵妖が現れたのも、閃禍が憑いた叔父上がいたせいで里を守る乾ノ力が弱まっていたから……か）

「だが、なぜ影珀叔父上が《契約》の方法を……」

「ああ、いい質問ですねえ。非常にいい質問だ。君はこう答えてほしいんですよねえ、『我々淵海の手の者が、君の叔父さんを騙して行わせた』と」

にやにや笑いが深くなり、冬惶は太刀を構える手のひらに汗がにじむのを感じた。——大淵

妖は嘘つきだが、真実が刃になるときはあっさりとそれを暴露する。今もその予感がした。
「ねえ、君。考えてみませんか？　この男の家は玉造家。神宝と秘術を持つ鏡作家と違ってなんの権威の源もない玉造家が、古来繁栄していたわけ。《契約》に必要な物は――勾玉」
（――――！）
閃禍の言わんとすることを悟って、冬惺は戦慄した。
――なぜ、気づかなかった。真実は初めから冬惺たちの目の前に見えていたのに。
冬惺たちが真羅との《契約》に使った勾玉は、玉造の里の周辺にある禁域の洞窟にあったのだ。そこに勾玉が隠されていた意味を、なぜ考えなかった。
勾玉は古代、玉造の里で作られていたのだ。玉造家は勾玉を作って、おそらくは使っていた。だからその危険性を知り、しかし破棄するには惜しいと思って禁域に隠した。
（俺たちなら気づけた。気づくべきことだった。もし《契約》の方法が今もどこかで伝えられているとしたら、可能性が一番高いのは玉造家だと――！）
鏡作家の当主が代々秘術を継承しているように、玉造家の当主も代々《契約》の秘密を受け継いでいたのではないか？――連綿と、最後の当主、影珀の代まで。
「ああ、いい顔だ。実にいい顔だ。君もようやく気づいたようですねえ」
冬惺の顔から血の気が引くのを見て、閃禍が満足げにうなずく。
「それでは余興はそろそろ終わりにしましょうか。さて――」

「！」

閃禍が刀を手に地を蹴り、一気に冬惺との距離を詰めた。

鋭い音が響き、白刃が絡み合う。

「――淵妖を斬れる君の力、邪魔なんですよねえ。それにせっかく国の有力者を乗っ取って人の世をもっと乱そうと思ったのに、君のせいでおじゃんになるし。ここでその返礼、させてもらいます」

交差した刃の向こうで、閃禍はにぃと笑った。

繰り出される斬撃を、弾いて防ぐ。

閃禍と斬り結ぶ冬惺の脳裏では、いつかの真羅の言葉がぐるぐると回っていた。

『普通、淵妖は生き物には憑依しないのだよ。生き物に憑りつくとだんだん体が混ざって、淵海に還る以外の方法では離れられなくなるのでね』

（――くそっ。どうすればいい？）

影珀は、閃禍に憑依された。彼らを引き離すには、閃禍を淵海に還すしかない。

だが淵海に還すということは、閃禍の――影珀の体のどこかにある勾玉を斬るということだ。

冬惺にはその場所を見破る力はないし、もし見破れたとしても、そこが致命的な部位でないという保証はない。

「……っ、叔父上！　影珀どの！　目を覚ましてください！」

五合六合と刃を合わせながら、すがる思いで叫ぶ。せめて影珀に体の主導権を取り戻させて、その間に両者を分離する方法を探れないだろうか――と。

そんな冬惺の悪あがきを、閃禍は鼻で笑った。

「だからこの男の自我はもう残っていないんですって。そりゃさすがに家族と一緒にいるときは、騙しきる自信がないのでこの男を表に出していましたがねえ。当分会わなければ多少人が変わってもばれませんし――ということで、出陣したあとは私が完全に乗っ取ってやったんですよ。君がお望みなら、さっきみたいな演技くらいはしてあげてもいいですけどねえ？」

閃禍の刀の切っ先が冬惺の鎧をかすめ、硬質な音がする。

あくまで影珀の体を使っているからか、閃禍の剣技は決して冬惺をしのぐものではない。けれど彼の体が影珀のものだと、綺理の父親のものだと思えばこそ、冬惺の太刀筋は鈍る。

（どう、すれば……っ）

「――すみません、叔父上！」

冬惺は横薙ぎの一閃を身を低くしてかわし、閃禍の足元を薙ぎ払った。

足を斬りつけられて、閃禍がどうと倒れる。

が、冬惺が相手の動きを封じる方策に迷っているうちに、閃禍の手のひらで紺藍の光が渦巻いた。至近距離から湿ノ力の塊が放たれ、冬惺は後方に吹っ飛ばされる。

それでも冬惺は即座に受け身を取った。衝撃を殺して着地し、すばやく身を起こす。だが。

「甘いですねえ。ひょっとして君、私をこの男から引きはがしたいんですか？――だったら一つ、この男を斬らずにすむ方法がありますよお？」

――とっさに心を揺らしたのは、不覚としか言いようがない。

そのわずかな隙に、閃禍が再び紺藍の光を放った。

「っ！」

光の帯を斬り払うのは、間に合わなかった。紺藍の光をまともに食らい、冬惺は草地に数度転がってうつぶせに倒れる。

「……っ、く……」

体が軋むが息を継いでいる暇はない。地面に肘をついて、手からこぼれた太刀を追う。

しかし右手が柄に届いたとき、その腕を踏みつけられた。ぎくりと顔を上げれば、足の傷を治した閃禍が目の前に立っている。

「君が私に殺されれば、私はほかの大淵妖の《契約者》を手にかけた業で淵海に戻される。そうすれば私とこの男を分離できますよ？」

にたりと言って、閃禍は両手で高々と刀を振り上げた。

「まあ私もそれはまっぴらですから、君の両腕だけもらいますけどねえ――」

（――！）

刀鉾がきらめき、冬惺の顔面から血の気が失せる。

まさにその瞬間。

閃禍の動きが、びくりと止まった。

凍りついたように動きを止めたまま、彼の顔から表情が抜け落ちる。その口元が戦慄くように動く。彼の碧玉の瞳に強い意志の光が宿るのを、冬惺は見た。

「心の、臓だ……」

紡がれた言葉に、冬惺は琥珀の瞳を大きく瞠った。

彼が、影珀が、冬惺を見すえて威厳に満ちた声で叫ぶ。

「やれ、冬惺！　玉造の栄光――たとえ血に褪せようとも、泥に汚すまじ！」

（叔父上――！）

苛烈な光が碧玉の瞳から消える。

それはこの瞬間永遠に失われたのだと、冬惺は悟った。

「あ……あああああぁ――っ！」

託された意志が炎となって、冬惺の内奥で燃え上がった。

渾身の力を振り絞って、閃禍の足の下から右腕を引き抜く。硬直が解けた直後でぼうっとしていた閃禍は、体の均衡を崩して後ろによろめいた。

冬惺は太刀をしっかりと握ってはね起きる。

――影珀は、玉造家に伝わる秘術が《契約》だと知らずにやったのだ。だから彼は悔やみ、玉造家が滅びようともその名を、その誇りを、《契約者》の汚名で穢すなと頼んだ。

頼み、頼まれた。ただそれだけだった。決意も覚悟もする暇はなかった。とにかくこれは、今この場で、冬惺がやらねばならないことだった。それがすべてだった。

閃禍が愕然と目を見開き、刀を構えなおす。その様がひどくゆっくりとして見える。相手に先んじて一歩踏みこむ。太刀の切っ先を相手の左胸に向ける。今なら鎧の胸当ても貫けると、直感的に知った。

『やれ、冬惺！』

その言葉に突き動かされて、冬惺は絶叫した。

「影珀叔父上ぇえええ――っ!!」

鋭い切っ先が影珀の左胸に吸い込まれ、冬惺は体当たりするように彼の心臓を刺し貫いた。

――心のどこかで、彼の姿が紺碧の泥の柱になって淵海に還る光景を想像していた。

着用者の放つ湿ノ力で弱っていた鎧を突き砕き、玉を斬る確かな感触が手に伝わってきたとき、かつて大淵妖を淵海に還したときのことを思った。

「――――！」

影珀の喉から、言葉にならない叫びと紺碧の泥があふれ出る。

彼の姿が一瞬膨張して見え、全身から湧き出た紺碧のもやが滝のように地面に吸い込まれていく。

けれど大淵妖の残滓が消えたあとも、影珀の体はそこにあった。

冬惺の太刀は、依然として彼の左胸を貫いて背中に抜けていた。流れ出た血が刀身を伝い、冬惺の手を濡らす。よろめくように後ずさると、太刀がずるりと抜けて、影珀の体がどさりと地に伏した。

「あ……」

血が噴き出る。泥によってふさがれていた腕と足の傷もまた開き、あふれ出た血が草を染めて広がっていく。あたたかい血がとどめようもなく流れ出し、冷えていく。

そこにあるのは、覆りようのない死だった。

玉造の影珀は死んだ。冬惺が殺した。この手に、生々しい死の感触がこびりついている。

（俺は……俺が、叔父上を……）

遅れて、綺理の父親を手にかけたという実感がどっと迫ってくる。

そのときだった。

「冬、惺……？」

名を呼ぶ声が耳に届いた。ここで聞くはずのない声に、冬惺はえ、と顔を上げる。声にわずかに遅れて、視線の先に一人の少女が忽然と姿を現した。

（――!?）

まばたきしてもその姿は消えない。まるで大淵妖のように虚空から現れた少女が、ふわりと草の上に降り立つ。誰よりも愛しくて、誰よりも逢いたくて、今は誰よりも逢いたくなかったその姿に、冬惺の瞳が限界まで見開かれる。

「綺……理……」

冬惺の手から血濡れの太刀がすべり落ち、からんと音を立てた。

見つめあった瞬間は、永遠のように感じられた。

なぜ綺理がこの場に突然現れたのかはわからない。だが目の前にいるのが夢や幻ではなく本物の綺理だと、それだけはわかった。

夢で焦がれていた綺理よりも、今ここにいる彼女のほうが綺麗だった。

戦野にありながら血にも土ぼこりにも汚れていない純白の装束に身を包み、別れたときからまた少し伸びた長い金の髪を微風にそよがせている。

冬惺は彼女の髪に触るのが好きだった。

触り心地のいい髪をぐしゃぐしゃにするのも、そうすると彼女がちょっと怒ったように口をとがらせるのも、そんな彼女の髪に指を差し入れて丁寧に梳くのも、頭を優しくなでると彼女がくすぐったそうに顔をほころばせるのも、みんなみんな好きだった。

いつもいつも手を伸ばしたのは、金の髪がとても綺麗だったからだ。

だけど、今は。

（綺麗だから――もう触れない）

冬惺の両手は綺理の父親の血で濡れている。触ったら汚してしまう。罪に汚れた手では、彼女に触れない。

綺理の碧玉の瞳が、冬惺を見つめている。たった今この手で命を奪った男と同じ色の瞳が、返り血を浴びた冬惺を映して大きく見開かれている。

「冬惺！　その血……怪我したの!?」

止まっていた時が動き出して、綺理が駆け寄ってくる。心から心配そうな声と表情に、冬惺は目をそらした。

「……違う。これは、俺の血じゃない」

冬惺の前で立ち止まった綺理が、ほっとしたように息をつく。それから彼女は、冬惺のかたわらに転がっている死体に気づいた。それが誰かを知って、愕然と声を震わせる。

「……お父、さま……？」

（――っ）

その声に、冬惺は胸を貫かれるような痛みと苦しさに襲われた。

ずっと戦っていたのは、綺理のためだった。綺理をこの手に取り戻すためだった。そのためなら手段は選ばないと宣言し、戦だから仕方ないとはいえ実際に玉造軍を壊滅させた。――だけど、こんなことになるなんて。

手を伸ばせば届く距離にいる綺理に、手を伸ばせないまま、冬惺は顔を背ける。どこか呆然としたまま、かすれた声でぽつりと言う。

「……俺が、殺した」

はっと綺理がこちらに顔を向けるのを、気配で知る。きっと彼女の視線は、冬惺の鎧や両手を染める返り血に注がれているのだろう。

綺理が震える声でつぶやく。

「だから……」

だからそんな血まみれの手をしているの、と。

そうなじられると思った。覚悟をした。

――けれど。

「だから、そんなに悲しそうな顔をしているの……？」

すべてを包み込むようなその言葉に、冬惺の胸が大きく震えた。

ゆるゆると顔を向けると、綺理と目が合った。彼女はまっすぐに冬惺を見上げていた。彼女も悲しそうな顔をしていたが、その瞳にあったのは弾劾でも諦念でも安易な許しでもなかった。自分の視線が冬惺を追いつめてしまわないかと、恐れているようなまなざしだった。

冬惺はそのまなざしにすがるように、震える息をついた。

「……ああ、そうかもしれない……」

――自分は、どこかおかしいのだろうか。

綺理は、痛みをこらえるような表情の冬惺を見つめながら、頭の片隅でそんなことを思っていた。

父親の遺体のそばで、父親の死を悼むよりも、血の涙を流している冬惺の心を慰めたいと思っているのは、自分の心が麻痺しているからなのだろうか。単に父の死が、自分の中でまだ現

実味を帯びていないだけなのだろうか。

最初に父の遺体を見たときもそうだった。割れた胸当ての下から自分の作った守り袋がのぞいているのを見て、ああ父は結局あの守り袋を捨てずに持っていてくれたのだ——と、場違いなことをぼんやりと思っていた。

父と冬惺の間でなにがあったのかはわからない。どんなやりとりがあって、なぜ冬惺が影珀を生かして捕らえることができなくなってしまったのかは。

確かなのは、冬惺がひどく悲しそうな顔をしていて、その声がひどく苦しそうで、その瞳が強い罪悪感に染まっていることだった。

彼はかつて、綺理たちを禁忌の《契約》に巻き込んだとして己を激しく責めたときも、こんな顔をしていた。七年もの間、負い目を抱え続け、しばしば咎人のような表情を見せた。

綺理は彼にそんな辛そうな顔をしてほしくなかった。

いつもいつもそうだった。——今も。

「冬惺……」

なにがあったの、とただ問うだけでは、その言葉が刃になってしまう気がした。今は、自分の声に彼を責める響きが混じらない自信がなかった。

だから、手を伸ばした。

そのままの彼を包んであげたかった。自分は冬惺を嫌いになったりはしないと、なにを聞い

てもそれだけは確かだと、先に伝えたかった。

「――冬惺」

彼の顔を両手で包むように、手を伸ばす。彼がかすかに身を震わせて身構えるのを寂しく思いながら、彼の頬に触れ――ようとして、その指先がすり抜けた。

触れられない。

そう悟ったのと同時に、綺理はどこからかぐんと強い力で引っ張られるのを感じた。

（冬惺！）

時間がたてば魂と体をつなぐ糸に引っ張られて体に戻る――。

そのことが脳裏に閃いた瞬間、眼前から冬惺の姿が消え失せ、綺理の視界は暗転した。

その指先が冬惺の頬に触れるか触れないかした瞬間、綺理の姿がかき消えた。

現れたときと同じように唐突に、なんの気配も残さずに。

「綺、理……？」

冬惺の手が無意識のうちに、綺理のいた空間をかいた。けれどそこは初めから誰もいなかったかのようで、彼女の体温の名残さえなかった。

そばにはただ、影珀の死体だけがあった。――だが、今のは。

（今のは夢じゃなかった。……確かに綺理だった）

綺理は冬惺を責めなかった。手を伸ばそうとしてくれた。それが冬惺の救いだった。けれど冬惺にはもう、綺理の母が死んだときのように、彼女の頭をなでて慰めてやることはできない。玉造を滅ぼし、綺理の父を殺し、彼女から多くのものを奪って傷つけたのは冬惺なのだから。

（俺は、綺理を取り戻す戦いはやめられない。だが紅楓方の手から綺理を解放しても、俺にはもう……）

――もう、綺理に好きだと告げて、求婚する資格などない。

冬惺は自戒の言葉を胸に深く刻んで、血でぬめる拳を強く握った。

霧を生み出していたのは閃禍の仕業だったのか、あれほど濃く立ち込めていた霧が急速に晴れていく。戦はもう終わりだろう。

やがて翔波が主人を捜す声が聞こえてくるまで、冬惺はその場にじっと立ち尽くしていた。

彼に触れたかった。彼に触れてほしかった。互いの熱を感じて――たぶん、そう、互いの熱

で慰めあいたかった。けれどそれは、魂だけの逢瀬には許されなかった。

綺理は寝台の上ではっと目を覚ました。

自分の体に戻ってきたのだ。四肢が冷えて少し痺れている。寝室は朝日が入って明るく、寝台の上には赤い花びらがたくさん散っていた。

（――!?）

先ほど見た鮮血をまざまざと思い出してはね起きると、桂鈴がおろおろとやってくる。

「申し訳ありません、姫さま。朝日をお入れしようとしましたら、風で窓辺のざるの花びらが吹き飛んでしまいまして……」

すぐに片づけると言った桂鈴に、綺理はゆっくりと首を横に振った。

その顔色がよほど悪かったのだろう。桂鈴が心配げに問うてきた。

「姫さま。悪い夢でも見られたのですか……？」

「……ううん。なんでもないわ」

見たのは現実だった。ここから遥か遠い、南部の戦場でのこと。

いずれここにも報せが届くだろう。――玉造軍の大敗と、玉造公影珀の戦死の報が。

（……っ！）

父の死がにわかに現実感を伴って迫り、綺理は胸が押しつぶされるように苦しくなった。

だがまだ嘆くことはできない。この離宮でそれを知っているのは、綺理だけなのだ。

気遣わしげな桂鈴に、あたたかい飲み物を持ってきてくれるよう頼む。彼女を出て行かせて一人になると、綺理はかすかに震えながら寝台の上で膝を抱えた。

血まみれで横たわっていた父の姿が、脳裏に鮮やかに蘇る。父の遺体が身につけていたあの守り袋を思い出して、綺理はいやがうえにも胸がしめつけられるのを感じた。

（いらないって言っていたのに……お父さまは、私の守り袋を持っていてくれた……）

無事でいてほしい、生きていてほしいと、祈りながら作った守り袋。父は綺理のその思いを、ちゃんと受け取ってくれていたのだ。

――なのにその心は、あの守り袋ごと刺し貫かれてしまった。

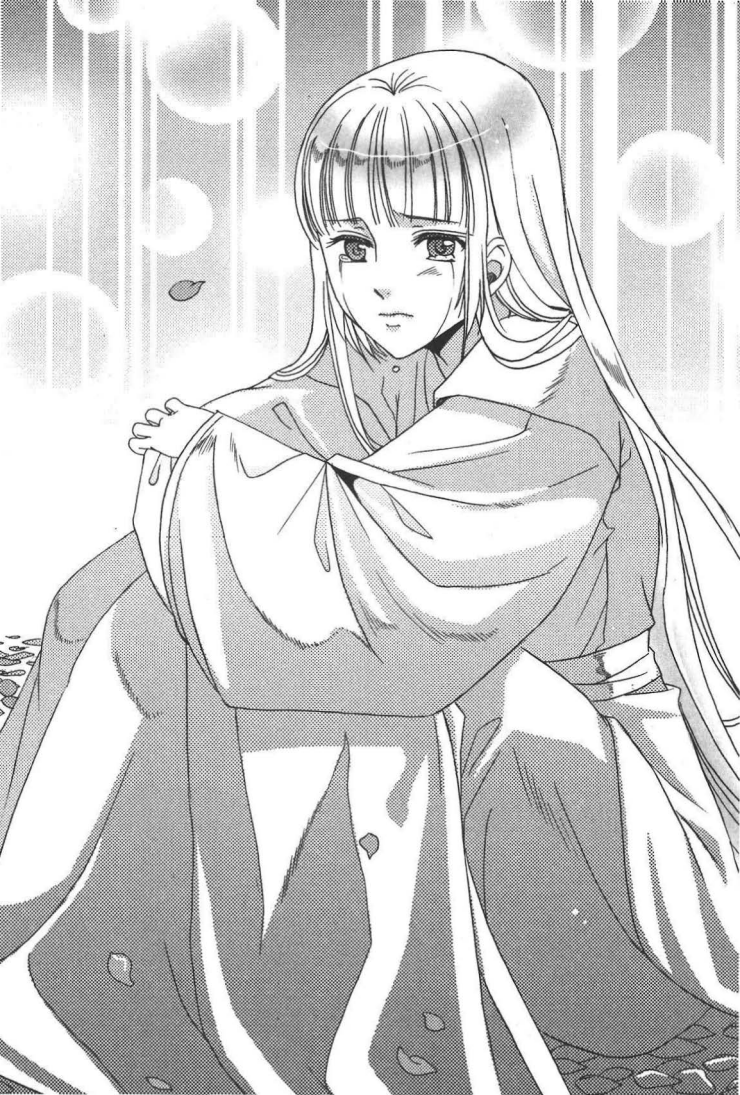
父の左胸に納められていた守り袋は、真ん中を無惨に破られてあふれる血に染まっていた。

冬惺の太刀は、綺理の守り袋の真上から父を貫いたのだ。父を守りたかった綺理の願いを貫いて、父の命を散らしてしまったのだ。

（……、お父、さま……っ）

こらえきれなかった涙が、ぽたりと落ちて袖を濡らす。

心の中では、整理のつかないさまざまな思いが渦を巻いていた。貴様は父親の死を祈るかと言った朔秋。冬惺は綺理の仇になったと言った万宵。生前の父の声や姿が脳裏に浮かんでは消える。――それでもその中には、今なお褪せることのない冬惺への想いがある。



「冬、惺……」

綺理はその名の響きを、唇(くちびる)で切なくなぞる。

――寝台に散る血のように赤い花びらが、まるではかない逢瀬の名残のようだった。

あとがき

こんにちは、薙野ゆいらです。

おかげさまで、『金蘭の王国』シリーズも四冊目までやってまいりました。

シリアス度が増して、〝ラブコメ、改め、ラブロマンス〟となってきたような気がする第四巻。表紙もロマンス路線まっしぐらですよ！　うはー。

副題も、いくつか考えた中から一番ロマンチック寄りなものを選びまして、「君想う夜に夢の花は咲く」です。……な、長くてすみません。内容的には玉造家のお話が裏メインなので、『玉』の一字もどこかに入れたかったのですが、さすがに思いとどまりました。これ以上長くしてどうする……。

そして前巻のあとがきで「次で山を迎えます」と書きましたが、山には来たけどまだ下山していない、という状況でしょうか。今巻は、次の最終巻と二冊で一組のつもりで書いたので、どうも事件が終わったような気がしない……というか終わってない……。

どうぞ、最後までおつきあいいただければ幸いです。

ところで、この『金蘭の王国』という物語は、初期構想から二転三転していたりします。

最初に担当女史に提出したプロットでは、冬惺のほうが主人公だったのですよ。
しかも、一冊で今巻のラストの内容までいくことになっていました。一冊で。
……。
あの頃の私は、いったいなにを考えていたんでしょう。
久しぶりにその初期プロットを読み返してみたら、あまりのぎゅう詰め具合に呆然としました。（真空パックで圧縮して詰め込んでも、絶対に入りきらないよ！）
その後の打ち合わせで物語のカラーを大幅に変更したため、その初期プロットはお蔵入りに。シリーズ構成を今の形に整理して話の流れを作り直し、設定や登場人物をねりねり練って新プロットを作っていきました。
そしてその新プロットもそろそろ完成——という段階まできたところで、ふと思い立ったのが、「あれ？　これって筋はそのままで、主人公は綺理にしたほうがいいんじゃない？」。
……土壇場でプロットを綺理主人公に書き換えた結果、今の『金蘭の王国』があります。
あのとき思い直してよかったです。本当に、本当に……！
さて、そうやって物語の表層は初期構想からあれこれ変わったのですが、このシリーズで書きたいことというのは、実はまったく変わっていません。そのどうしても書きたかった一連の流れに今巻から突入し、ずっとあたためてきたあのシーンやこのシーンをようやく書けたので、執筆中一人でこっそりしみじみしておりました。

今は、読んでくださった方々がどう思われるかなあというのにドキドキなのですが。

最後に、お世話になった方々への感謝を。

イラストレーターの香坂ゆう様。可愛らしくも素敵なイラストを、いつもありがとうございます！　表紙のラフ画をいただいたときには、「ラブラブですよ！　ツーショットで二人の世界ですよ！　それに冬惺が綺理の髪に触っているのが……！（かたわらで机をバンバン叩く）」と、担当女史との電話口で大興奮でした。ひそかにイラスト指定の希望を出させていただいたあのシーンのイラストも、楽しみにしております。

担当様。毎度のことながら、的確なつっこみとアドバイスをありがとうございます！　もし作者が暴走しすぎていても、きっと手綱は担当様が取ってくれますよね！……という、安心感だか開き直りだかによって、今回は特に筆の勢いに任せて執筆していた気がします。

そしてなにより、本書をお手に取ってくださった読者の皆様に心からの感謝を。

願わくは、最終巻でもお目にかかれますように。

薙野ゆいら

「金蘭の王国 君想う夜に夢の花は咲く」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「薙野ゆいら」先生・「香坂ゆう」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」
までお寄せください。

金蘭の王国
君想う夜に夢の花は咲く

薙野ゆいら

角川ビーンズ文庫　BB62-7　16081

平成22年1月1日　初版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――暁印刷　製本所――BBC
装幀者――micro fish

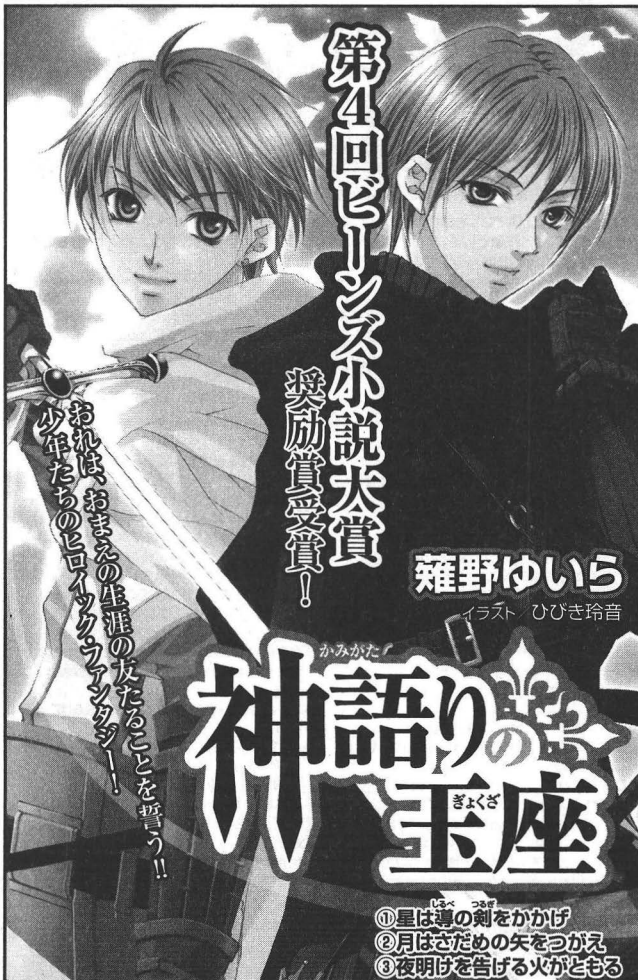
本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-452707-5 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Yuira NAGINO 2010 Printed in Japan


雍野ゆいら
イラスト／香坂ゆう
この王国は、大切な人たちは、わたしが守る!!
豪華絢爛アジアン・ファンタジー!
金蘭の王国
①君とはじまりの約束を
②恋の嵐は王宮に吹いて
③月満ちる鏡の里へ
④君想う夜に夢の花は咲く
大貴族の姫君・綺理は、親の決めた婚約者・冬惺のことがひそかに気になっているのだが、全然意識されていないのが悩みの種。そんな中、王国では淵妖と呼ばれる妖の被害が続出。綺理は冬惺たちと共に淵妖退治のために奮闘する——!!

●角川ビーンズ文庫●


第4回ビーンズ小説大賞
奨励賞受賞！
おれは、おまえの生涯の友たることを誓う!!
少年たちのヒロイック・ファンタジー！
雁野ゆいら
イラスト　ひびき玲音
神語りの玉座
①星は導の剣をかかげ
②月はさだめの矢をつがえ
③夜明けを告げる火がともる

●角川ビーンズ文庫●

第9回 角川ビーンズ小説大賞
原稿大募集!

大賞 正賞のトロフィーならびに副賞300万円と応募原稿出版時の印税

角川ビーンズ文庫では、ヤングアダルト小説の新しい書き手を募集いたします。
ビーンズ文庫の作家として、また、次世代のヤングアダルト小説界を担う人材として世に送り出すために、「角川ビーンズ小説大賞」を設置します。

【募集作品】
エンターテインメント性の強い、ファンタジックなストーリー。ただし、未発表のものに限ります。受賞作はビーンズ文庫で刊行いたします。

【応募資格】
年齢・プロアマ不問。

【原稿枚数】
400字詰め原稿用紙換算で150枚以上300枚以内

【応募締切】2010年3月31日(当日消印有効)

【発　　表】2010年12月発表(予定)

【審査員】(敬称略、順不同)
あさのあつこ　椎野道流　由羅カイリ

【応募の際の注意事項】
規定違反の作品は審査の対象となりません。

■原稿のはじめに表紙を付けて、以下の3項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 原稿枚数(ワープロ原稿の場合は400字詰め原稿用紙換算による枚数も必ず併記)

■2枚目に以下の7項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 氏名(フリガナ)
④ 郵便番号、住所(フリガナ)
⑤ 電話番号、メールアドレス
⑥ 年齢
⑦ 略歴(文学賞応募歴含む)

■1200字程度(原稿用紙3枚)のあらすじを添付してください。

■原稿には必ず通し番号を入れ、右上をバインダークリップでとじること。原稿が厚くなる場合は、2～3冊に分冊してもかまいません。その場合、必ず1つの封筒に入れてください。ひもやホチキスでとじるのは不可です。(台紙付きの400字詰め原稿用紙使用の場合は、原稿を1枚ずつ切り離してからとじてください)

■ワープロ原稿が望ましい。ワープロ原稿の場合は必ずフロッピーディスクまたはCD-R(ワープロ専用機の場合はファイル形式をテキストに限定。パソコンの場合はファイル形式をテキスト、MS Word、一太郎に限定)を添付し、そのラベルにタイトルとペンネームを明記すること。プリントアウトは必ずA4判の用紙で1ページにつき40字×30行の書式で印刷すること。ただし、400字詰め原稿用紙にワープロ印刷は不可。感熱紙は字が読めなくなるので使用しないこと。

■手書き原稿の場合は、A4判の400字詰め原稿用紙を使用。鉛筆書きは不可です。(原稿は1枚1枚切りはなしてください)

・同じ作品による他の文学賞への二重応募は認められません。
・入選作の出版権、映像化権を含む二次的利用権(著作権法第27条及び第28条の権利を含む)は角川書店に帰属します。
・応募原稿及びフロッピーディスクまたはCD-Rは返却いたしません。必要な方はコピーを取ってからご応募ください。
・ご提供いただきました個人情報は、選考および結果通知のために利用いたします。

【原稿の送り先】〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3
(株)角川書店ビーンズ文庫編集部「第9回角川ビーンズ小説大賞」係
※なお、電話によるお問い合わせは受け付けできませんのでご遠慮ください。

9784044527075

ISBN978-4-04-452707-5
C0193 ¥476E

定価：本体476円（税別）

1920193004762

BEANS BUNKO

金蘭の王国
君想う夜に夢の花は咲く

雉野ゆいら

婚約式を行うため玉造の里に帰った綺理と、王弟の冬惺。だがなんと綺理の父・影珀が王に謀反を起こし、二人は敵同士となってしまう！　思い出の夢雪草が咲く中、引き裂かれる二人。ようやく綺理への想いを自覚した冬惺は、別れ際「必ずおまえをさらいに行く！」と叫ぶ。その言葉を信じ気丈にふるまう綺理だが、父により強引に、別の男との政略結婚が決められてしまい――!?　政治的陰謀に巻き込まれた恋人達の運命は…急転直下の第4巻！